

# 淨土

特輯

念佛讀本

十一月號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)

第二卷 第十一號



# 法然上人法語抄

藤井實應編  
菊半裁版 一四四頁  
クロース装函入  
定價 卅四錢  
送料共

信仰の珠玉！ 浩翰なる上人遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句！  
現代日本人の聖典！

手頃なポケット型、装訂も確りしたものですから、仕事の合間、電車、自動車の中で手軽に取出して讀める。心靜かなる時、惱める時、隨時隨所に讀めて心の糧となり生活の指針となる。

敬虔な編者が一字一拜の誠を捧げ、嚴密な校訂を経てなつたもの。配列にも、編輯にも新機軸を開き、活字も九ポイント總ふり假名付であるから誰にも讀める！  
勤め人も商人も勞働者も、そのポケットに懷中に必ず一本を蓄へて信仰の眞髓に接して正しい生活の確立に資して下さい。

再 版 出 來 !!

◇ 會 仰 鑽 人 上 然 法 所 行 發 ◇



# 法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三十四錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我々が祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてゐる。

讀んで得られよ！ 正しい信仰を！

## 目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩贐の被方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。三第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歴訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇





◇浄土第十二卷十一月號 目次◇

・表紙……………井上正春

・目次カツト……………鈴木金平

念佛の意義……………文學博士 椎尾辨匡 (九五)

生死……………中村辨康 (二)

死佛……………佐藤賢順 (一八)

本佛……………大野法道 (一〇)

大正大學  
教授

信と……………眞野正順 (一五)

念佛の集……………石井教道 (五九)

大正大學  
教授

社會生活……………笹本戒淨 (六)

……………島野禎祥 (二)





女 家

庭 生

活 性

淨土宗  
教學部長

江藤 澁英

(八四)

佐藤 春夫

(九三)

一枚起請文

小西 存祐

(一〇)

小 消 息

稻垣 眞我

(一一)

法然上人著作

選擇本願念佛集

井川 定慶

(一二)

良慶和上の臨終

文學博士

矢吹 慶輝

(一三)

聖な願行を領納する

梅原 眞隆

(一四)

強 緣

松浦 一

(一五)

裸 坊 德 本

中野 英善

(一六)

編輯後記

(一七)



盛に讀まれ

中村古峽著

新刊

書!!

# 迷信に陷るまで

擬似宗教の心理學的批判

ひとのみち、生長の家、天理教等の擧げは詐欺心理と同一だと斷じ、其他夢遊病、つきもの、狐つき、神隠しの變態心理から迷信に陷る年齢、性別、職業、素質等を精神醫學の立場から解剖したるもの。——著者は曾て大本教を壊滅させたる因を作りし斯界の權威。

四六判 三二〇頁  
價 壹圓  
送 十錢

加藤咄著 四六判 三二〇頁 價 壹圓 送 十錢

# 死後はどうなる

人間一度は必ず死ぬ死を知る者こそホントウに生きる者だ。死及び死後の問題は何か。此の千古の疑問を解いて身の越く所を得て、眞に生き、人として生きがひのある生活をなせ。本書は、咄堂居士が、明快に平易に、然も東西古今の死及び死後を説いて興味津々たり。此の書を讀めば、胸につかえたかたまりがとれ、スツキリする心地になるとは必定だ。——此の世に生を受けたる者、必ず此の一本を讀まれよ。

## 佛敎よ觀るた 正信と迷信の區別

迷信橫行の折柄、其の辨別の尺度を知るは現代人の常識。執筆者は各宗派の代表重鎮。  
△佛敎思想より觀る 推尾辨區  
△天台宗より觀る 二宮守人  
△眞言宗より觀る 加藤精神  
△淨土宗より觀る 大野法道  
△禪宗より觀る 山田靈林  
△眞宗より觀る 江部鶴村  
△日蓮宗より觀る 馬田行啓  
△社會學的に觀る 本莊可宗  
四六判 三百卅頁  
價 一圓卅錢 送 十錢

## 倉田百三著

四六判 四百五十頁  
一圓五十錢 送 十錢

信仰讀本

## 親鸞聖人

### 宗教文藝の最高峰

「出家とその弟子」に示された

深刻な内觀を麗筆を以つて新に書き下した傑作。國寶御傳鈔中の廿數篇を、その文に對應せしめて錦上更に花を添ふ。親鸞教徒たると否とに拘らず、余大衆にとの名作を薦む。

島影 盟著

四六判 百七十頁  
六十錢 送 六錢

## 墓相と心靈問題

人間の肉體的歸處としての墓は極めて重要な役割を持つ、されど最近流行の墓相學とは何か……この問題で困つてゐる人は直ぐ一讀せられよ。其他現今流行の心靈問題を批判したる快書!

宗教界・醫學界十二名家執筆

## 新興類似宗教批判

四六判 三百卅頁・價 一圓 送 十錢

高島米峰序 島影 盟 著

## 現代人擬似宗教の真相

四六判 三百四十頁・價 一圓 送 十錢  
滔々たる無知蒙昧なる擬似信仰を以つて人心を惑亂し、蘇財に飽くなき類似宗教の内幕を觀よ。兩書ともその正體を剔抉して餘す所なし。

發行所

大東出版社

振替東京一九四七一番

東京芝公園七ノ十



淨  
土

念<sup>ねん</sup>

佛<sup>ぶつ</sup>

讀<sup>どく</sup>

本<sup>ほん</sup>

十一月特輯號



生<sup>せい</sup>

中村 辨康

## 人 生 篇

人生と理想

利 財

□望みのない人生は、空洞に均しい。

随つて望みなき人は一日も生きては居られない筈である。

此の世に生を受けて居る限り、如何なる者も、希望を持ち、理想を持つ筈である。  
たとへ、それが何んな形であらうとも。

□だが、一般的にそれらは官能的な極下等な夢か、一時的な名に對する幻かに過ぎない。



名

譽

先づは金か。名か。之が兩大關でもあらう。

現實生活を豊かにする爲めに、何んな人でも、金に對しては血眼になり勝である。

物體ぶつた賢者でさへ「恒産なきものは恒心なし」などとも云つて居るではないか。

それをまた慾の淺くない連中が、金科玉條のやうに、自分の金蓄め主義の莊飾塗料に轉用して居る。

見て見るがよい。

無信仰な我利一點張りの人達に一人として恒心ある者があつたであらうか。

虎の爪を磨ぎ、狼の牙をむく。

其處に何んな恒心があるのであらうか。

或は「子孫の爲めに」とも云つて居る。

果して其の子孫達が幸福であつたであらうか。

其處には唯だ苦勞が残されて居るだけだつたのである。

□名譽にしたつて、やはり同じである。

苦心して高い社會的地位を得たところで、そんなところに人生の本當の幸福などはあ

りはしない。

煎じつめて見れば、皆な夢の中の笑ひにしか過ぎない。



愚痴ぐち——ところおろ

かしきこと

橋慢きょうまん——たかぶり

果はたして本當ほんたうの人生じんせい

汗膏尿あせうしの身み——き

たない此この身み。  
願ねがひ——いかり。

得えて了しまへば、却かへて苦勞くろうの種たねが増なすだけである。

そして更に隴ろうを得えて蜀しやくを望のぞむ氣きも起おこつて、却かへて望のぞみの爲ために身心しんしんを焦こすのである。  
何處どこに人間にんげんの幸福かうふくがあつたであらうか。

□金かねなき者は金かねに憂うれひ、金かねある者は金かねに憂うれふ。

名ななき者は名なに憂うれひ、名なある者は名なに憂うれふ。

丸まるで貪慾とんよくに驅使くしせられて、愚痴ぐちか橋慢きょうまんかの間まを往來わうらいし、奔命ほんめい之れ事こととして道みちには勞くたれ  
てしまふのが落おちである。

偶々たまたま現在の地位ちゐや財産ざいさんに満足まんぞくし得えても、子こなきは子こあらんと望のぞみ、子こあれば子この爲ために  
悩なやむ。そして家内かないに風波ふうはが起おこり、親類しんるゐにゴタゴタが生うれる。

何邊どつちにころんでも苦勞くろうは絶たえはしない。

□然しかかも内うちを省かへりみれば汗膏尿あせうしの身みを抱いだいて、徒らいたづに食じふを求もとめ、捷かちを追おひ、疑惑ぎわくと  
瞋恚しんにとの中うちに、空むなしく煩悶はんもんし懊惱おうなうして居ゐるのである。

之これが果はたして本當ほんたうの人生じんせいなのであらうか。

何處どこに人生じんせいの貴たかさがあるのであらう。

何處どこに人生じんせいの得難えがたさがあるのであらう。



人間の取り柄

□健康や膂力の上からは、獅子や象に比すべくもなく、壽命長生の上からは松杉千年の壽に匹敵すべくもない。

心の動搖しない事は山嶽にも及ばず、物に拘泥しない事は河水にも及ばない。色彩の艶美なる事は花鳥に及ばず、相好の端麗なる事は工藝品に及ばず、音聲の律呂は虫鳥に及ばず、動作の精微は機械に及ばず。何處を選み出しても、山家育ちのローズ品ばかりではないか。

□だが、何處かに何か取り柄がありさうなものである。人間の人間たるところが。そして人間でなくてはあり得ないところが。

ある。ある。

何處に。

偽をつくのがうまいことか。

そんな惡の華ではない。

では、算盤勘定の上手なことか。

そんな功利的なものではない。

では、戀をさゝやくことか。

そんなのは虫の世界にだつてある。



## 正しい人間生活

## 萬物の靈長

では、屁理窟をこねることか。

成程、それは人間特有のものらしいが、そんな煩瑣なくだらないものではない。

では、眞實を求め、藝術を創造し、道徳を行ふことか。

成程、それらは人間でなくてはかなはぬ崇高なものかも知れない。

然しそれらは夫々の部門に分れて居て、全一的なものでもなく、且つ萬人に適應して

も居ない。

然らば何だ。

イヤ、事は簡単なのである。即ち、人間が本當の人間になること、人間が本當に人間らしい生活をする事、其事である。

□正しく人生を完うすること。

其處に大眞實があり、大藝術があり、大道德がある。

此の正しき人生なくして何の眞理探究があらう。

此の正しき人生なくして何の藝術創造があらう。

此正しき人生なくして何の道德躬行があらう。

□考へて見るがよい。生物最高の進化の極は、人體である。人心である。



## この身の心

單細胞生物から幾百萬年の長年月と、幾千億萬の命とを費し、數へ盡せない苦悶苦闘をつゞけて、人類にまで到達したのは、單に人間をして我儘勝手な事をやらせる爲のものではない。幾多の天地を積み重ねても尙ほ足りない程の大犠牲を盡くして、肉體的にも精神的にも完全に近い人間と云ふ一類の生物を作り上げたのは、人間をして人間たらしめる爲めに外ならないのである。

夫れは實に大自然の意志力の然らしめたものであり、大自然の奥に内在する大精神動力の然らしめた結果である。

よし、假りにそれが大意志力と云ふやうなものでないとしても、其數へ切れない幾千億萬の大犠牲に對して、深く想ひを致しそれに報ゆるところがなければ、それは本當の「耻しらず」であり、「大痴漢」であつて、是程大きな罪惡はないと云つてよい。だからこそ、せめては私達人間が正しい人間生活を完ふすることその事が、是等の大犠牲に對する萬分の一の報恩行であらう。

□此身は成程今の處、罪惡の結晶と云へやうが、此身なくしては、善を積み徳を累ねる事は出来ない。

此心は成程今の處、醜惡の巢窟かも知れないが、此心なくしては、人生の歸趣を明かにし眞生を開顯する事も出来ない。



冥

加

して見れば、人生に於ける智育も徳育も體育も情操涵養も、皆な悉く人間をして本當の人生を行はしむるところに、眞實の目標がなくてはならぬ。

□此心をして眞實に生かしめ、此身をして眞實を行はしむる。

此處に人間生活の尊嚴さがある。

□況して私の今日あるは、幾多の生物を殺し、幾多の生物の肉を喰ひ血を吸つたからである。米の一粒も完全に生きたものでなくては甘くはない。野菜の一束も完全にその漿液が流れて居たものでなくては甘くはない。野菜も穀類も其生きた肉生きた血を人間に提供し、生きて居た命までも人間に與へて、人間の生を保たしめて居るのである。

其恩恵に對して何の報ゆるところもなく、手前勝手な我儘ばかりしてのさばつて居るならば、既に冥加に盡きたものであり、冥加を恐れざる人間なのである。だからどうせ祿な終末をしないことは、知れ切つた事である。

□少くとも萬物の精髓が集つて骨となり髓となり肉となり血となつて居るのである。



## 身心の大維新

## 人間精白

少くとも萬有の靈髓が凝つて智慧となり感情となり意志となつて居るのである。だから此身をくだらなく單に一日のばしにのばして居るだけならば、それ丈萬物の精髓を空費して居るのである。

そして此心をくだらなく浮いては消え、消えては浮ぶつまらない欲求に使役させる丈ならば、それ丈萬有の靈髓を犬死させて居るのである。

□茲に思ひを深くして、私達の身體と精神とに「大維新」を斷行しなければ、本當に折角人間になつた甲斐がない譯である。

今迄ヤクザ者であつただけに、一層「注意力」を働かして反省し批判し覺醒し轉進して、正しく人生を完ふすべきである。

かくして始めて白道は坦々として拓け、平安健全なる生活が打ち立てられるであらう。さも無くしては糟を去り糠を取つた眞白な米の飯にはなり得られまい。

心の穢れを去り、行ひの垢を無くなす「精神維新」こそ、人間をして正しき人間たらしむるものであり、人間ならずしてはなし能はぬ聖なる行動である。

## 念佛篇

□人間が正しい人間生活をなし遂げるに就ては、此の生活の中の糟を取り去り糠を



## 人格の轉換

戒法||精神生活  
の規準  
戒體||戒法の實體  
靈格の確立をさす

取り去らなくてはならぬが、現代のやうな煩瑣なそして鋭敏な物質文化の濁流の中にあつては、餘程の努力と忍耐とがなくては出来ぬことである。

普通の状態で、かうした心づかひは中々出来る譯のものではなく、結局一日延ばしに延ばして仕舞つて、どゞのつまりまでやらないじまいになるのである。

それは畢竟さうしなくても、何うやらかうやら生活して行けるからであり、正しさや完全さを要求する氣持はあつても、當面の事に追はれて、思ひ切つて改善する強い心がないからである。

其上社會意識や良心の正義觀と云ふ律法的なものには、嫌やな壓迫感があつて何うしても手が出ししより勝だからでもある。

□佛教で謂ゆる戒法と云ふものは、人間生活の規準を云つたのだが、それには「戒體」を獲得しなくては駄目だと云つて居る。戒體獲得とは人間生活をなす中心が、今迄とは全然違つたものに置きかへられたことである。

つまり放蕩息子が心から悔ひ改めて、眞人間になつたことであり、人格轉換したことである。

放蕩無頼な息子が本心から改心するには、良心に攻められて翻然として懺悔すると云ふ場合もたまにはあるかも知れないが、多くは、親の慈悲に感泣して悔ひ改めると云



宗教訓練

祈禱

坐禪

戒定 || 戒法と禪定

ふのが定法のやうである。

□だから、一般的な生活を改善するには、其人の精神的中核が轉換する程の感激がなくてはならない。

さもない限り、たとへ決心したところで一時的な氣まぐれに終る事にもならう。かうして精神中核の轉換は、中々普通の道德的な律法や良心などで、出来る筈のものではない。

□そこで何うしても宗教訓練と云ふものが必要になつて来る。

即ち祈禱とか坐禪とか觀法とか念佛とか云ふものがそれである。

祈禱には二通りあつて、病氣が癒るやうにとか相場が上がるやうにとか云ふやうな功利的なものもあるが、それは本當のものではない。

正しい祈禱は神の如き心、佛の如き心に、我が心をあらしめたいために、神佛の加被護念を祈ることである。

坐禪にも二通りあつて、精神統一して虚無的空觀に入り人生から超越してお高くとまつて居やうとする獨善的なものもあるが、それは本ものではない。

正しい坐禪は戒定の二つの訓練を以て人格統一をなし自我見から脱落して公正な人間



觀くわん法ふ

念ねん佛ぶつ

正しい信仰しんかう

生活を打ち立てんとするところにある。

觀法にも幾つかの種類がある。本當のものは正しい宇宙觀人生觀を獲得することである。ところが兎もすれば異常變態に墮ち易く、禁厭祕法を行つて謂ゆる淫祠邪法が産れ勝ちである。

念佛にも色々なものがある。眞言陀羅尼風に用ゆるもの、災難除けの雨傘流のもの、貯金流義のもの、苦しい時の神頼み風のもの、極樂行きの切符代用にするもの、精神統一の催眠術代りにするものなど、考へるとまだあるかも知れない。

然し本當の念佛はそんなものではない。刻々に自分を反省し、念々に正しさを求めて行く完全な宗教訓練法の隨一である。

即ち念佛の中には自ら正しい祈りもあり、正しい坐禪もあり、正しい觀法も含まれて居るからである。

□正しい信仰は平常正態の中に顯はれて來なければならぬ。神經衰弱的な變態に依て得たものは曲歪された信仰である。

また、中正穩健な姿でなくてはならぬ。逆境難局の中から生れたものは異常なものであり病的信仰である。

第三には金剛不壞なものではあるが、一種の固陋偏執であつてはならない。信根は確



信進 || 信仰と精進

念佛の優越

固として居て、しかも日々に新らたに信進開發されて行く可き筈のものである。つまりは素直に天地の大道に一致して行く可きもので、小休みをして居る状態のものでは斷じてない。

□また祈禱や坐禪や觀法やは大體に於て先づ以て場所の選擇がある。一定の時間がいる。形式が要る。準備教養が要る。服裝も改める必要があり、心がまへも普段と替へなくてはならぬ。

即ち何處で何時誰が何んな事を何の位やると云ふ必要條件がなければならぬのであるが、念佛では何處でも何時でも誰でも何んな姿でも何れ位でも、何等の制限がないのである。

初めは仕事し乍らの念佛でも、

遂には念佛の中の仕事と變つて来る。

即ち念佛は、佛の生活に歸一せんとする運動だからである。

念佛の威徳

□念佛して居ると、自ら心が素直になる。随つて段々自己が拙り下げられる。

自己が拙り下げられると自ら佛への信が感激の中に盛り上つて來、そして生活が段々淨まつて来る。



## 念佛の根源

それは恰度拙ぬき井戸の水源が深ければ深い程、高く清冽な水が豊富に吹き出ると同じ理である。

□念佛して居ると何故心が素直になるのか。

念佛の中には全然自我的な意味がないからである。初めは自己流の自我的な念佛であつても、それは心と念佛とがチグハグになつて落着くことが出来ないから、次第に心の奥の本心が落着きを要求して、自然に自我的な氣持を訂正させるからである。

□また一方には自ら天地の大恩大力大生命を感じて来る。闊い氣持が薄らぎ、明るい氣が伸び上がつて来る。それは何故だらうか。

□念佛は元來大宇宙の綜合的意志としての「願態」から流出して來たものだからである。

即ち天には日月星辰が寸時も倦むことなく蒼生を照らし育てて居る。適當に光線と熱線と化育線とを以て、直接にも間接にも偉大な「働き」をなしつゝある。



阿彌陀無量の  
意法藏阿彌陀佛の  
前身の名

願態と願望

報恩行

地にはまた、水や風や空気や土壤やの有らゆる設備を以て草木が繁り鳥獸生じて、米  
麥蔬菜、鶏牛蠶蜂、それらの一切を捧げて人間への恵みを惜しんでは居ない。  
然かも其恵みの中に居らしめて、其上に果しなき生命と限りなき幸福を望ましめて居  
るのである。

此の人間のみに與へられたる本當の望みは「無量壽」と「無量光」との源泉として、  
天地間に「阿彌陀」の「願」が充滿し、しかもそれを一法藏菩薩の卓越せる洞見に依  
て、四十八の本願として表示され、其本願表示の中心と、人間願望の中心とが凝つて  
一つとなつて、遂に「念彌陀法」たる「南無阿彌陀佛」が産れ出たのである。

□かくて天地を包む「願態」が「阿彌陀佛」を表現し、人間の有する「願望」が  
「南無」の信仰意志となつて遂に「念佛」と云ふ形式が開顯されたのだから、其の中  
には自然に天地の大恩が感じられ、天地の大力が感じられ、天地を貫く如來の大生命  
が感じられる譯が含まれて居るのである。随つてそれは一時的な感激ではなく、永遠  
の感謝となるものである。

□恩を知つて恩を報じないものは、天地の大道にはづれて居るから、結局亡びるよ  
り外に行き方はない。



## 眞實の念佛

随したがて天地てんちの大道だうだうに依よつて生いかさされて居ゐる限り、如來にょらいの大生命だいせいめいに随順ずいじゆんして、人間生活にんげんせいふくを正ただしき上うへにも正ただしくして行くのが、本當ほんたうの報恩行ほうおんぎやうであり、天地てんちの大道だうだうに一致いちする行動かうどうでもある。

□此處ここに眞實しんじつな念佛ねんぶつがある。

□私達わたくしたちの行爲かうゐは口くちと身みと心こころとの三みつより外ほかにはないが、心こころを表現へうげんするものは言葉ことばであり、行爲かうゐを決定けつていするものは言葉ことばである。だから心に佛ぶつを念ねんじ、身みに覺醒生活かくせいせいふくをするのも念佛ねんぶつではあるが、それを表現へうげんしそれを實行じつかうさせる最も基礎きそ的なものは口くちに出だす念佛ぶつである。

それは恰あたかも軍隊ぐんたいに於おて、號令かうれい一つで數萬すうまんの精銳せいゑいを行動かうどうせしむる道理だうりに均ひとしいものである。

□まだ全體ぜんたいを統率とうそつする程ほどの訓練くんれんを経て居ゐない一兵卒いへいそつが、直ちたてに號令かうれいを以もつて全隊ぜんたいを動かうごかすことが出来でないやうに、まだ信仰しんかうを得えて居ゐない者が一遍ぺんや二遍へんの念佛ねんぶつで人間生活にんげんせいふくを正ただしくする事は困難こんなんかも知れないが、段々だんぐん自分の心こころが念佛ねんぶつに依よつて訓練くんれんされて來くれば、自然しぜんに正ただしい生活せいふくが打ち立たてられるのは火ひを見るよりも明あかである。



## 念佛と人生

□かくて私達は念佛に依て次第に明るくなり本當に幸福になり、随て永遠の生命を自覺し、人生最高の幸福を味ふことが出来るのである。

□私達は人生を讚美しよう。

そして淨らかな白道を念佛と共に行進しよう。

□念佛と人生。

これが一つになつた「念佛の人生」。

其處にのみ本當の生きる力を發見する筈である。

其處にのみ本當の人間の望みが達成せられる筈である。

讚むべき哉、念佛の生活。

讚むべき哉、念佛の人生。

◇佛典說話全集 全十三冊揃 窪川 拾五圓

◇國譯一切經 全百五十五冊揃 窪川 百拾圓

古本宗教書籍目錄

最近古書時報

御入用の方は各冊とも送料二錢づゝ御送附を乞ふ。

電話小石川三七七〇番

東京市小石川區白山前町

振替 東京五七三七番

窪川書店



死<sup>し</sup>

佐藤賢順

編輯部から私に與へられた題目は「死の宗教哲學的考察」といふのであつた。大變に難しい問題で、こんな面倒な事を書いてみたところで、讀んでくれる讀者も少いであらうし、またさう手易く書けるものでもない。茲ではなるべくさういふ問題には觸れないことにしよう。

× × ×

凡そ何事を書くにしても、多少なりとも経験したところでなければ書けるものではない。藝術家は空想の翼に乗つて澤山の人物を自由に躍らせて、架空の事柄を巧みに如何にもありさうに作り上げてゐるやうに見えるが、其の基礎には、それを作り上げる経験がちやんと用意されてゐるのである。その経験なり體驗なりが感情的に移入さ



## 確實な運命

れて、作品の人物に息吹が通ふのである。ところが「死」といふやうな事柄になると、誰もこれを経験した人はない。實際に死の一步手前まで追ひつめられて、そこから蘇へつた人も極めて少ない。そのやうな経験を持つた、極めて稀な人に、體驗を聴いてみても、その死の経験は無意識と殆んど同じことである。まして全然経験しない事に就いて何か書くといふのであるから、これは大變に困難なことに相違ないのである。一步誤れば、それは一種の戯畫になつてしまふ。事柄が重大であるだけに、扱ひ方を誤れば、それは物笑ひになつてしまふ。

然し考へてみると、誰もこれを自分自身で主觀的に経験した事はないのであるが、客觀的に見ると、これほど確實な運命は、またと他にはない。私は自分の死を経験したことはない。然し、私は他人の死を數多く経験してゐる。父を喪つた。祖父を喪つた。祖母を亡くした。親友に訣れた。恩師に逝かれた。主觀的には死は経験できないが、客觀的には無數の死に遭遇してゐる。少くとも毎日の新聞に死亡廣告と自殺・心中・他殺・轢殺・自動車事故・飛行機の墜落・火藥の爆發・風水害の殞死等々の記事のあるだけ、それだけ私達は客觀的には死を経験してゐる。

物事には何事によらず例外といふ事があり得るものである。例へば一つの法則を立てたとしても、その法則は不確かであればあるほど、例外といふものが着き纏ふ。自然科學的な法則には例外は少い筈であるが、それが假設である間は、例外が皆無だと



## 死の逆説性

は言へない。文化科學、歷史科學になると、例外はさらである。寧ろ例外の方が多い位である。然し死といふ現象は、東西古今を通じて一つの例外もないのである。私達は他のものの死を例外なく経験できた。佛教の根本命題は「諸行無常、一切皆苦、諸法無我、涅槃寂靜」といふ四つの原理であると言はれる。佛教とは何か……と問はれるとき、昔からこの四つの句を以つて答へることになつてゐる。その第一句の「諸行無常」といふのは、勿論廣い意味に解釋されて「一切の現象は變化する」といふ意味であるが、その一つの表現として、人は例外なく他のものゝ死を経験する、といふふうにも言ひ變へられるであらう。

ところが、不思議なことには、他のものゝ死を、私達は例外なく経験してゐる癖に、自分の死だけは例外であるかのやうに思ふ本能を持つてゐるのだ。死が自分にとつては迫眞の現實ではないといふ迷妄が、絶えず私達を曇らせてゐる。今の世の中で、端から見てもこれほど死に暴されてゐる職業はないと思はれる飛行家でも、自分だけは墜落したり空中衝突したりすることは絶対にないと信じてゐるさうである。

他のものゝ死を経験できるが、自分の死を経験することはできない。といふ點に死の第一の逆説性があるが、更に、他のものゝ死を宿命として肯定できるが、自分の死をさう信ずることはできない、といふ點に、死の第二の逆説性がある。

然しその逆説性、矛盾は容易に解くことができる。それは死を生物學的な現象とば



## 宗教的な死

かり考へるからである。生物學的な死を、私達は何としても自ら経験することはできない。経験した時には、既に私達は生物學的に死んでゐる。従つて、それを経験した、と言ふことができない。然し他のものゝ死を、人間にしる、犬にしる、猫にしる、大切に飼つてゐる小鳥にしる、金魚にしる、または「いのち」の値打ちをずつと引下げて、盆栽にしる、その死を私達は経験することができさうであるからこそ、他のものゝ死は必然的な宿命として肯定できる。

そこで「私」の死に就いては、生物學的とか自然科学的とかいふより他の考へ方が成り立たなければならぬであらう。「私」も亦、主觀的に死を経験できる。然しそれは生物學的な死ではなく、何か別の言葉で呼ばるべき死である。死線を超えろとか、大死一番とか、小我に死して大我に生きるとか、言はれる時の死であつて、假に宗教的な死と名づけておかう。

生物學的な死は、單に消極的な意義しか持ち得ない。それは凡てのものゝ終りである。そこで凡てが消えるのである。人も、生き物も草も木もそこで無に歸するのである。これに反して、宗教的な死は、極めて積極的な意味を持つてゐる。それは凡てのものゝ始りである。そこでより豊かな新しい生が目を開くのである。

死によつて終焉する生と、死によつて始まる生とは、無論同じ層面の生ではない生物學的な、自然科学的の生は死と共に終焉するが、死と共に始まる生は、更生とか新



恐怖の克服 || 宗教の誕生

生とか忽然大悟とか頓證菩提とか即入無生とか言はれる意味での、宗教的な生である。それは必ずしも生物學的な生の終るところに始まるのではない。もともと死の考へ方が二通りあるべきなのであるから、生物學的な生が死を通して宗教的な生へ繋がる、といふのではない。二つあるべき死の概念を一つと思ひ誤るとき、生物學的な生が死を通してそのまゝ宗教的な生に連續する、と考へたくなるのである。然しさうではない。生の二つの概念は、死の二つの概念と同じく、先にも述べたやうに、層面を、次元を異にしてゐる。生物學的な生は、個體的で、終焉へ向つて絶えず進み動き、無に歸するのであるが、宗教的な生は、全體的で、終焉を持たない。それには、生物學的な生や死とは無關係に、輝かしき榮光が約束されてゐなければならぬ。

× × ×

死は言ふまでもなく恐怖である。然し乍ら凡ての死が恐怖として感じられるのではない。既に述べたやうに、ひとは他のものゝ死を避け難き宿命として肯定するにも拘らず、自分の死だけは急速にはやつて來ない、いづれは來るが、それは遠い先の事である、と考へる本能を持つてゐる所に、死の第二の逆説性があるのだが、その死が直接の事實として意識されるとき、即ち、私達の心の上に死の影が色黒く投げかけられるとき、恐怖感が油然而として湧き起る。その恐怖の克服——こゝに宗教が誕生し、發心といふ氣分の轉廻が行はれる。その恐怖の克服は、誠に悽愴なる闘争である。生



## 本能から脱出

やさしい修行ではない。自然の法則との血みどろの闘争である。生物學的な人間を蟬脱しようとする荒行である。食欲を、睡眠慾を、所有慾を、性慾を、名譽慾を——個體本意のあらゆる生物學的な慾望や本能を克服しようとする自然性との格闘である。「腹背相觸るゝ」ほどに瘦せ細つて、漸く樹の枝に身を支え乍ら尼連禪河に浴みしよとする釋尊のお姿。尻の切れた泥だらけの藁草履で道中をなさる法然上人の御足の痛々しさ。巖頭に立つた徳本行者の身に纏つた粗衣は、はげしい水垢離の爲であらう。若布のやうに千切れて、その間から疵だらけの、血の滲んだ肌が見えてゐる。生物學的な生から宗教的生へ覺入する爲の不斷の闘争が續けられてゐる。

ニーチエは「人間は約束することのできる動物である」と言つてゐる。その意味は、人間と動物の違いは、將來についての自覺を持てるか持てないかにあると、いふのである。人間同志は「明日一しよに散歩に行きませう」と約束できるが、人間と犬とはそんな約束ができない。毎朝きまつて犬を連れて散歩しても、犬の方では約束したからでなく、習慣的に、本能的に着いてくるだけの事である。未來の事について或る心構へをする——それが人間が他の生物と異なるところである。當然迫り来る生の黄昏を意識して心構へをする。慾望や本能にはまり込んでゐる犬や猫のやうな生活では、生活そのものが本能であり慾望であるから、未來を眺めることはできない。未來を眺めるには、慾望や本能から脱け出でなければならぬ。動物は生活の環境の中にはいり込



## 死の恐怖

んでゐるが、人間はそこを脱け出でて、それを眺めることができる」とマックス・シ  
エーラアが言つてゐるのも、同じ事である。

未來、それは現在と過去とを豫想してゐる。現在や過去なしに未來はない。それは  
時間といふ事と同じである。こゝで、死といふことには、時間の考へがはいつてこな  
ければならないが、細かな話になるから省略することにしよう。

× × ×

宗教は死の恐怖に始まると言つた。恐怖とは未來についての心構へから起きる。フ  
ォイエルバッハが「死がなければ宗教はないであらう」と彼一流の曝露的な宗教批判  
から言つてゐるが、警戒して受取るべき多くの點があるにしても、この言葉は一面に  
於いて正しい真理である。

私達の先達は誰れも皆、死の克服から出發した。日本佛教の、特に平安・鎌倉の  
時代の先覺達の第一の問題は「生死」であつた。如何にして「生死」を脱け出でるか  
であつた。「われはなにによつて生死にはとゞまれるぞと、はづべしはづべし、かなし  
むべし、かなしむべし」と法然上人の御法語にも見える。「速かに出要を求めてむなし  
く歸ることなかれ」と教へられた。出要は生物學的な生死を離脱する要道である。  
道元禪師は教へてゐる。「無常迅速なり生死事大なり。且く存命の際だ、業を修し學  
を好まば、只佛道を行じ佛法を學すべきなり。」「無常迅速なるを忘れて徒らに世事に



## 恐怖から克服へ

煩ふこと莫れ。露命の且く存せるあひだ、佛道を思ふて餘事をことゝすること莫れ」  
 (正法眼藏隨聞記)。道元の態度は、一事一藝を専らにせんとするにさへ、鈍根劣器の  
 者はかなふべからざるに、まして生死といふが如き一大事に處するに、四方八方に手  
 を出して、文筆詩歌、顯密の聖教などあれもこれもと多般を兼學するは以ての外であ  
 ると、事態の核心へ迫つてゆく。

更に私達は、親鸞上人や一遍上人の態度が全くこれと同じ所に發足してゐること  
 を見たいが、今はその餘白を持たない。

× × ×

死に對する恐怖感は年齢によつて異なる濃度を持つてあらう。言ひ換へると、それは  
 生命力、慾望の強さに正比例するであらう。年を老つてから後生を願ふといふのは、  
 よく言はれることであるが、それは生に對する止を得ざる諦めからであつた、實際は  
 生命力の旺盛な間こそ、死に對する關心も痛烈である筈である。東西の大祖師達の足  
 跡を顧みるならば、その發足はいづれも二十代三十代の青壯年の時期になされてゐる  
 のを知るであらう。

茲で、幼年の死、青年の死、老年の死と色々な死が考へられる。幼年の死は無意識  
 の死である。青年の死は最も意識的な、生命力と死との戦ひの間に於ける死である。  
 老年の死は必然的な宿命についての諦めの死か、或は又、自然性との長き闘争の後に



擱んだ死よりの超越である。

去年の丁度今頃は、私の六つになる子供は、醫師から十のうち十まで殆んど見込みはないと宣告されて、慶應病院の一室で一日一日とその日の迫り来るのを待つてゐなければならなかつた。私には、神宮外苑の芝生が黄ばんで、繪畫館ドームが淺黄色の空に浮んでゐるのが、別の世界のやうに見えてゐた。子供は死ぬことについて何か知つてゐたであらうか。まだそんなに病氣の進んでゐなかつた夏の頃のこと、湘南の海岸へ療養にやつて置いた。私が尋ねてゆくとよく外へ遊びに出たが、抱いたり背負はせたりして、松原を通つて砂丘を超えて海岸へ連れてゆく事があつた。その松原の中に朽ち果てゝはゐたが古墳らしいものがあつた。子供はそれを氣味悪がつて「幽霊が出る？」と訊いたことがあつた。何かそんな事の意識や恐怖を幾分持つてゐたのであらうか。全く無意識に死んで行つてくれたのならよかつたが、と時々考へることがある。

九年程前に私は親友の一人を亡くした。彼は三高から東大の佛法科を出た白哲度軀の秀才型の青年で、學校を出た年に、高文の試験準備に夜に日に次いで心身を傾倒してゐる時、寢着いてしまつた。その翌年の春、或る夜重態だといふ報せを受けて、そんな病勢だとは少しも知らなかつた私は事の意外に慌てゝ馳せつけて、彼の枕頭へ滑りよつた。もう呼吸の數が非常に多くなつてゐた。その苦しい喘ぎの間から「お



い！俺はもう一度立上るよ。今死んだつて死に切れるかい。」さう決然と言ひ離つた。然しまたふつと突然に、胸に迫る不安を吐き出すやうに、「おい！死んだらどうなるんだい、一體？」と私の眼を見上げた。その眼は、好い加減な事を言つたつて駄目だぞ、と私を責めるやうであつた。どんな私達の言葉も彼は受けつけなかつた。別室で家の人に訊いてみれば、もう一度立上れる容態では決してなかつた。その時に、何一言彼をほんとうに安らかにさせてやる事の言へなかつた私は、何時かは彼の靈に詫びたいと思つてゐた。

尾上蟹十郎丈は菊五郎門下の中では名代役者で、その一種性格的な藝風が人氣を呼んで、一座には無くてはならぬ人であつた。最後の當り役は長谷川伸氏の「暗闇の丑松」の中の一役であつた。この人の曾祖父の兄になる人が、私の寺の住職であつたから（勿論私など未だ生れない頃の話である）、今でも蟹十郎丈の一家とは特別親しくしてゐて、村田嘉久子さんなど三人の妹さんとも親類以上の交際になつてゐる。蟹さんのお父さんは篤信の念佛信者であつた。自分の家にお寺のやうな佛間を作つて、そこで法話を聴きお經を習つた。三部經などよく讀んださうである。

蟹さんは梨園の人に有り勝ちな無理と不養生が祟つて、今年になつてから床に着いて七月頃にはもう醫師に見離された。死をはつきりと自覺してゐた。死に直面したとはよく聞く言葉であるが、この人程にはつきりとそれを意識して、チリ／＼やつてく



るその日を待つてゐる人も少なかつたであらう。

八月の或る日、彼の病床を見舞ふと、顔は白蠟のやうに血の氣を失つて、身體も全く動かせなかつたが、病人とは思へぬ元氣で、捲し立てゝ惡態をついてゐた。「この通りですよ」と言つて、枕頭にある珠數を取り上げて「暇さへあればこれですよ」と言つた。

——うちの親爺はぬ、あつし達の小さい時から「人間は安心立命といふ事が一番大事だ」と年中言つてゐた。あつしはそれを忘れない。死ぬ時に慌てるのは見つともないやね。何時死んだつて思ひ残すことは何もありませんよ。子供があるぢやなし、財産があるわけぢやなし。今までにやりたい放題の事は大ていもうやつてきたからね。死んだつて一寸も淋しかない。墓の中には親爺も妹も皆んな待つてゐるからね。あれはうちぢや誰の臨終の時でも床の間に懸けることに定めてある——  
 と言つて顎を動かして床の間を示した。床には私の寺の何代前かの和尚が贈つた「南無阿彌陀佛」が懸けられてゐた。

——もういけないから辭世を作つちやつた——  
 懸軸の傍に短冊が立てかけてある。

蟹一つ蓮の葉に乗る夏の池

——戒名も自分で作つた。これでいいですか。あつしの名も親爺の名も母の名



も妻の名も皆一字づゝ入れてある——  
成る程、皆の名が一字づゝ案配されて、短冊に書かれて辭世の隣りに立てかけてある。

この人は死に對して、洒々落々、まるで死を弄ぶやうである。

——死んだらお通夜だの葬式だの止めてくれ。極樂へ行つて芝居をするんだから、送別會にしてくれ——

そんな事も言つたさうである。もう愈々駄目だと聞いて菊五郎が見舞つたとき、珍問答が取り交はされた。

「蟹さん、お前さん死んでも俺の所へ化けて出てきちや厭やだぜ」

——どう致しまして。こつちが怖くつてとても行かれない。夜なんかとても出られない。出れば晝間ですな——

死にはいり込んでゐるのでなくて、死を眺めてゐる。餘裕綽々として自らの死に對してゐる。それは蟹さんの性格にもよらう、現在の環境にもよらう、然しその後、さうさせる力がなければならぬ。幼少の頃から教へ込まれてゐた力のお蔭でなければならぬ。

幼年の死、青年の死、老年の死、死の性格はそれぞれに違ふ。私達は澤山の死を見た。然し蟹さんの死の如きは、最も朗らかな死であらう。



# 佛ほとけ

## 大野 法 道

### 一、佛ほとけの 問 題

佛ほとけといふこと

佛ほとけとは何か

佛ほとけの正しい見方

佛ほとけといふことの起おこりが釋尊しよそんであるのは言ふまでもないが、釋尊しよそんのどこが佛ほとけなのかといふ所に問題もんだいが始まる。佛教徒ぶつこうとにあつては、信仰しんかうの第一對象だいいたいが佛ほとけであるから、佛ほとけとは何か、いかなるものとして佛ほとけを見るかといふことは、何時いつの時代じだいにも常に新らしい課題かだいとして提起おこされ、何人なにびとも一度は考へて見なければならぬことであるに違ひない。

佛ほとけは、それを見やうとする人々の心の眼まなこに、限りなく自由に、種々に映り出られるであらう。が、しかし先づ、經典きんてんに説かれ、古への菩薩達びさつたちによつて教へられ、各宗の祖師方そしがたが感得かんとくされた佛ほとけの意義いぎが正しい見方であり、且つ標準へうじゆんとなるべきであることは



大乘經典に現は  
れた諸佛の主なる  
もの

彌勒佛の信仰

法身

三身説

如來

言ふまでもない。

大乘の經典には多くの異つた佛が説かれる。華嚴經の盧舍那佛、阿閼佛國經の阿閼佛、淨土の三部經（無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經）の阿彌陀佛、藥師本願經の藥師如來、大日經の大日如來などは、最もよく知られてゐる佛である。

昔は彌勒佛が信ぜられたこともあつたが、有名な法華經の久遠實成の釋尊は二千五百年前、印度で始めて成佛された新佛ではなくして、實は久遠の古へに於て既に成佛されたばかりでなく、常に靈鷲山に在り」とも言ふて、現在未來に恆存すると説かれてゐる。

かゝる種々の佛を説くやうになつたのは、結局は佛に對する見方が異なるためであり、それ／＼の形で佛の心が自由に映り出る姿を語るものである。

## 二、法身、報身、應身

佛の意義を明らかにするために、印度の菩薩達は三つに分けて説き出された。法身、報身、應身がそれである。

法身は佛の成佛を可能ならしめる眞理である。それが如と言はれる。如は萬有に即する應に爾あるべき大自然の理法であり、佛は如を證驗して實動し來れるものであるから如來といふのである。こゝに佛教が偽妄性を永離する基礎がある。眞に人を愛



## 報身

し、世を思ふ體にもてなし、その虚に乗じて、或る種の我慾を充たそうとする偽妄者が、その非行を曝露されて、司直の裁きに包みされず、遂に自らの罪惡を容認するやうなことは、すべて如に立つてゐなかつたからである。苟くも人として應に爾あるべき道に立つならば夢にも虚偽欺瞞の行動に出るやうなことは有りえないことである。如に立つて願を起し行を修めて、遂に如を證驗することによつて佛格を成就したる正等覺者が報身である。此佛格は天然自然に成就するものではなく、必ず願と行に因つて成るものであるから報といふのである。

報身は内外の功德莊嚴相を備へたものとして説かれることになつてゐるが、實は如が人格を通じて動き出たことが報身の眼目であり、成佛の事實そのことが三身の主體である。

世人の中には、如の實在は解るけれども、徳相莊嚴を備へた報身は信じ難いといふものがあるが、之は法身先づありて報身が可能だとする説明の順序に惑へるものである。哲學的に理法のやうなものを考へて、それを以て法身と見る弊に陥つたのである。佛教では佛格の成就した事實が基本で、この事實を凝視する時に法身が見出されてくるのであるから、法身は解るが報身は判らぬとは顛倒した考へ方である。昔にも、法が先きで、それによつて佛が成就したのであるならば、法・佛の順序であるべきに、何故に佛・法といふか。

## 佛と法



應身

斷惑證理 || 迷い  
からさめて眞實の  
悟りにつくこと

三身即一

といふ問題を出し、

法は地中に埋没してゐる寶の如くで、何人も之あるを知らなかつた。然るに佛がそれを掘り當てて明らかにしたので、法の前に佛を置くべきだ。

と解決したことがあつたが、如の人格的活動が佛の佛たる所以で、それを報身と言ふのである。

應身は佛の教化力の方面である。佛は教化さるべき衆生の身心に應同すと見る所から此名が出たのである。昔の所説では、佛が成就したる斷惑證理の榮光に輝くを報身とし、報身から教化身を放射して衆生を救ふとする。それがために報身は高妙であるが、應身はそれより一段低いと考へるやうになり、甚しきに至つては、凡夫や菩薩の下位の者は應身が教化し、高位の菩薩は報身が教化すると言ふやうにもなつたが、これらはすべて報身を自利のみに限つた誤りから導かれたのである。如の人格的活動が報身であるからにはそこに教化力の具はらぬ筈はないのであるから、實は報身に一切の自利々他の功德が含有されてゐるのであるが、佛の意義を分解して説く企てから佛の功德中、特に教化の方面を別に引き離して應身としたものと解すべきである。

かくて、佛に三身ありとする古來の解釋にあつては、報身が中心であり主體であつて、佛格の基本として法身が見出され、佛格の教化力を顯はそうとして應身が説かれたのであり、何れも佛の意義を明らかにしやうとする説明から出たもので、實は三身



如の人格的活動

智慧と慈悲

阿彌陀佛の本願

四十八願

本願の成就

は一體のものなのである。

### 三、本願成就身

如の人格的活動が佛格の中心であることは既に述べたが、その成就されたるものゝ内容について、また種々の見方がある。大體は智慧と慈悲とに收められる。何の錯誤もない無漏智と、廣く衆生を熱愛する大慈悲とであるが、特に衆生を思ふ深刻熾烈なる願の成就として佛格を見直すところに阿彌陀佛の出現がある。

阿彌陀佛は、終始去來、まつたく願の佛である。

その菩薩道を踏み出した第一歩に於て、吾れ誓ふ、佛を得るまで普くこの願を行じて、一切の恐懼に爲めに大安を作さんと、ひたすら衆生を思ふ遣る瀬なき、立願の意圖を告げらるゝに初まり、人間に直接なる淨土の條件としての四十八願が選擇され、剛健不卻の行の精進によつて、遂にこの願を成就されたのであるが、この願こそ此佛の生命であり、此佛ある所以である。

故に特にこれを本願といふのである。

本願の成就は、願が佛の攝取の力として、實動に移つたことをいふのである。總て願に立誓されてゐる事項が、衆生に向つて行使されてゐる間は、攝取力の實動に間斷なく、世に衆生の絶えざる限り、願の活躍は永遠に續けられてゐるのである。



## 十二光佛

## 光明の世界

本願成就身として佛を見守ることは、佛は人間より懸け離れた存在ではなくして、わが子を忘れぬ親心のやうに懐かしく、佛は我身を擁護し、指導し、撃勵する力であるとの感受から來るのである。

## 四、光明攝取身

本願成就が示す佛のなつかしさから、更にまた、明るい世界へ連れて來られた喜びに満つる心になるものが、阿彌陀佛に有る。光明攝取身と言ふのがそれである。この佛の願の中に光明無量の一條があるばかりでなく、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、燄王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛とも言い、この光明が衆生に働きかけては、睨爭、鬱結、沈滯、憂悶、行詰りなど、あらゆる暗黒の不安を光化して、人をして觸光柔軟の潤ひを得しめ、安泰として取るべき進路の開き出さるゝ照益ありと説かれてゐる。

明るい世界のことは華嚴經の古いものに、釋尊の成道の際に開きだされた世界は、初めて佛を得たる時、光景甚だ明かなり

と記されてゐるやうに、佛の所住には、一切の妄冥癡闇は跡方もなく消えうせて、たゞ浩浩朗々として清英の氣に充ち満ちてゐる寂光の淨土といひ、その蓮華の青色には青光あり、黄色には黄光ありなど言ふのは、このこゝろから來るのである。



佛光

八萬四千の光明

阿彌陀佛の光化

人生の旅

光りは亦、佛に具はると見られる。それも始めは、佛の身の周圍一尋ほどは、光明があつて明るいと見られ、それから或は頭背に圓光を拜し、或は白毫から光明が放たれると信じ、或は口から毛孔からなどと言はれ、遂には八萬四千種乃至無量の光明ありとして知られるやうになつた。然るに阿彌陀佛は、たゞその限りなき光りに、自ら輝かるゝのみでなく、光りを以て衆生を照護せらるゝ佛である。人の世に、家に、庭に、身の上に光りを投げ與へて、そこに蟠居する一切の闇黒を光化せねば止まない佛である。かくして阿彌陀佛を仰ぐ所、つねに光りを身に受けて、すべてのたじろぎを突破しつゝ、生生たる前途を見ひらく心に勇むであらう。

## 五、來迎引接身

阿彌陀佛が亦、來迎引接身として告げらるゝことも、同じやうに、人のこゝろに、明るさを與へる一つの姿であらねばならぬ。

いづれ、人の世は旅であるから、日日の勤めにいそしみ勵んで、一步々々を踐みしめてゆく楽しさは、得も言はれぬものがある。しかし人生の旅には、萌えいづる嫩葉の縁に、天地を溶かす春の曙や、清爽の大氣は澄みきつて、山々の織りなす錦に眼を喜ばす秋の日ばかりあるものではなく、炎熱灼くが如き眞夏の午後もあれば、凍寒肌を刺す冬の夜にも出遇ふのである。愉快と悲愁、順調と逆境、思ひ通りに事の成就



## 人生の行方

諸教は阿彌陀佛を讃す

法然上人の信仰

するもあれば、豫期せぬ失敗に、おのゝくこともありなどして、錯綜煩累盡くる所を知らぬが、それらの個々の事實を一括して、つひに人生は何處へゆくのであらう。

人生はどこへ行くといふ問題は、理論で以て解けるものではあるまい。たゞ佛の來迎引接のみが之を解決する唯一の鍵であらねばならぬ。旅の行方は、佛のあたゝかいふところ懷である、腹を据ゑた落付きが、日日の歩みにどれ程の明朗を加へるかは、蓋し思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

諸教の讃する所、多く彌陀に在り。

と古人が云ひ放つたやうに佛教の隨所に説き出される佛は阿彌陀佛であるが、それは全く如上の人生に即し、人の本心に契同して犇々と胸を打つ力ある佛だからである。

「阿彌陀佛は人の世に縁深し」とされるのも、亦此こゝろに由るのである。

## 六、願力を感じ受する直路

法然上人の阿彌陀佛の信仰は、百尺竿頭一步を進めて、更に一層徹底した佛である。上人にあつては、もはや阿彌陀は我が身から離れた存在ではなくして、現に今、佛に攝取されてゐるわが身を見出だされたのであつた。

阿彌陀佛を言葉の説明や、文字の書き綴りや、思想意義の考察で以て顯はしてゐる間は、わが身から遊離した餘所のものの如くであるだけに、この佛の願力の實動を感



念佛

上人のお言葉

三業<sup>さんごふ</sup>身<sup>み</sup>で行<sup>おこな</sup>ふこと、口<sup>くち</sup>で云<sup>い</sup>ふこと、意<sup>い</sup>で思<sup>おも</sup>ふこと三心<sup>さんしん</sup>至誠<sup>しじやうしん</sup>心<sup>しん</sup>、深<sup>じん</sup>心<sup>しん</sup>、廻向<sup>くわうきやう</sup>發願<sup>はつがん</sup>心<sup>しん</sup>

受<sup>じゆ</sup>するに、或<sup>ある</sup>空隙<sup>くうけき</sup>のへだたりを餘儀<sup>よぎ</sup>なくされてゐる。この佛<sup>ほとけ</sup>を理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>するには、そうした方法<sup>はうほう</sup>もあながち無用<sup>むよう</sup>ではないけれども、然<sup>しか</sup>もこゝに、完全<sup>くわんぜん</sup>にこの佛<sup>ほとけ</sup>に觸<sup>ふ</sup>れうる極<sup>きよく</sup>めて簡明<sup>かんめい</sup>な道<sup>みち</sup>がある。念佛<sup>ねんぶつ</sup>がそれである。たゞ佛名<sup>ぶつみやう</sup>を呼<sup>よ</sup>ぶその聲<sup>こゑ</sup>で、はや我<sup>わ</sup>が身<sup>み</sup>に即<sup>そく</sup>する佛力<sup>ぶつりき</sup>を受得<sup>じゆとく</sup>することができるのは、正<sup>ただ</sup>に一つの大きな驚異<sup>きやうい</sup>であらねばならぬ。

阿彌陀佛<sup>あみだぶつ</sup>に於<sup>おい</sup>てのみ、かゝる直路<sup>ちよくろ</sup>が開<sup>ひら</sup>かれてゐることが、こよなく尊<sup>たふ</sup>く、また嬉<sup>うれ</sup>しくも身<sup>み</sup>に泌<sup>しみ</sup>みた法然上人<sup>はふねんしやうにん</sup>であつた。さればこそ、

妄念<sup>まうねん</sup>餘念<sup>よねん</sup>をも顧<sup>かへり</sup>みず、散亂<sup>さんらん</sup>不淨<sup>ふじやう</sup>をもいはず、たゞ口<sup>くち</sup>に名號<sup>みやうがう</sup>を唱<sup>とな</sup>へよ。もしよく稱名<sup>しやうみやう</sup>すれば、佛名<sup>ぶつみやう</sup>の德<sup>とく</sup>として妄念<sup>まうねん</sup>自<sup>みづか</sup>ら止<sup>や</sup>み、散亂<sup>さんらん</sup>自<sup>みづか</sup>ら靜<sup>しづ</sup>まり、三業<sup>さんごふ</sup>自<sup>みづか</sup>ら調<sup>と</sup>ひて、願心<sup>ぐわんしん</sup>おのづから發<sup>おこ</sup>るなり。然<sup>しか</sup>れば願生<sup>ぐわんしやう</sup>の心<sup>こころ</sup>の少<sup>すく</sup>きにも南無阿彌陀佛<sup>なむあみだぶつ</sup>、散亂<sup>さんらん</sup>の増<sup>な</sup>す時<sup>とき</sup>も南無阿彌陀佛<sup>なむあみだぶつ</sup>、妄念<sup>まうねん</sup>の起<sup>おこ</sup>る時<sup>とき</sup>も南無阿彌陀佛<sup>なむあみだぶつ</sup>、善心<sup>ぜんしん</sup>の起<sup>おこ</sup>る時<sup>とき</sup>も南無阿彌陀佛<sup>なむあみだぶつ</sup>、不淨<sup>ふじやう</sup>の時<sup>とき</sup>も南無阿彌陀佛<sup>なむあみだぶつ</sup>、清淨<sup>せうじやう</sup>の時<sup>とき</sup>も南無阿彌陀佛<sup>なむあみだぶつ</sup>、三心<sup>さんしん</sup>のかけたる時<sup>とき</sup>も南無阿彌陀佛<sup>なむあみだぶつ</sup>、三心具足<sup>さんしんぐそく</sup>するにも南無阿彌陀佛<sup>なむあみだぶつ</sup>、三心現起<sup>さんしんげんき</sup>するにも南無阿彌陀佛<sup>なむあみだぶつ</sup>、三心成就<sup>さんしんじやうじゆ</sup>するにも南無阿彌陀佛<sup>なむあみだぶつ</sup>。これ即<sup>すなは</sup>ち決定往生<sup>けつじやうわうじやう</sup>の方便<sup>はうべん</sup>なり。心腑<sup>しんぶ</sup>に納<sup>おさ</sup>めて忘<sup>わす</sup>るゝことなかれ。

と教<sup>をし</sup>へられたのである。

あらゆる時<sup>とき</sup>と處<sup>ところ</sup>と場合<sup>ばあひ</sup>に於<sup>おい</sup>て、念佛<sup>ねんぶつ</sup>は、現<sup>げん</sup>に今佛<sup>いまほとけ</sup>に攝取<sup>せつしゆ</sup>されてゐるわが身<sup>み</sup>を見出<sup>みだ</sup>すに、何<sup>なに</sup>ものゝ追從<sup>つゐじゆう</sup>をも許<sup>ゆる</sup>さぬ唯一<sup>ゆい</sup>つの手<sup>て</sup>がかりである。これが心腑<sup>しんぶ</sup>に深<sup>ふか</sup>く納<sup>おさ</sup>めらるゝ所<sup>ところ</sup>に、阿彌陀佛<sup>あみだぶつ</sup>の信仰<sup>しんかう</sup>は徹到<sup>てつたう</sup>するのである。



釋尊の出現

# 本願

眞野正順

## (一)

「本願」とは、どういふ事であらうか。その意味を理解するためには、深く「佛」の内容に入つて考へて見ねばなりません。

「佛教」はいふ迄もなく今より二千五百年前、印度に出現したところの釋尊の教であります。釋尊は、若くして、この人生に深い憂悶をいだいて、華やかな王宮を捨て、一介の修行僧となつて、各地を遍歴しつゝ、さまざまの苦行と思索を重ねた末に、遂に大いなる悟に到達し、崇高なる佛陀となられ、古今東西を貫く永遠の救の光と仰がれるに到つた。このことは、今更申すまでもないことであります。



## 世界の燈

## 數々の經卷

## 佛陀味到的努力

それならば、この永遠なる世界の燈たる佛陀の眞に尊いその本質内容は、どういふ事であらうか。これは、萬人の共に知らんと希ふところでありまじやう。ましてや、わが信仰をこの佛陀のの上にかけ、佛教徒として自ら生きんとする者にあつては、更に切に、よりはつきりとこれを求めずにはゐられぬ事柄です。

佛陀の偉大にして、まことに「世界の燈」であられることは、その比ひなく崇高なる人格と、その死後とほい歲月と、果しなくひろい廣漠たる地域にわたつて及ぼしたる深いその感化を以て、知ることが出来る。しからば、その永遠に尊い眞の内容は何であらうか。これは、教徒の切に知りたく常にねがふところのものであつたと共に、また、その身を堵けて絶えず解いて行かうと企てたところの問題でありました。いま、私共の前に堆かくのこされてゐる經卷の數々は、やがて、佛陀の眞の内容を知りたく思ふ、後世の人々の努力の跡に外ありません。その中には、生けるがまゝの佛陀に直接した弟子等の文書もあります。また、時を隔て、後世の人々の手になつたものもあります。さまざまの人々により、種々の立場から、この高く雲を貫いて立つ「佛陀」といふ巨峯を眺め計つたところの記録であります。

## (二)

この、さまざまの記録の中には、大よそ、三段の區別が現はされております。それ



佛陀の模倣

が「佛陀」そのものの内容に味到して行つた後世の努力の區別であります。

はじめに現れてくるのは、主として、佛陀とほゞ其の時代と土地とを同うした印度の人達の努力です。この人達は、佛陀の説き諭されたことばの言々句々、戒められた事柄の一つ一つを一心に覚えこんで永く忘れまいとしました。そうして、その教へられた言葉の一つ一つ、戒められた事柄の隅々までそれを模範として悉く残さず従つて行かうとしました。

これは、偉大なる、かの佛陀を師にもつ光榮を擔つた弟子の情としては、誠に、かくあるべく、むしろその忠實なる至情に深い敬意を表すべきものと思ひます。

然しながら、偉大なる人格を、たゞ、そこから現はれた言葉や行動の一一に就て、残りなく模倣しやうと努めても、それで、その人格の偉大なる真髓に觸れるといふ譯には行きません。それだけであるならば、恐らく、人は、その模倣の間に、今更に群を抜いて勝れたる釋尊の偉大さを、その舉手投足の一つ一つに就て感じ、自分等とは遠く隔つて佛陀の崇高なる境地にたゞ嘆息を漏らすのみでありました。事實、印度の佛弟子等の多くは、この嘆息の淵からはい上ることが出來ず、その一生を惱ませ通したのでありました。

釋尊の唇から漏れた教へは、世の勝れたる人格者の例にたがはず、常には極めて單純なものであつたやうであります。「人生の一切の苦難の源は、たづね來れば自我



の執着である。この執着は逆である。宇宙の眞實の姿の中には、かゝる自我はなく、ただ、こゝに、灣上の漣の如く果しなく揺れてゐる「縁」があるだけである。それゆえ、いま己れの上に結んでゐる自我の縛めを解けよ。そうして、この輝く縁の波の中に眞實の生命を果せよ。さすれば、そこに寂靜なる眞實が自から現れてくるであらう。』といふのが、その要旨でありました。

これは、正しく、永遠の眞實をつき貫いた尊い言葉であることに、疑はありませぬ。また、釋尊八十年の教化はこれを樞軸として、輝きめぐつておつたことも、また明らかな事實であります。然しながら、たゞ、この言葉のごとく、そのまゝ是れを務めてゆく事によつて、果して、釋尊のありしが如く、豊かに無碍なる生活が、我身の上に輝き現はれて來たであらうか。

教によつて、私共は「我」の實體なきことを知る。そうして、たゞ諸の縁の集合のみがこゝにあるのみだといふ事をも知る。然し、かく知りたる後に、私共は、どう生活して行つたらよいのか。こゝに新たに現れて來たものは、たゞ漫々として廣く果てしなき縁のみの世界である。この中に今迄は「我」を杖とし柱として生きて來た。いま御教によつて潔くその杖柱を捨てたとしたら、この後に何に依て私共は生きてゆけばよいのか。釋尊の圓融無碍なる、人格が、現實の模範として、生きて其前面に輝いてゐる間は、よかつた。まだ、この努力の一步——が眞實に近づきつゝあ



る安らかさがあつた。然しすでに、それを喪つた後においては、暗黒である。奮然として、この全身をかけて教へられたる中道の眞實に則り、自他融合の慈悲の生活に突入せんとしても、それは暫時の興奮に止まつて、ふたゝび、この孤立の己れに還つてくる。眼を瞑つてこゝに在る自我は無しと觀念しても、再び目を開いて一つびとつた事象に觸れてゆく自分は、何時か、がつちりとして自我中心の振舞である。

こゝに原始の佛教徒は、焦つて、自我なる觀念をその末梢にいたるまで残さず悉く抹消せんと企てた。そうする事によつて彼等は佛陀の生活に近づくことが出来ると考へたからである。このやうに一方的に抹消しやうと焦る態度は、やがて、絶望的な虚無を導き出すものとして佛陀の既に慎められた處であつた。が然し、彼等は、止むに止まれなかつた。

かくて、彼等に現はれて來たものは、何であつたらうか。これを除かんとして自我に向ふことは、譬へば葱の皮を剥くに似てゐる。剥げどもく新たなる自我の姿は、その後から現はれて來る。結局、自我の完全なる拭消は、自我の依所たるこの肉身を滅じたる后でなければ望むことは出来ない。

かくて、彼等に現はれて來た理想成就の世界は、この一身を灰に歸したる無餘なる涅槃といふ事になつた。

かゝる死灰の如く冷えたる境地と、かの豊かに生命充溢して玲瑯玉の如く溫き佛



註<sup>○</sup> この第一段の考へ方は原始小乗と呼ばれるもので、佛教の術語で云ふと「僧」として佛陀を見たのでありました。

佛陀の生涯とを比較するとき、人はたゞ／＼その差異の餘りにも甚しきに愕くのであらう。原始佛徒は強辯して、これを同質と言ふのであるが、流石に、この甚しき差異を蔽ひ兼ねて、自ら達を羅漢と呼び、釋尊も亦た羅漢なりとしつゝ、猶「佛」の別稱を以て、これを區別し、何故にかゝる區別があるといふ理由には過世無量世の功德によるといふ外には口を緘してゐる。

——つまり、彼等には、佛陀の本質は遂に掴み得なかつたのでありました。

### (三)

まことに、佛陀を知るためには、たゞ釋尊の言行を、その一つ／＼摸し倣つてゐるだけでは及ばぬことでありましやう。もとより釋尊は、その菩提樹下の開悟によつて、宇宙の大生命に觸れ、さながら、その眞實に生きることに依て佛陀となられたのでありました。このやうに、宇宙の眞實の上にその生命を置いて生きてゐられる釋尊を未だかゝる境地に打開せざる身を以て、たゞ、その言行の一つ／＼を倣つてゐても、そこに現はれてくるものは、佛陀と我身との深刻な差異のみでありましやう。

まことに、佛陀を知るためには、一歩進んで佛陀をして佛陀たらしめる、その本質が求められねばなりません。二千五百年印度釋迦族の一王子瞿曇が出家して佛陀となつた。何が人間瞿曇をして輝く佛陀とならしめたのであらうか。その事が求められ、



註<sup>○</sup> この第二段の考へ方は「大乘」と呼ばれるもので佛敎の術語で云へば「法」として佛を見たものである。

その祕奥に私共が參じ得ることが出來たる後にこそ、はじめて、私共は、佛陀をその内面に於て見る事が出來、佛陀の佛陀たる本質を明らかにする事が出來るのであります。

かういふ立場から、現はれて來たのが、次の第二段の考方でありました。

その考によると、釋尊が佛陀となられたのは、外ならず、釋尊が宇宙の眞理を體得せられたからである。そうして、如ら、その眞理のまゝに生きられたからこそ、そこに、かの玲瓏玉のごとき人格が現はれて來たのである。それゆえ、佛陀の佛陀たる内容本質は、宇宙にみなぎるところの眞理でなければならぬ、といふものです。

まことに、不世出なる佛陀の尊さは、それが究竟なる眞實を貫き、それを完全に體現せられてある故に外ありません。かくてこそ佛陀は人類の永遠の燈であります。時は移り、所を異にしさまざまの見方から之を味つても佛陀の偉大なる人格はいよくその深遠なる光輝を明らかにして來るばかりであります。それは、たとへば、純金を磨くに似てあります。さればこそ、佛陀の内容は、佛陀にあつて完全に具現してあるのみならず、また、世界の到るところに徧滿してある。あらゆるものが、その眞實を尋ねてゆくは、必ず、佛陀へと還つて來ねばならぬ。それはたとへば、諸の河川の大海に歸入するごとくである。それ故、經典には、佛陀の内容を「眞如」とよび「實相」と名けてあります。



## 佛は眞理なり

この事に間違のあるのではない。——ですが一體に、人間の理といふものは、冷たいものでありまして、<sup>あたしい</sup>温い生命の事實には疎々しく止もすれば遠く離れ勝なものであります。それゆえ、佛の本質も、これを理として考へる時には、たとへ、それが眞實なものであつても、何かしら、遠く彼方に横たふものゝ如く、この生ける日々の現實から疎々しく遠い。

然し、このやうに佛が、この現實の生活から、冷たく離れて行つてしまつては、生ける救の教として佛教の尊い價値を自ら蔽ふやうなものです。そこで支那中期から我國藤原期にかけての理論佛教の努力は、佛をできるだけ、この現實に引寄せる事に専注せられました。然し「佛は眞理である」といふ立場が保持せられてゐる限り、如何にこれを現實に結びつけやうとしても、たゞ「佛はこの現實から離れてゐないのだ」と繰返してゐるより外はありません。この時代あの「諸法實相」とか「即事而眞」とかいふ言葉が盛んに、佛教の中で用ひられたのは、この譯であります。

然し「この生活は眞理を離れてゐない」といふ事をいくら論證して見ても、その「眞は躍如として自分の上に感得せられて來るものではありません。」「佛は汝の一舉手一投足の中にある」と言はれても、それで直ちに生々と佛を感じ、身心新たなる光りの生活に入ることは出来ません。その頃、眞摯なる青年であつた道元禪師が「この身、本より佛であるならば、なぜ、佛となるために修行なぞする」



といふ疑問に逢着して解き得ず、あまねく海内の學者を訪ねて解けず、深い憂悶の眉をとざしたまひ、遠く海を渡つて支那にこの解決を求めに行つたのも、思へば道理でありました。「この身このまゝ佛である」と、如何に思ひつめて見ても、我身の現實をふり返り來れば、かの輝く釋尊とは天地隔絶とも喩ふべき差異が現實の上に横はつてゐることは、如何ともし難いのです。

そこで、彼等は焦つて「この身このまゝ佛」の理論を實現するためには、何かの手段で、この心身上に一の急激な轉向を與へる事が必要だと考へました。即ち、佛の境地と思はれるものゝ中に、ある若干の時間のあいだ、心身を凝注する事によつて、急激に同心し、佛の境地の中に躍り出そうといふのです。かの、神祕的な修法灌頂、もしくは凝神的な觀法がそれでありました。

然し、かやうな振舞だけで、輝く佛陀の生活の中に入り畢るといふことは、極く稀れな俊才を除いて一般にとつては、全く不可能事でありました。莊嚴な儀禮の中に在る時は、しばらくは恍惚と、聖ある境地に彷徨ふのでありますが、還り來れば、ふたゝび、昨日に變らぬ淺ましい日常生活に轉落せる自己を見出すのが常でありました。そこで、また再び、また再びと、かゝる儀禮の數を重ねて行つたのでありますが、このやうに繁く聖儀を以て滿された生活は、淨化するどころか、却て、はじめの目的とは反對に、放恣なる肉感生活を招致するに畢つたのでありました。



即ち、このやうに、度々、佛の靈力を求める生活は、いつか佛をも一種の靈異力と考へるやうになり、それに對立する惡鬼の觀念を呼び起し、いつか世界は善靈、惡靈の交々群がる所と感ぜられて來るのです。藤原期文學の特長たる「物の怪」の恐怖は、その表現であります。そうして他面「即事而眞」の現實肯定主義は、こゝに轉じて無批判的な放恣生活を促す源となり、果てしなく放縱に肉感生活に溺れゆく、かの藤原期の頽廢時代を現出したのであります。

かゝる状態が、法然上人出現の直前までの佛教でありました。かく成り來つた原因は要約すると、次の如くになります。

一つには、理の一面より佛を見るために、佛は平板な普遍的法則の如きものとなり、佛自らの無限に豊富な、生ける活動性が全く蔽はれてしまつた。即ち、ほんとうに、仰ぎかつ倚るべき尊き力ではなくなつてしまつた。

二つには、理はすべてのものを、それを考へる人間の立場にまで引き下げてしまふ。そこで佛も、この現實の中に引き涉つてゐる法則の如きものとなり、人間の解釋次第でどうにでも勝手に操つれるものとなつてしまつた。そこで、眞に生けるものは逆にたゞ人間のみとなり、眞實の力としての佛は、全く蔽はれてしまつた。

三つには、理はまた「生けるもの」をその生けるがまゝに把える事の出來ないものである。「生けるもの」を、たゞその過ぎ來し過去の足跡についてののみ評量する事が出



来るものである。そこで、佛もまた、たゞ、その過去に現はれたもの、——即ち經典な  
 ぞに現れてゐる過去の、顯現のみに限つて眺めるから、佛は今日迄にすでに終結して  
 しまつたものゝ如くになり、現に生ける力を我々に與へつゝある生ける積極力ではな  
 くなつてしまつた。

四には、この態度は佛のみならず、ひいて人間をも、たゞ理の眼鏡で眺める事にな  
 るが、たゞ「諸法實相」といふ一般的原理によつてのみ人間を考へると、現實人間の  
 深刻な生の悩みも、たゞ、一片の「迷ひ」としてのみ輕視され、從て現實生活の上  
 に正しい眞實な批判を下す事が出來なくなり、そこに無批判的な放縱な生活が現はれ  
 てくる。

以上簡単に云つて、理は佛の崇嚴なる生ける力を隠し、人間の眞實の姿を蔽ふたの  
 であります。

(四)

註  
 この第三段は佛を  
 佛として見るもの  
 であつて淨土教  
 の立場である

曠世の大聖釋尊を貫いて現はれ、こゝに不世出なる輝く大人格を顯現したところの  
 「佛陀の本質」は決して、かくの如き、平板なる理ではありません。それはむしろ、  
 かくの如き「眞實」をいたるところ作り現はして止まぬ崇嚴なる生ける力であります。  
 佛陀は決して「屢考へられるが如き——人間修養の位階の一ではない。そうでなくて、



むしろ逆に人間をその眞實への修養へと驅り立て、行くところの力である。むしろ人を「眞實」へと否應もなく引き寄せ、その「眞實」の道具として奔流せしめてゆく強大なる宇宙の力であります。

どこか、空に浮んで、たゞ、人の取るに任せておくやうな「眞實」は、まだ本當の眞實ではない。それは死せる眞實である。まことの宇宙の眞實は、そうでなくて、自ら生ける眞實である。強く人を己れの方に引寄せ己れの表現者として用ひ盡さずにはゐないやうな怖るべき強大なる力である。

さればこそ、人はまことに「眞實」に觸れたる時には、かならず、身を捧げて、その實現に務めずにはゐられぬ。それを實現せずには放つておく事の出来るやうな眞實は、まだ本當ではない。かゝるものを持つてゐるやうな者は、輕浮なる饒舌家か、職業的教壇學者であらう。それは眞實の姿したる似而非眞實である。眞實はかならず實現を欲する。それは死せる理でなくて、生ける力だからである。

佛陀の本質も、またかくの如く、それは宛も、太初の劫風のごとく、宇宙一切のものを吹きなびけて留まるところを知らぬ。それは、かくの如くして、永遠の過去よりこの現在と貫いて遠く永遠の未來へと、たとへば、大空に横たはる燦々たる銀河の如く、宇内を跨がつて走つてゐる。

釋尊は、まさしく、この偉いなる生ける力に適中せられた方である。崇嚴なる佛陀



の本質は、こゝに來つて純乎たる結晶を遂げるたことに依て無比なる人格が顯現したのである。

釋族の一子瞿曇なるものが、自ら工夫を凝らして自らを佛陀といふ人格に作り上げたのではない。

かくの如き作意せるモザイクによつて、かの二千五百年東亞のかぎりなき萬靈の魂の底を照らした聖なる光は發し得られるものではない。そうでなくて、こゝに到つて修行者瞿曇は嘗て在りし自己を捨て、崇嚴なる佛陀の流れにと、自己を轉移したのである。かくてこそ、瞿曇の肉體を通じて、さながらに、崇麗なる佛陀は輝き出て、こゝに無比なる人格を顯はし初めたのである。これが彼の本覺であり、これによつて釋尊は正しく佛陀であつて、それに他ならず、その教を給ふところの一々が、悉く一切人類の心底の眞實を衝いて響くのである。

かゝる偉いなる佛陀の生命は、釋尊の死によつて終結するといふ事はない。それは、むしろ一切處に絶えずそう發現を求めつゝ常に生きてゐるのである。されば、經典の作者は、秋夜に滿天をかざる群星の數々のごとく、限りなき諸佛の姿を畫いた。宇内にみなぎる佛陀の、その生命の限りなきが如く、その表現もまた數限りない筈であるからである。然も、それは過去に於てそうであつたばかりでなく、また現在未來に於てもそうである。されば、一時、佛教が固化して、佛陀を終結的不動なものとする思



## 生ける佛陀

想に墮ちた時でも、まことに、この眞意に觸れ得た佛教徒は、菩薩の献身的慈悲の姿を取りあげて、そこにこの現實に生きつゝある佛陀の本質を表現せんと努めたのであつた。この立場における「佛道」の論を聴け、この意味における佛道の修行とは、佛果を求めず、酬報を求めず、ひたすらに、果しなく我身を捨て、大慈悲に精進した、その中にのみ生くることであつた。即ち、永遠に果つる時なく生き給ふ佛陀の日本質にさながらに一如とならんとするのみであつた。これ眞によく、佛陀の本質を見るものとすべきであらう。

否、たゞに見るのではない。更に眞には、佛陀が、そこに在て、その姿に於て貫き働き居たまふのである。それ故にこそ彼等はまた、菩薩と名けられ給ふのである。

かくの如く、佛陀は、むしろ、この我等に對面して常に強く迫り來給ふ力である。それは、それ自らに於て自ら生きて居たまふ。我等がそれを思ふと思はざることにかゝはらず、それ自らに於て自ら生き働いてゐたまふ。そうして、絶えず我等をその眞實へと引上げんとしたまひつゝある強大なる尊き生命力である。

「眞實へと引上げる」とは、どう言ふことであるか。眞實とは「我等の眞にあるべき生命の姿」である。すなはち、我等自らの眞實である。世に、我等を我等それの眞實に來らしめんとして倦くなき努力よりも、偉大なる愛があるであらうが。それ故、



經典には「佛心とは大慈悲」と説かれる、我等にとつて「迫り来る大慈悲」として、これを受け思ふとき、最もよく「佛陀」をその生けるがまゝに、觸れ感ずることが出来るのである。

然るに「我等の眞實」とは求め行けば、やがて本眞の眞實たる佛陀へと歸り來らざれば止むことがない。されば、究竟しては、大慈悲とは、やがて佛陀の世界へと歸らしめるゝ事の外はない。佛陀は己れを空うして我等のために大慈悲を行じ給ふ。我等は、佛の慈悲に育まれつゝ、おのずから、己れを捨てゝ輝く眞實なる佛の世界へと歸入する。それは、たとへば、輝く生命の熔鑪である。それは觸るゝところの一切を其熱によつて溫めつゝ、然も、溫められてゐる一切は、やがて悉く、その中に吹ひ寄せられ、その中に融けて、眞實、生甲斐のある生命に輝き初めるのである。かゝる力は、その全體をあげて旋回しつゝ空の彼方より潮のごとく常に我らに迫りきたる。

然し、かく言ふとき、人は或は疑ふかも知れぬ。

「佛が、そのやうなものであるならば、何故に、此處にゐる我等の前に現はれぬのであるか」

かくの如く考へる者は、まだ、眞に「生けるもの」に就ての正しき眼を持たぬものである。知らるゝ如く、人間には、生命を、その儘に於て見る眼は與へられて居らぬ。



たゞそれが多物を貫いて働きいづる姿を見得るのみである。生ける肉體を如何に細く分析して見ても、我等に見ゆるはたゞ寸斷されたる肉片のみである。生命の影はいづくにも見えない。我等にとつて、生命は、たゞ、他物を通してのみ現はれ出ずるものなのである。佛もまた、その如くである。それが、我等に現はれるためには、必ず、何物か具體的な生命の姿を経由してのみそれは實現する。

それならば、生ける大慈悲の佛陀の姿は何處に現はれ出で給ふのであるか。それは、たゞ、眞摯なる熱意を以て、身を培けて、眞實の佛道を求めゆく者の、その精進のたゞ中に放たれる燦たる生命の火花の中に現はれ結晶する。生命の眞髓は、たゞ摯烈なる生活精進の火花の中にのみ、その純粹なる姿を現すものであるからである。されば、佛陀の本質は、たゞ眞實なる佛道の修行者の行動を通じてこの我等の中にと現はれる。すなはち、その人の、心に誓ひ願ふところの佛道開展の理想と、その實現において佛陀の大慈悲は具體的に結晶するのである。

「佛說無量壽經」の中樞をなす、法藏比丘の輝かしき誓願の物語は、まさしくこの過程を、最も明かに示してゐるものである。

久遠の昔、法藏比丘が、勇奮して高邁なる佛道實現の志を立て、身を培けてそれに刻苦精勵した時、天駭ける佛道は降り下つて、この人の上に、その聖なる火花を點じ初めたのであつた。



## 四十八の本願

かくて聖なる憂悶は法藏の内部に深刻に萌して來た。如何にしてか、我が志を佛道の本質たる大慈悲を、この現實社會の中に實現し、一切衆生を悉く濟ふて漏さざる事が出来るかと。——この時、すでに永遠の大慈悲は法藏の小軀を貫通して現はれて來たのである。

法藏は、遂に、世自在王佛の助力によつて過去無量世の間に出現したる限りなき諸佛等が、それ〴〵大悲實現のために立て給ふた總ゆる機構を悉く比較吟味しつゝ、ふたゝび、慘たる沈思精勵の淵に沈んだ。かくて最後、それらの中の精を抜き髓を集めて、まことにこの現實に於て最もよく佛道を顯現し得べき具體的理想、この一切衆生の性情に最もよく適合したる救済の機構を樹立し、それを集約して四十八の本願を建てた。——この時、この營みの背後を壓して、溢れ來る佛陀の本質は、既にその時に到るあらゆる總ての自己實現の諸道を超えて、更にその精をぬいて、純一至高なる大悲實現の道を自ら産み出したのである。この時、法藏の選ぶところの本願は法藏の誓ひでありつゝ、然も決して法藏個人の私願ではない。むしろ法藏を超えたるものが、法藏を通じて自ら産出しきたるところのものなるを知らねばならぬ。そうして、それは、かゝる超世の本願を通じて、法藏をしてその淨土を成就せしめ、遂に佛陀たらしめずんば止まないものである。

かくて、無量世の精進を経て法藏は遂に、その理想を西方に成就して、輝く阿彌陀



# 本願とは何か

佛となつて「今、現に説法しつゝ在す」のである。

この聖なる傳承がわれらに示すところのものは何であるか。  
一つには、かうである。

かの澎湃として宇内に漲りきたる佛の大慈悲は、それ自らを、この世界の中に實現するために、種々なる菩薩の聖なる行動の中に閃めきいづる、それくゝの救世の本願の中に、其さまくゝの具體的形態を結んだのであつた。かゝる種々なる「本願」は、佛の自己顯現のために選ばれたる種々なる結晶に外ならぬ。それは、それくゝの時代環境と衆生の要求とに適應しつゝ、その中に巧に大慈悲の實現が企てられつゝある機構である事によつて、諸佛の誓願はその數に於て無量であり、その各々に於て個々別々である。

然るに、かゝる諸佛の無量なる本願は、それが、それくゝの時代要求に適應したるものなる限り、その效果に於て各一面的であり、その大慈發現に於て、部分的なるを免れない。そこで倦くなき佛の生命はかゝる諸多なる諸佛本願を綜合し比較しその精髓を抜いて、その上に卓んいづるものへと進まずにはゐられない。かゝる表現を、その身自らに體現したのは、即ち、法藏比丘であつた。さればこそ超世の大本願と名けられる。それは、佛陀の眞本質たる大慈悲が、それを眞に衆生の中に實現するために、



こゝに出でざるを得ざる必至の歸結であると共に、こゝに、かの澎湃たる佛力がその最後の眞髓を露出するところの尖端であるとせねばならぬ。

二つには、かうである。

かゝる貴重なる任務に當りその全身を賭けてこれを遂げたところの法藏比丘は、たゞに、それを通じて佛の働き出で給ふ「佛の手段」ではない。それ自ら佛を實現することに依て、夫自ら、既に佛そのものと見らるべきであるが、更に、かゝる超世の大本願を遂げ、その淨土を成就したる事において、それは「佛の中の佛」として佛の眞髓を最もよく露呈し我等に現はれ給ふところのものである。我等はこの超世の本願を擔ひ、倦くなき大慈悲に満ちて、我等に向ひ給ふ、この佛において最も確にかつ鮮かに、佛の眞實の姿に對面することが出来るのである。

三つには、かうである。

この佛は現に生ける佛である事である。生きて現に我等の前に、蔽ひかゝるが如くその崇嚴なる佛身を立たせ居たまふ佛である事である。

佛は常に生きたるものである。されば、それが現に我等に對面して現に我等を救ひ給ふものでなければ、眞の佛ではない。たとひそれが佛の眞實を表したものであるにせよ、それが生ける佛でない限り、それは誠に佛の資格を具備するものでない。かの肉身の釋尊と、また眞如實相の理とが捨られたのは、この理由に外ならない。この意



佛を念ずる生活

味に於て、無量壽經には、阿難と佛との間の興味ある對話を残してある。

阿難『法藏菩薩はそれから佛になりましたか。佛になられたとすれば亡くなられましたね。それとも、現に生きてゐられますか。生きてゐられるとすれば、まだ佛とならず本願も成就しませんね』  
佛『いや、法藏菩薩は、すでに佛となられその本願を成就せられた。然も現に西方に在すのだ』

こゝに阿彌陀佛の獨自なる特性が表はされてゐる。

阿彌陀佛は今私共がその物語を追想する過去の存在ではない。

熾然たる姿を現に我々の直前に立たせて、その救世の御手をこゝに伸べられつゝあるのである。

× × ×

この眞相を最も適確に鮮明して「生ける眞實の佛」を我等のために現はし遍くその慈光を被らしめ給ふたのは、わが法然上人であることは、今更述ぶるまでもないのであらう。上人は啊眼深く、この尊き本願の中より更にその眞髓を抜いて「佛を念ずる生活」を樹立せられこゝにかの佛の本願は、更に躍進して、その完成の域に到達したのである。これを「選擇本願」と名ける。

これ等に就て、まだ述ぶべきことが多いのであるが紙數の超過、今はいかんともし難い。



# 信しんと行ぎやう

石井教道

## 一、目と足

目と足の譬喩たとへ

私達わたくしたちがある仕事しごとを成し遂げやうとするためには、それに對する、ハツキリした信念と、それを遂行すうかうするための實行とが俱ともなはなければならぬ。金七十論きんしちろんといふ本ほんの中に一つの巧みな譬喩たとへが出てゐる。ある所ところに行かうとしてゐる二人ふたりのものがゐた。一人は目めは見えぬが足あしは達者たつしやであり、一人は目めは見えるが足あしがわるい。そこで目あきがいふやうには、「君きみは氣きの毒どくだが僕ぼくを背負せおひ、左ひだりへ右みぎへと僕ぼくがいふまゝに歩あるりてくれまいか。さすればお互たがひにあの目的地もくてきへ誤あやまらずに速はやく行けるではないか」と持ちかけたのである。目めのわるい男おとこは早速快諾さつそくたいだくし、目あきのいふやうに歩あるりて行くと、忽たちまちちにして目め



清涼地しやうりやうちと云ふこと  
の世界せかい

講所こうしよ邪教じやけうとは

宗教教育しやうけうけういくのノック  
アウト

的地てきちに著ついたといふのである。目あきとは信しんであり、足の達者たつしやとは行ぎやうである。それを天臺大師てんだいだいしは、智目ちもくと行足ぎやうそくとに依よつて清涼地しやうりやうちに到いたると云はれたのであつた。佛教ぶつけうでは、それを解行げぎやうとも、願行がんぎやうとも、安心起行あんじんきぎやうとも稱しょうしてゐる。尤もつともそれは善惡ぜんあくの何れにも通つうじた必須要件ひつすえうけんではあるが、善よいと思はれる事でも、よくその内容を調しらべてみぬと大變たいへんな不覺ふかくをとる事がある。「ぬす人びとをとらへてみれば我が子こなり」といふ川柳せんりやうにあるやうな事實じじつが、毎日の新聞まいにち しんぶんに報道ほうだうされてゐるのは、其邊そのへんの消息せうそくを物語ものがたつてゐるやうである。特に近頃ちかごろ宗教問題しやうけうもんだいにさうした事ことの多いのを見て聊いさか寒心かんしんに堪えぬのである。表面へうめんは、勅語ちくごや御詠ぎよなどを拜讀はいどくし、夫婦和合ふうふわがふ、朝起きあさおきなどを看板かんばんとしてゐるが、實際じつさいは、世人せじんの宗教智識しやうけうしの無知むちなるに乘じようし、病氣びやうきでも失敗しつぱいでも危禍きくわでも「おふりかへを願ねがひます」とさへ云へば、あの處女しよぢよの貞操ていさうを奪うばふやうな教祖けうそが、それ等一切さいの惡事あくじをふり代かへてくれると信じてゐたものが六十萬まんもゐたといふに至いたつてはなさけない。彼の大本おほもと教けうにしても、表面へうめんは日本にっぽんの神かみさまを看板かんばんにしてゐる所から、眞實しんじつこの神かみながらの道みちも、眞しんの日本佛教にっぽんぶつけうも研究けんきうした事こともない連中れんちゆうが、我われも我われもと馳せ參はじ、あの立派りつぱな月宮殿げつきうでんの中なかに祭まつつてある石いしの男根なんこんと女根ぢよこんに柏手かしほてを打うつて最敬禮さいけいらいをしてゐたものまた幾十萬いくまんもたと聞いてはあきされるより外ほかにない。然しかもそれが世間せけんに堂々だうだうたる紳士しんしがゐたといふのであるから驚おどろかざるを得ぬ。蓋けだしこれには種々な理由しゆく りゆうもあらうが、明治三十二年めいし ねん以來いらい、宗教教育しやうけうけういくを學校がくかうからノックアウトして來たことが重大原因じゆうだいげんいんの一であらう。眞實信しんじつしんの目



真相を覆ふ自惚

を開かせなかつたから、かゝる迷信に墮ちるのがむしろ當然である。佛教では、眞實の信心を心理的に解剖して二十、もしくは二十一と開き、それ等の心が聯合して起るものとしてゐる。されば吾人は、信の對象についても、また信心そのものについても十分に取調べ、そして正しい歩みを運ばねばならぬ。他は且らく之を措き、今こゝには淨土の信行を述べるのであるが、僅かな紙數に拙ない筆をもつて私などが書くことは、餘りにそれが尊重すぎるのである。されば今はたゞ僅かに淨土の信行を知り行くホンの道しるべを書くに外ならぬことを豫じめ斷つてをくものである。

## 二、淨土の信

私達は、太陽の光りや、電氣の光りに依つて、晝も夜もハッキリと物を見ることのできる。然し、どんなに視力のよい人でも、我が素面の真相を直視した人は未だかつてなからう。勿論、たゞしなみのよい人は、日に五度も六度も鏡に向つてお化粧に浮身をやつしてゐるやうではあるが、ご婦人の如きは、口には紅、顔には白粉等々と可なりのお手入れに素面の大體が隠されてゐるばかりでなく、自分免許のベツピンサソントンといふ自惚に依つて何れだけ真相が覆ふはれてゐるかも知れぬ。ましてそれが鏡の媒介に依つてゐるのであるから、我が素面の真相は知れたものでない。考へてみると、最も近くて親しい素面が見えぬとは何とした不思議な事であらう。それにまして不思



## 汝の心を見よ

議な事は、さう思ふ自分の心の素面を見た事のある人が世の中にあるだらうか。あの人は丸い心だとか、四角の心だとか、曲つた心だなどといふこともあるが、さてご自分の心はといふと、これまた自惚てゐるから全然見ぬ人が多いやうである。然もこの自分の心を見る見ぬといふことに依つて、一生の幸福も災害も苦難も楽しみも生じて來ることを考へるとき、それは唯困難であるといふて放つて置けるものではない。そこに佛の教えがあるのである。佛敎經典のさし示す所は「汝の心を観よ」といふ事に外ならぬとも云へる。そしてその心を観る鏡も示されてゐるのである。然しその鏡が甲乙丙丁種々であるから、自分の心は何の鏡に依つてみればよいかを撰ばねばならぬ。然し一々それを紹介する事は容易な事でないから、今は唯、淨土の鏡の見方を紹介したいと思ふ。

## 凡ての問題は心の

凡そ佛敎には、自分は本來立派な佛であるといふ鏡のうつし方もある。しかし現實の自己を佛の鏡にうつして眺めてみると「我が心鏡にうつるものならば、いかに見ぬき姿なるらむ」と詠んだ人に同感せずにはゐられぬのではなからうか。あの一點の私心なき國土であると自他ともに許したその人でも、自分だけが獨り國土であるといふ高慢から、他を疑ひ呪ひ嫉み、さては元老にまで危害を加へるやうになつたことを思ふとき、純粹なる清き心は私達には容易に求められぬことに氣づかせられる。凡そ國際問題、社會問題、家庭問題、その他種々ある争ひの根本原因を熟視してみる



曇から

無量壽、無量光  
阿彌陀佛  
信心——まかすこゝろ

と、大體は、人の心の疑ひ嫉み貪りなどの暗い陰影から起る現象のやうである。そこを古人は「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」と覺醒されたのであつた。さういふと、そろ／＼佛教の厭世思想を快活な日本人にふきこむといふ人があるかも知れぬ。元來、我々日本人は、自分達の性根に合ぬ事は、何んな人がいふたからとて聞くものではない。まして千三百年の間、自分達の性根に合はぬ事に盲従してゐたといふ事を、れ自身が我々を侮辱した事である。寧ろ汝は日本人なりやと反問したくなる。快活と自惚、橋慢と自尊とを混同してはならぬ。この頃の新興インチキ宗教の祖師は、大抵、自分は神様であるとか、神の子であるなど自惚れてゐる教祖も少くないが、さういふてゐるすぐ下から、幾人かの貞操を蹂躪したり、人の金を巻き上げてゐるやうでは、陽氣ばかりでも行かれまい。秋の夜靜かに我が心を省みると、何人か醜惡な自分の心の面に驚かぬものがあらう。さて、こゝに氣がついたとき、さう氣をつけさしてくれれた光りに氣づくであらう。呪ひ嫉み高慢などで一杯になつてゐる自我の鐵窓を開いて見れば、木々の梢にも我等の心臓を若返らす酸素を送つてゐてくれることが解るであらう。それと同やうに土も石も山も川も天地一切が我が生命を培つてゐてくれることがしき／＼と感ぜられるのである。さうした一切を永遠に生かさうの無量壽、總てを完全に育て上げやうの無量光、それが即ち阿彌陀佛なのである。されば、いつまでも、そして完全になりたいといふ欲求を持つ私達は、念願するなといふても念



至誠心しじやうしん Ⅱ いつはら

ぬこゝろまこと  
のこゝろ

深心しんしん Ⅱ うたがはぬ

こゝろ、うちま

かすこゝろ

廻向發願心くわうはつがんしん Ⅱ 一

切を大生命きをだいせいめいへす

一心不亂いしんふらん

べゆく心べゆくしん

神の子かみの子、佛の子ぶつの子

願ねがせずはにをられぬのが阿彌陀佛あみだぶつなのである。そこに私達わたくしたちのマカスコ、ロ（信心しんじん）が生うずるのである。この信心しんじんを解剖かいぼうして至誠心しじやうしん深心しんしん廻向發願心くわうはつがんしんと分けられてゐる。更にそれを佛教心理學ぶつしんりがくに依よつて分開ぶんかいすれば、二十にもなるのであるが、要えするにそれは、大生命だいせいめいへ合掌がふしやうする心こゝろ、即ち「ドウゾ」といふ心こゝろで外ほかならぬのである。それを阿彌陀經あみだきやうには「一心不亂いしんふらん」と教示けうじされてゐる。

### 三、淨土じやうどの行ぎやう

とこしへに變かはらぬ完全な佛國土ぶつこくどに進すすみ往ゆくためには、當然、正しい道みちを歩あゆみ行ゆかねばならぬ。されば一切佛教さいぶつしやうの中には、布施行ふせぎやう、持戒行じかいぎやう、忍耐行にんたいぎやう、精進行しやうじんぎやう、禪定行ぜんぢやうぎやう、智慧行ちゑぎやうなど、其他無量そいたむりやうの大道だいだうがかぎりなく展開てんかいされてゐるのである。されど私達わたくしたちは、かくすればこゝろなるものと知しりながら、不覺ふかくの道みちに迷まよひぬるかなの嘆聲たんせいをもらすことがしばしばではなからうか。親おやに孝行かうかうするのは當り前の事ことでありながら、孝行かうかうの譽ほれ高たかき人ひとを聞きく事ことの甚はなだ稀まれであるのは何どうしたものであらう。人は神かみの子佛こほふのみ子こでありながら、佛ほとけの道みちを歩あゆみ得えぬのは不思議ふしぎな事ことではある。しかもそれが事實じじつであることことを否定ひていし得えないのも事實じじつである。といふていつまでも虎狼狐狸こらうこりにいや勝まさる邪道じやだうを歩あゆいてゐてはならぬ。こゝに佛ほとけの大慈悲だいじひがあり、元祖げんそが三十有餘年いうしやねんの惱なやみの生活せいかうがつゞけられたのであつた。さうした凡夫ぼんぷの事實じじつは己みづかに佛ほとけが知しろしめして救すくひの御手みでを



## 一切皆空の境地

## 阿彌陀佛の本願成就

## 凡夫の執し本願の

たれさせ玉ふてゐる事がらなのである。もしそれ佛教の正道から云へば、あらゆる自我妄執はいふまでもなく、自我を構成してゐる法にとらはれてゐるそれ等一切を拂拭しざる所、所謂一切皆空の境地に徹するのを前提とし、つゞいて示さるゝ正しい積極的の大道を歩み行くことでなければならぬのである。されど、取れども／＼とりきれぬものが我等の持つ「オレガ」「オレノモノ」執である。されば大般若經には、空また空、その空もまた空——なんと六百卷に互つて乗り越へ飛びこへて行く行相が縷々として説かれてゐるのである。それほど執着の深いものだ、執着をとり切つて終へといふたからとて、とり切れぬ以上それは無理である。その執着の深い凡夫性を如實に見て心から同情の涙を流し、何とかして救はねばならぬ念願と實踐に依つて、こゝに凡夫救済の大道を啓示されたのが彌陀佛の本願成就なのであつた。それは、私達に起すなといふても起さずにゐられぬ「ドウゾ」の信と、呼ぶなといふても呼ばずにはゐられぬ「南無阿彌陀佛」の行とを、そのまゝ救ひのあかしとしやうとの佛意なのである。尤も佛の大慈悲の前には、さうしたさゝやかな我等のなす信行が何の役に立つであらふ。寧ろさうした自力の執をすてゝ終ふてこそ眞の救ひが感受せらるゝであらうことも考へられぬでもない。勿論、それは表現の相違はあるが、所謂空になる事であるから尊い事ではあるが、さきにもいふたやうに、本來空になりきれぬ所に夫凡の悲しさがあり、そこに如來の願力が動いてゐることに氣づかねばならぬ。この凡



内容

稱名

念佛によつて生活  
を統一する

夫の執をそのまゝ本願の内容となし玉へる願心の深さにしみぐと感ぜしめられるのである。されば私達は、私達が起さずにもられぬ「ドウゾ」の信心の上から「南無阿彌陀佛」と稱へるそこに如來の願力が躍動してゐる確かなあかしを味得しうるのである。それ以外に救ひのあかしを求める必要は少しもないのである。されば、私達の稱ふる一聲くが如來の大生命に育くまれ生かされてゐる事實なのである。故に私達の信行は、私達から云へば、私達の起してゐるものではあるが、それはもと阿彌陀佛が誓はせられた本願道なのである。良忠が「我れからなる心なくして稱ふるたびごとに如來の御誓ひをたのむべきなり」と云はれた心境は正しくそれなのである。これほどハッキリした救ひのあかしは他に求める事ができぬのである。元祖が「天に仰ぎ地に俯して喜ぶべし」と踊躍されたのは、この點にあつたことと思はれる。

赤ン坊が、唯泣くことを生命持續の最高表現として生き行くやうに、凡夫の稱へる念佛はそれ自身が凡夫の生命である。されば、その念佛に依つて一切の生活が統一づけられて行かれねばならぬのである。故に元祖は「現世をすぐべきやうは念佛の申されん方にて過ぐべし」と云はれてゐる。大生命に統一づけられぬ分裂せる生き方は、必ずしまいには破綻を來すであらう。之に反して、大生命の中に生き行くものは、明るく正しく私やかな佛心に懷かれ行くがために、自づからそこに永久へにほがらかな



生活が現はれて來るのである。それを大經には「この光りに遇ふものは、三苦消滅して身意柔軟なり」と示されてゐる。されば、我等の歩み行く信行は、南無阿彌陀佛の中に生き行くことである。

# 念 佛 の 集 ひ

笹 本 戒 淨

## (一)

佛 法然上人と別時念

元祖大師法然上人は日々六萬遍、老後には七萬遍の日課行者で在らせられ乍ら、而も毎年正月元日より一週間不眠不休の別時念佛を修せられ、又人にも勧めて又とき／＼別時の念佛を修して心をも身をもはげまし、とゝのへてすゝむべきなり。日々に六萬遍七萬遍を唱へばさても足ぬべき事にてあれども、人の心ざまはいたく



## 別時念佛とは

目なれ耳なれぬれば、いらくゝとすゝむ心すくなく、あけくれは忽忽として心閑かならぬ様にてのみ疎略になりゆくなり。その心をすゝめんためには、時々別時の念佛を修すべきなり。しかれば善導和尚もねんごろにはげまし、専心の先徳もくはしくをしへられたり。

と示されて居ります。

又第二祖鎮西上人も日々六萬遍の念佛と六時禮讃を嚴修せられた上に、熊本縣白川の邊往生院に於ける四十八日の別時を初め、福岡縣高良山麓厨寺に於ては千日別時を修せられたばかりでなく、御一生の間、常々別時を修行し、また人にも「常に別時に行じて佛を見奉るべきなり（西宗要）」とお勧めになりました。

## (二)

然らば別時念佛とは如何なる行儀かと申しますと、云ふ迄もなく尋常、別時、臨終の、所謂三種行儀の一でありまして、その意味は、特別の日時を限つて念佛の修行が速く成就する爲に、お淨土の阿彌陀佛今現に我等が面前に在ませば、是非その靈容を見奉り度いとの想ひに住して専心口稱の一行を勧む行儀の事であります。念佛の修行成就とは即ち三昧發得であります。元祖大師が御自身の三昧發得の御體驗をお洩し下さつた御道詠



阿彌陀佛と申すばかりをつとめて

浄土の莊嚴見るぞうれしき

はその間の消息をお示しになつたものであります。古來浄土の祖師方何れも懇ろに此の別時の作法について御指南があります。今暫く善導大師が「觀念法門」にお説き下さつた處を引いて、その大略の行儀について申上げようと思ひます。

先づ道場を如法に淨め、一佛像を西の壁に安置す。日限は一ヶ月を四期に分ち、一日―八日、八日―十五日、十五日―二十三日、二十三日―三十日とす、即ち一日、八日、十五日、二十三日を初日と定め日數は適宜一日乃至七日とす。衣服は淨衣を用ひ數珠も持たず、食事は一日一度所謂一食長齋にて儉素にし、期間中晝夜不眠不休、専心相續して或は立てる儘一萬二萬、或は坐せば坐し乍ら一萬二萬、合掌して力の及ぶ限り念佛し、また時によつて禮拜誦經をなす。心には佛を念じて念々に佛を見奉らんと欲する想(見佛想)をなせ。

これが別時行儀の作法でありますから、如法に之を修行する事は中々困難の事と思はれます。

近時各地の光明會等にて催せられて居る別時念佛修養會なるものは、大抵午前四時前後起床、午前、午後、夜各一回の法話、三度の食事時間等を除く外は専心念佛し、期日は通常三日乃至一週間であります。これは主として第三祖記主上人がお傳へ下さ



## 別時念佛の目的

れた用心念佛の行儀、即ち「別時までには無くとも、六時禮讃の次で念佛し、若しくは心澄めるの時、別して用心して見佛の想に住すべし」の御教へに則つたものでありまして、これは前述の善導大師御教示の如法別時に堪へられない者でも修行し得る有難い方法であります。

惟ふに元祖大師が鎮西上人に傳へ給ふた御嚴誡は  
在家のいとまなからん人にて（日々）一萬二萬などをも申すべし。僧尼などとして、さまをかへたらんしるしには三萬六萬などを申すべし。いかにもおほく申すにすぎたる法門はあるべからず。

と云ふ御垂示でありまして、この一事は我々念佛宗の者にとつては最も重すべき御教訓でなくてはなりません。然るに我が浄土宗の現状は滔々として僧俗を問はず、これ程大切な元祖大師の御教に、よし背かぬまでも不忠實でありはせぬかの様子に見受けられますのは、洵に私共末徒として御申譯のない事であります。さればこそ「時々別時の念佛を修して、心をも身をもはげましとのへて進むべき」であります。

## (三)

然らば別時を修する目的は那邊にあるか。これは一寸前述致しました如く、極言すれば三昧發得、即ち大慈悲の如來様にお遇ひ申すにあります。已に元祖大師は



我はたゞ佛にいつかあふひ草

心のつまにかけぬ日ぞなき

の御道詠に明かな様に、自分はたゞ大慈大悲の阿彌陀佛にお遇ひ申し度いと云ふ、此の一事だけは心にかけない日はないぞ、とまで如來様をお慕ひ申して念佛して居られました。又、鎮西上人は、西宗要と申す大切な御書物の中に「念佛三昧發得」の事と題して

これこそ念佛者の大切な事よ。これをよく習ふべき事にて候。一切の行は所期を思ひつめてこそ行ずれ。人ごとに何とも思はで念佛申すは悪しきなり。念佛三昧發得せんこそ所期なれ。

と、私共念佛行者の所期即ち目的とすべき處を指示して居られます。遡つて、元祖大師が阿彌陀如來の化身とまで尊崇し、その御教へは彌陀の直説なりと仰がれた善導大師が「我々の宗、即ち最も重んずべき處は念佛三昧にあり。」と仰せになつて居りますのを拜するにつけ、所謂我が二祖三代の眞精神の存する處、即ち畢竟に念佛三昧を發得するにありとの仰意が彌々瞭かになるのを覺えます。

又善導大師は「念佛三昧は無爲にして即ち涅槃なり」「極樂は無爲涅槃界なり」等と仰せになつて居ります。然れば若し念佛三昧を得ればその心の境界は、とりもなほさず極樂であつて、その時こそ實に私共の平生憧れてゐる極樂往生の果が自然に得ら



れるのであります。

尙、鎮西上人は「西宗要」の中に問答を設けて

尋て云く、別時念佛の機とは何なる機なるぞ。答ふ、念佛は是れ見佛三昧を期（所期即ち目的）と爲す。然るに遅く見え給ふが故に、疾く見奉らんが爲に別時の念佛を用ふる也。（中略）尋て云く、尋常の念佛者も別時の念佛を兼て之を行すべきや。答ふ、爾るべし。尋て云く、兼ねる意如何。答ふ、頓頓に（佛を）見奉らんが爲なり。急急に法が成就する故なり。

と、お説きになりました。

(四)

三昧發得

以上の處によつて私共念佛者の究竟の目的とする處、及び別時念佛を修行するわけを大體御了解下さつた事と思ひます。併し乍ら茲に問題となります事は「果して我々如き散亂心の凡夫に如來様にも遇ひ申す事など出来るであらうか」と云ふ一事であります。古今東西を問はず、これは一大事であつて、到底我等の力の及ぶ處でないと思ひ且つ説かるゝのを耳に致します。然し有難い事に元祖大師が阿彌陀佛の化身とまで仰がれた善導大師は、此の事可能なりと仰せられました。即ち「觀念法門」の中に若し定心三昧（觀佛三昧）及び口稱三昧（念佛三昧）を得れば、心眼即ち開けて彼



の淨土の一切の莊嚴を見奉る事、説くとも窮盡無けん。又此の經を以て證す。一切の凡夫但使心を傾くれば定んで見奉るの義あり。知るべし。たとひ（此の義を見聞する者ありとも驚き恠むべからず。何を以ての故に。乃ち阿彌陀佛の三昧力外に加はり給ふが故に。

の一句が即ちそれであります。「若し念佛三昧を得ればも淨土の一切の莊嚴を見奉る事を得。」一切の凡夫」即ち聖人ならざる凡夫、而も「一切の」と仰せになりました。乃ち「私共一切の凡夫が、若し一心になれば、定んで」即ち「必ず」であります。「必ず阿彌陀佛を見奉る事の出来るわけがある。それは阿彌陀佛が三昧定力と云ふ尊い御力をお添へ下さるからだ。」と。

更に元祖大師は「決答授手印疑問鈔」に「心が散亂し、妄念起りて止り難いのは如何にせばよろしきや」との問に對し次の如くお答へ下さいました。

先づ名號を唱ふれば、名號の徳として、妄念も自ら止み願心も自ら生ずるなり。何に況や本願の元意は亂心止め難き者を化んが爲なり。妄念の止め難きに付けても一向本願を仰ぐべし。散亂の靜まり難きに付けても一向に名號を唱ふ可きなり。

これによつても、私共は散亂妄念のまゝ、たゞ一向に念佛すれば遂に大慈悲本願名號の御力によつて散亂自ら靜まり、妄念自ら止みて三昧心現前する事は、元祖大師の御體驗の御教によつて少しも疑ない處であります。



## 一向念佛

又鎮西上人は「西宗要」に

佛は衆生に見えんと思し食す。我は佛を見奉らんと思つて三心究竟するが故に、佛其の時に見ふ給ふ也。(佛の)三力の縁も、行者の正因を待て見え給ふ。行者の因も佛の加被力の故に見奉る因縁必ず具する也。

誠に觀無量壽經には「佛心とは大慈悲是なり」と曰給ひ、善導大師、亦我等に教へて、佛と衆生とは親子の間柄にして、念佛者には形と影の如く護念を垂れ給ふ。」と。されば元祖大師も「心の妻にかけぬ日ぞなき」と葵傾せられ、鎮西上人が「佛は衆生に遇つてやらうと思召す。衆生も亦慕ひ申して念佛する時、遂に親子の因縁和合し三昧を發して大悲の阿彌陀佛を見奉る也」と示されし、實に三昧發得の祖師の御教へ唯、頂戴受持せざるを得ないのであります。

## (五)

三昧發得、それは如何にも大事であります。併し乍ら善導大師「觀經疏玄義分」に宣べられし如くこれこそ本宗の「宗」とする處、「これこそ念佛者の大切なる事」であります。然れば私共は三心を具し常に阿彌陀佛にお遇ひ申し度いとお慕ひ申し、口に稱ふる處は確かに日々一萬二萬乃至三萬六萬、祖師の御教へを素直に遵奉して精進し、又折あらば時々は別時の念佛を修し、心身を策勵して自ら實感せらるゝ法悦、



信念を以て他に願ち共生極樂成佛道の一路を進ませて頂き度いものであります。

最後に一言申し上げたい事は私共の念佛生活に於て最も大切な用心、即ち「心構へ」

は、「慈悲の阿彌陀佛今現に私共の真正面に在りして護念し給へば、速く心眼開けて

その聖容を拜し奉り度いとお慕ひ申し見佛想、一言にして申せば『助け給へ』の

思ひ―歸命想に住して見奉らるゝと否とに拘らず、尋常、別時、臨終と、時節の

如何に關せず一向に念佛する事であります。この事は本宗に於て最も重んずべき五重

相傳の一重なる決答授手印疑問鈔下卷の「三種行儀處」と云ふ中にも判然と「行儀は

尋常、別時、臨終と三種異れども歸命想即ち見佛想に住する心構へ―用心は同じかる

べし」と仰せられて居ります。更に善導大師は「觀經疏定善義」の中に

衆生行を起して口常に佛を稱ふれば、佛即ち之を聞き給ふ。身常に佛を禮敬すれば、

即ち之を見給ふ。心常に佛を念ずれば、佛即ち之を知り給ふ。衆生佛を憶念すれ

ば、佛もまた衆生を憶念し給ふ。佛と衆生の三業は相捨離せず。かるが故に親縁―

親子の如き間柄である。

と、お教へ下さいました。元祖大師の、前に掲げました御道詠を拜しましても、寔に

その感を深うするものであります。

われはたゞ佛にいつかあふひ草

心のつまにかけぬ日そなき



かくの如くして未だ如來を見奉られしと否とを問はじ如來の光明の中に念佛に活  
 くる者は、或る聖者の曰はれし如く、「常に如來と共にありて聖意を我が心とし、意義  
 あり價值ある生活をなし、今日一日の勤めは永遠の基礎となることを信じ、永しへに  
 希望の光は前途に輝き、現在を通じて永遠の樂土に安住する者である。此等は失敗の  
 内にも成功の秘密を發見し、苦境の究りに樂土を見出し、艱難に遇はゞ己れを研ぐの  
 砥石と意得、困苦に對しては人格を鍛練するの器となす。凭の如き光明の前には一切  
 の事業として悉く佛道ならざるなき」光明の生活が得られ、又事實、現在私の知  
 つて居ります範圍に於ても、この光明生活を自ら體現し以て其の喜びを廣く同胞に及  
 ぼして居らるゝ方々が僧俗を通じてその數決して尠くありません。されば今後共々互  
 ひに此の念佛の道に一層精進致し度いものであります。(畢)

×

×

×

×

×

×

×

×



まづたあたらしき新しい社會生活

# 社 會 生 活

島 野 禎 祥

## 一、時代の感じ

私は此頃よく新聞など讀んでゐて、あの支那の人々の生活のことを考へたり、スペインの戰禍の中で過してゐる人々の生活のことが考へられる。そしてその時代時代によつて、人々は過去に於ては考へることもなかつた生活を味はうものだとしミジミ考へる。そして今日の時代ほどそれが痛感されることがないような心ちがする。そして今の生活の中で社會大衆はどんなに生きようとしてゐるのだらうかと考へるのである。だから私は好んで現代人の生活記録を讀むことに努める。

昔方丈記が書かれた時代を思ふ時に、それは平安末期の焦慮と不安と絶望の中に人



社會の不安と希望の萌芽

厭離穢土、欣求淨土

々が押し流されて行つた時代を想像することが出来る。

現代社會生活はそこに行く、その時代的焦慮、不安、絶望と言つたことがもつともつと強烈な氣がする。大衆の生活には希望がない。従つて建設がない。絶望と享樂がある。然しどんな絶望の時代に於ても、刹那的享樂に酔ひしれた時代に於ても、どこかに健康的時代の芽がかくれてゐる。そして、それが来る次の時代を建設する大きな役割をはたすのである。

私は今日の時代的生活の中にゐてそれを感じるような心ちがするのである。

私の與へられた題目は『社會生活と念佛』と言ふことであつた。

念佛の功德を説くにはあまりに傷だらけの私である。然し生きる惱みが身體中を傷だらけにしてゐるこの自分の姿はそのまゝある階層を代表する人々の惱みでないかと思ふのである。そして、この絶望の時代に、どんなに虐げられてもキツト生き抜かないで、おかない決意は新しい時代への希望の芽を持つてゐるからである。

私は常に胸にえがくのである。

『厭離穢土、欣求淨土』これほど今の時代に胸にヒシヒシとくる言葉はないのである。そうした心で現實に對し處理してゆく態度、生きる姿の中に、私は今日の時代の念佛者の姿を見ようとするのである。だからそれを語ることで、私に與へられた題目をはたさうと思ふのである。



心の窓が無い

農村でも同じこと

然し生ねばならぬ

## 二、近代に生きて

都會の生活を見て何がさびしいと言つて、都會の人々に心の窓がないことだ。都市計畫は企だてられ、よい道路が出来、よい小公園が出来、都市の緑化が企だてられる。それは非常に明るいようだ。だが心の窓は明けられやしない。人々は生活に追ひまわられ、不安と焦慮に身をけつてゐるのだ。私は東京のダーク・サイドを見たことがある。あそこには公然と賣淫があふれて居り、そこに心の窓を失つた人々が雲集してゐる。私はあれだけを見ても、心の窓を失つた人々の不幸を考へるのだ。よい生活、明るい生活を思ふ時、一層暗い陰惨な不幸の生活が考へられる。私達の生きる心はそのどちらの中にも強く侵潤してゆかねばならないのである。

農村の生活でも同じことではないか。どんなに明るい太陽がサンサンと降りそぐいでもその生活それ自體に限りない不幸が巢食つてゐることは、どんなにその生活を不幸にしてゐることか。

私達はそうした不幸の生活の中で、生きる努力をつゞけねばならぬ。そこに限りない苦痛がある。しかもそれを堪へねばならぬ。そこに限りない闘争がある。私達の生活がある。そこにも厭離穢土、欣求淨土の心がしみわたるではないか。私は今の時代こそ、この心を人々が心から心にしみわたらせる時だと信ずるのである。私は社會生



希望は消へぬ

共同の幸福のため  
に

活に念佛がどんなに強くアツピールするかと言へば、その時ではないかと思ふ。よい社會を作るためには人々の心の建設が問題になる。厭離穢土の強い認識は、單なる未來往生の思想ではないと思ふのである。それは現實に強く働きかけることを主張するのである。考へることのない世界、享樂と絶望の泥沼にのたくる人間世界、それでよいのだらうか。私達はそこを抜け出るためにあるだけの努力をする。その生きる姿が念佛する者の姿でなくてよからうか。

然かも欣求淨土の燃える希望はどんなに強い壓力でも消やすことが出来ないのだ。私はそうした理想と實踐を結合した世界が、今の時代にどんなに輝かしい希望であるかを述べたいと思ふ。

### 三、念佛を生きる人

くどく説いて來たように今日の社會生活が理想に近い社會ではなくて、非常に暗い不安の時代であることは誰でもが身を以つて味ひつゝある。今、こうした生活の中で求められるものは、明日に死よりも強い困難がせまる時でも、一つの理想に燃えて、一段階一段階づつ歩みつゞける心である。都市の生活の中にもそれは必要である。農村の生活の中にもそれは必要である。私は工場で働く労働者の中にその心を念ずる。農村で働く貧農の中にその心を念ずるのである。私はそれは厭離穢土に徹しなければ



## 念佛者の世界

## 念佛者の生活態度

## 大衆の心の窓を開け

ばならないと思ふ。それは身についた一切の恨惑を超越して、換言すれば個人的闘争心を捨てて、全體的社會的な共同の幸福のために心を合せることになる。今の社會で大切なことはそれである。共同の幸福を祈る心が欣求淨土の實踐になるのである。いやな闘争がつゞけられることは個人の恨惑があるからである。そうした世界を放棄することが眞實の厭離の心である。

念佛の世界に、念佛を唱える心に、そんな個々の斗争の世界はいらないのである。一つの淨土が念佛者の世界である。

私達の生活の中に淨土を憶念する心が起きて来る時、すべてのいやらしい闘争はすてられる。靜かに私達は其の苦痛に堪えながらも共同の幸福のために歡喜の世界に生きられる。そこに強い社會愛の生活が展開されるのではないか。

念佛者の生活態度はそこに生かされるのでないか。社會が不安と焦慮のとりこになつてゐる時、念佛者の生活がすべての社會生活の指導權を持つまでに、それも強權的にではなしに心から心に傳はり、自然に打ちたてられることは、どんなに大衆の生活に強い安心を與へることになるのではなからうか。

そこに大衆の心の窓は開かれるのだ。

強い信仰運動が社會全體の力になる時、それは一つの社會的力である。欣求淨土はかくして、新社會の建設に大きな精神的礎石を作り上げることになる。



## 法然上人の御遺訓

## 社會生活の中へ

私わたくしはこゝで次の結論けつろんに到達たうたつした。

宗祖そうそ法然上人はふねんしやうにんが念佛ねんぶつを以もつて、如何いかに社會全體しやうかいぜんたいを考かんがへ、社會愛しやうかいあいと、次つぎに來る世界せかいの光明くわうみやうを念ねんじたかと言いふことである。

「あとを一廟びやうにしむれば遺法ゐはふあまねからず。予よが遺跡ゐせきは諸州しよしやうに遍滿へんまんすべし。ゆへいかんとなれば、念佛ねんぶつの興行こうぎやうは愚老一期ぐらういちの勸化くわんげ也。されば念佛ねんぶつを修しゆせんところは、貴賤きせんを論ろんぜず、海人漁人かいじんぎよじんがとまやまでも、みなこれ予よが遺跡ゐせきなるべし。」

これは御遺跡ごゐせきの事ことにつき法蓮房はふれんぼうに示しめされたる有名いうめいな御詞ごことばであつたことは、念佛者ねんぶつしやは誰だれでも知しつてゐる。

然しかかも時代じだいは移うつり、社會生活しやうかいせいふくわつの變轉へんてんは特に激はげしい現代げんだいに於おいて、これをどんな事情じじやうの下もとで考かんがへねばならないかと言いふことが何なによりも大切たいせつの筈はずである。私わたくしはそれでくどくそのことを述のべて來た。

## 四、念佛の時代性

即すなはち念佛ねんぶつは今日けふの社會生活しやうかいせいふくわつの前面ぜんめんにまで、念佛者ねんぶつしやによつて押し進すすめられねばならないのである。換言くわんげんすれば念佛ねんぶつの生活せいふくわつが、今日こんにちの社會生活しやうかいせいふくわつの鋭い批判ひはんの尺度しやくどにならねばならないのだ。念佛者ねんぶつしやの生活せいふくわつは社會大衆しやうかいだうしゆの生活せいふくわつをそらして眞實しんじつの世界せかいに押進おしすすめるパイロットでなければならぬのである。



大衆に興へる安心  
と光

不安と焦慮におのゝき、飢餓と失業に呻吟する大衆に安心と光をあたへる者が念佛者の淨行でなければならぬのだ。

『そうでなければならぬ』と言ふ主張が觀念的で、ピンとこないならば、ジツト眼を  
とじ我が念佛の祖法然上人の御詞をジツト考へることだ。法然上人は身を以つてそれ  
を示して下さつたはずだ。それを時代と社會の變轉と言ふ歴史を無視して考へる時に  
念佛は窒息する。念佛者は社會の反時代的ビエロになつてしまふ。

念佛者は社會の正しい發展の線に沿ふて、その時代とその事情の中に正しく念佛を  
押しすゝめる人類愛と社會愛に燃える戦士であらう。壓離穢土と時代々々に認識しつ  
ゝ、新しき社會建設の熱情を眞實こめて欣求淨土するのである。

念佛の叫びが、現實に社會大衆の生活の糧にならなければならぬのだ。念佛が社  
會生活の隅々までゆきわたる努力は、それは社會全體の協同化でなければならぬは  
づだ。

社會的協同化は現代の社會に於て最も進んだ社會生活形態を指示してゐる。念佛者  
はこの社會生活の方向に、その念佛を押しすゝめることだ。

今ほど人類は時代的苦惱を呻吟してゐる時はない。時代的壓力に人類は壓死しよう  
としてゐる。この時代から解放される新しい時代の躍進のために念佛が人の心にしみ  
わたることが念願されるのである。

念佛者は社會愛の  
戦士

今こそ念佛の時代



私は都會の隅から晴れわたる月を仰ぐ。コンクリートの道のすみでも虫が鳴いてゐる。法然上人の月影の歌が腸までしみてくる。世界のどこの隅からも、同じ心でジツト時代を生きる念佛者の心が想はれるのである。どんなに苦しくとも、どんなに悲しくとも、来る日まで、黙つて進むのだと誓ひたい感情が胸にこみあげて来る。無心に鳴く虫の音が、互に誓ひ合つて戦ひの野にゆく陣列の足音のように想はれたりする。静かに静かにこの想ひを亂すまいぞ。月は深んだ秋を思はせるように照らしてゐる。

(十月二日)

女

性

江 藤 澂 英

淨 土 開 宗

釋尊の教

今から大凡二千五百年前、印度に出世せられた大聖釋尊は、六年の苦行をつまれて



機縁<sup>きえん</sup>は人々の根機<sup>こんき</sup>とその時にめぐりあはした因縁<sup>いんえん</sup>

人間<sup>にんげん</sup>のための宗教<sup>しゅうきやう</sup>

立教開宗<sup>りつけうかいしゆ</sup>

最勝易行道<sup>さいしやういぎやうだう</sup>は修業<sup>しゆぎやう</sup>のためのいちばん易しい道<sup>みち</sup>、即ち浄土宗<sup>じやうどしゆ</sup>のこと。

遂に大覺を得られ、四十五年間に亘つてその證悟の内容を種々なる機縁に應じて説かれました。然しその幾多の聖教の肝要は「誰でもが無量の壽と無量の光のみ佛に救はれ、そのみ佛と同一體になられる」と云ふことで、更に換言すれば「吾々は誰でも身體の親を持つ様に、心の親、命の親を持つてゐる」といふことを教へられたのであります。

この教は爾來千數百年の間、印度、支那、日本と傳はつて、多くの縁ある人々を救ふたが、今これを歴史の上から見て、眞實に吾々凡人のために、明かな實踐の宗教として開闡せられたのは、わが浄土宗祖法然上人その人であります。

法然上人は世俗の騷亂と名利から逃れて、靜かに比叡の奥は元黒谷の報恩藏で、釋尊一代の聖教は勿論、五千餘卷の經論釋の研鑽に没頭せらるゝこと前後三十年、永い間の思索と體驗を具さに嘗められた結果、到達せられた妙境はたゞ「南無阿彌陀佛」のお念佛でありました。それは佛が衆生を救済し給ふ超世の本願であるから、念佛さへすれば誰でも佛様と同一になり得ると云ふことで「人間が佛になる」最勝易行道の發見でありました。これが即ち「浄土開宗」で、高倉天皇の承安五年三月、上人四十三歳の春であつて、今茲昭和十一年を距ること正に七百六十二年の往昔であります。

## 浄土教と女性



## 聖道門の教

## 女人禁制

求法せうぽうのみ教きやうを求もとめること。

法然上人はふねんしやうじんの女性じやうせい開放かうぱう

時處じきち諸緣しよえんととき、  
ところいんねん

法然上人はふねんしやうじん以前のいぜん日本のにっぽん佛教ぶつぎやう、それは深遠しんえんな教學がくしゆの究理きうりでなくば、煩鎖はんさな加持かぢや祈禱きたうを主しゆとする所謂いはゆる聖道門しやうだうもんの諸宗しよしゆで、奈良ならの六宗りくしゆ（俱舍くしや、成實せいじつ、三論さんろん、法相はふさう、華嚴けごん、律りつ）平安へいあんの二宗にしゆ（天台てんだい、眞言しんごん）皆みなこれであります。これ等の諸宗しよしゆは「吾々凡人われわれにんげんが佛ほとけになる」と云ふ實踐じつせんの宗教きやうきやうには餘りにも縁遠えんどほいものであり、殊ことに女性じやうせいは五障しやうしやう三從さんじゆの罪惡つみのふかい深重しんじゆう者ものとして、劣等れつとうなもの、無智むちなもの、穢惡けがれなものなりとて差別さべつし、高野山かうやさんを初め諸方しよはうの靈山聖地れいざんせいちには「女人禁制によにんきんせい」の制札せいさくが高々と掲げられて、女性じやうせいが求法せうぽうの道程みちすら閉塞とさされた状態ありさまでありました。然るにわが大師だいし法然上人はふねんしやうじんの淨土開宗じやうとくわいしゆに依て、彌陀みたの本願ほんがんが高調てうせられ、念佛ねんぶつの法門はふもんが開闡かいせんせられて、人は男女老若なんにやうらうじやう、智愚貴賤ちぐきせんの區別くべつなく、時處じきち諸緣しよえんを簡かんばず、心に助け給へたすけたまふと念ねんじ、口に南無阿彌陀佛なむあみだぶつと稱しょうするならば、一樣いように彌陀みたの最愛さいあいの赤子せきしとして、樂邦らくぱうに往生わうじやうすべきであるといふことを、釋尊しやくそん一代だいの聖教せいぎやうは勿論もちろん、天親てんじん、善導ぜんだう、惠心えしん等印度支那えしんなどいんど日本三國傳にっぽんさんこくでん燈先哲とうせんてつの論釋ろんしやくに依て確證かくしちし、上人しやうじん自らの螢雪けいせつ三十年さんじゅうねん、智惠ちゑ第一だいいち、博覽強記はくらんきやうき、廣學多才くわがくたさいと學德がくとく一世せいに謳歌おうかせられ乍なら、彌陀みた本願ほんがんの前にひれ伏ふしては、「愚痴ぐちの源空げんくう、十惡じくの法然はふねんはたゞ念佛ねんぶつして往生わうじやうせんのみ」と、麻衣まい一肩いけんの凡僧ぼんそうとして、眞葛原吉水まかつがはらよしみづの庵室あんしつに、日課にっくわ六萬遍むんべん一向專修かうせんじゆの念佛者ねんぶつしやとしてその範ていを垂たれられたのであります。こゝに於て從來これまでの隔歷へだては撤廢てつぱいせられ、女性じやうせい救濟きうさいの本義ほんぎも鮮せん明めいせられたのでかくて淨土開宗じやうとくわいしゆなる新興宗教しんきやうきやうきやうの一面めんには、實じつに女性じやうせいに取つて偉大ゐだいなる革命かくめいが斷行だんかうせられてゐるのであります。然らば何故なにゆゑに舊宗教きうしゆきやうきやうはかくも女性じやうせいを虐待ぎやくたいした



外面如菩薩內心如  
夜叉

寶積經の説

智度論の説

阿含經の説

のであらうか、暫し大乘佛教本來の面目に徴して、誤れる女性觀を指摘し、佛教の正しき女性觀を見、以てわが宗祖法然上人淨土開宗の眞義たる、念佛と女性について考察したいと思ひます。

## 佛教の女性觀

「外面如菩薩內心如夜叉」とは、古來佛教の女性觀として使用された常套語であります。今その典據は明瞭でないが、美しく咲き誇れる薇薔の花はその美に憧れて接近すれば、恐ろしい荊に刺される様に、女性は外見に似ぬ毒々しいものであることを示したものだと思はれます。或は『寶積經』には『一度女人を見れば眼の功德を失ふ、縦ひ大蛇を見るときも、女人を見るべからず』と云ひ、『智度論』には『清風色なきも捉ふべく、蛟蛇毒を含むも尙觸るべし、劍を取つた敵に向ふ猶勝つべし、女賊人を害す、禁すべきこと難し』と示し、『阿含經』には『一度女人を見れば永く三途の業を結ぶ、何ぞ泥んや一度死するに於ておや、定んで無間の地獄に墜つ』とあります。何れも一言まことに俊烈極まる文學であります、しかしこれ等は果して女性そのものの本質を惡としたものでありませうか、私は寧ろこれは女性に溺れ易き男性を誡めた語として味ふべきであると思ひます。或は女性の本質を斷じて『三千世界の男子の諸の煩惱を集めて一人の女人の業障となす』といふ様な惡口もあるが、これが眞に佛教の女



## 女性觀

## 女性の立場

## 女は罪が深いか

性觀であるとする、佛敎の女性をば再起することの出来ぬまでに虐げたものと言はねばなりません。しかしこれは男性を主とした修道上の訓誡と見るべきで、女性を主とする時「外面如菩薩内心如夜叉」はそのまゝ男にも通ずるので、「大蛇を見ると男子を見る勿れ」とも當然云ひ得るのであります。

## 女性に對する謬見

洋の東西を問はず敎の淺深を論ぜず、古來女性は輕蔑せられて、「弱き者よ、汝の名は女なり」など云はれております。尤もこれは從來の文化はすべて男子に依つて作られたと云ふてもよいので、宗教も修養も男性が中心であり、從て男性の修道のため「外面如菩薩内心如夜叉」の語が、女性に向つて放たれたのであります。然れば修道のためとか修養のためとか云ふ男二義的な女性罪惡觀は、吾々は問題にするに足らぬことは申す迄もありません。今や男性に依て創造せられた文化も漸く破綻して、決算が餘義なくせられた時、今後は婦人の力に依て創造される文化か、然らざれば男女共力で創造される文化でなくてはならぬのであります。而して前述の如き第二義的な女性罪惡觀は全然無意義なことは明瞭であります。若し虚偽なりとすれば人類は何千年來、女性を強ひ來つたことで頗る論議すべきことと思ひます。女は罪が深いとか、



釋尊の女性觀

四姓、婆羅門、貴族、平民、奴隸

釋尊の女性開放

否男の方が悪いとか、そうしたことは元來一概に斷定し得ることではありませんが、東洋にありては殊にわが國の如きは、女性の位置が低くこれまでは概して男の下積になつて、毎に壓迫され勝ちであつた點を充分考慮して、至公至平に男女共存の本義を考へねばならぬと存じます。然るに舊來の佛教は兎角女性を罪惡視し之を惡口する傾向がある様であります。事實そんなに女性を惡んでおらぬのにも係らず、碩德高僧と稱せらるゝ人にして、尙且つ罪惡深重の惡人とか、三障の女人といふが如き言葉を平氣で繰返されるのを耳に致します。こは寧ろ一種の惡僻とでも見るが至當であります。せうが、苟しく現代の婦人問題を扱はむとする人の注意すべきことであります。かくては佛教は女性を解せず、婦人問題を論ずる資格を失ふであります。殊に吾等淨土教徒は從來の謬見に對して深く省察せねばなりません。

## 釋尊と女性

釋尊の女性觀を一瞥してみますと、釋尊がこの世の救濟主として出現された時、その地位が高いために眞の宗教の光に接し得ない者や、また餘りに社會位置が低い爲に宗教を聞き得ない者のために、所謂四姓の區別を打破して宗教の門戸を廣開して光を與へられておられます。無論女性に對しても其人格を認みて、證悟の機會を充分に與へられたので、釋尊は宗教的に女性の開放を斷行されたのであります。それは釋尊に



## 涅槃經の説

別淨土教は男女無差

韋提希夫人

救済の本願

たらしいのであります。宗教は原理として萬人に許さるべきであります。殊に大乘經典中後期の劇作である『涅槃經』には「一切衆生悉有佛性」を力説されてあれば、女性も佛性を具有することは勿論でありまして、女性も立派に成佛し得るのであります。

## 淨土教の眞髓

法然上人に依て開創せられた淨土の宗教たる「南無阿彌陀佛」の口稱念佛は、大乘佛教の精髓たる彌陀の本願であつた。男女の性を超越し、智愚、貧富、貴賤等あらゆる差別を撤廢して、共生極樂の大果を得る萬機普益の宗教であります。しかも法然上人が淨土開宗の本據たる『佛說觀無量壽經』には、凡人女性の代表者ともいふべき韋提希夫人が念佛に依る救済が確證されてあります。韋提希夫人は心想羸劣の凡夫として、憂愁苦悶のドン底で人生の悲哀に泣き沈んだ一女性であります。愛、嫉妬、虚榮、貪慾、愚痴、そうした女性が『觀經』に於ける信の宗教の正客たるを知る時、吾々は人類史上に初めて體顯せられた、眞實の信仰を生命とする宗教を發見するのであります。

かくの如く吾々凡夫は「南無阿彌陀佛」と佛の聖名を唱ふことに依て悉く救済されるのであります。これが彌陀の本願であり、釋尊出世の本懷であります。この



眞實義を明示されたのがわが法然上人の淨土開宗であります。吾々は茲に一旦釋尊に依て解放せられた女性が、後期の佛教に於て再び囚はれて殘忍なる男性の文化の犠牲となつたが、法然上人の淨土開宗に依て女性の人格は完全に復活したことを知るのであります。茲に吾々は女性と念佛の有難さをしみじみと味識するものであります。

## 家庭生活

佐藤 春夫

念佛の教へはもともと在家の衆を主にしたものであるから家庭生活のどの部分ともすこしも牴觸しない重寶なものです。宗祖の上人は

たとひ餘事をいとなむとも、念佛を申し申しこれをするとおもひをなせ。餘事をしし念佛すとはおもふべからず。

と仰せられてゐるから、家庭生活をしながら念佛の行をしてゐると思はずに、念佛



往生わうじやうとは何か將來しやうらい何不足なにふそくのない生活せいくわつを得られるといふ希望きぼうとを認めて、その希望きぼうによつて現在げんざいの心持こころもちが輕快けいぐわいになるありがたい境地きやうちを指すのである。こんな心持や、絶對ぜつたいの歸依服從きいふくじゆつといふやうないぢらしい他力精神たうりきせいしん、しばらくはお人好しひとよしの馬鹿ばかになつて樂たのしむといふ程ほどの氣分きぶんが、家庭生活かていせいくわつのどの一員みんにとつても邪魔じやまな氣分きぶん不都合ふがふな道理だうりも別べつにありますまいと思つてゐますがどんなものでせうか。

家庭生活を不愉快にし一切の社會生活を不安にしてゐるものは、およそ念佛の氣持とはうらはらの「おのれが」「わたしが」と頑張り合つてゐる心ではありますまいか。

さうだと御同感になつたら、今これを讀む序にすぐ、そのまま――

なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、  
なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあめだぶつ、なむあみだぶつ、なむあ



みだぶつ。

と今日に見たままを普通の聲で音讀してください。

——念佛の行といふのは、ついそれだけの事なのです。

そんな事がどういふ理屈で有難いのか。それは僕の知つた事ではないし、誰も別に知らなくてもいいはなしださうですよ。何もかもついそれだけのあつけないほどのものでさ。

## 念佛の意義

椎尾辨康

### 総合進動の相

一切が念佛のすがたである

咲く花に美しさを見るも、澄む月に朗かさ感ずるも、皆これ念佛である。



息つくことの重大さ

一大生命のあらはれ

個在なし

私たちが一と息するのも自分だけの力ではない。一切の動物が、一切の植物とお互に息つき合ふてゐるのであつて、呼吸は造化の大いなるハタラキである。單に呼吸だけについて見るも、考へれば考へる程廣大な因縁のあることが了解されるであらう。若しこの呼吸が一と息でも出来ぬとなつたら、英雄も美人もあつたものではなく、萬事休することになるのは火をみるより瞭である。かと云つて、息つかずにゐること出来ぬから、初中終これを中斷しないやうに注意してゐなければならぬとせば、人と話をすることよりもイキつくことに、食物を嚙み下すことよりもイキつくことに、又熟睡することよりもイキつくことに注意して、一息でも休まぬやうにせねばならぬことになつて、眠れず、食はず、語らず、考へず、たゞイキつくことにのみ心配して、遂に神経衰弱となり、果ては死ぬより外はないことゝなる。これほど大事な呼吸が何らの意識も加へず、神経衰弱になるやうな注意もせず、晝夜間斷なく繼續されて行はれてゐることも、動植物相互に行つてゐる造化の妙機たることを思ふ時、イキることとは自分獨りのすることでないことがはつきりと認識される。天地間の一大生命の動きが、たゞ岩石ともなり、草木ともなり、禽獸ともなつてゐるのであるが、これを各個の存在と考へるのは私達人間の思惟で別なものととして引き離してゐるだけのもので、これは決して別個の存在ではない。佛教は無我を發見して個々の存在を否定し、何物も一切と總合進動し行くすがたに國家社會を見るのであつて、鳥は鳥、犬は犬と



一切の力に生かさ  
れる自己

分別有

してこれを個在とすることは分別の上に立つ假の考であるとしてゐることを忘れてはならぬ。一葉一葉は別々であるが、これを引き離せば枯れて了ひ、生き葉でなくて死に葉である。生き葉は枝に幹に根に華に、そして大地のすべてに關聯してゐる一大総合進動の相を如實に現はしてゐる。

かやうに考へ來れば、私自身も私一人で生きてゐるのではない。呼吸一つすら私の獨りの力ではない。自分の身體であると思つてゐる此の私の身體でさへ、それは父祖の力の現はれであり、更に社會の力の現はれであつて決して自分だけが生きてゐるのではない。一舉手一投足悉く天地を通じて流れ行く力の生きてゐる相である。一として我が物とすべき個在はない。

これを若し過つて別個の存在と見る分別有を眞實なりと云ふは、假に分別せるもの(假)を實として執せる誤解であり、妄執であり、邪見である。然るに世間にはこの過誤に陥れる者が多い。我は我獨り存する如く考へて天地の恩を忘れ、國恩を忘れ、父祖の恩を忘れ、動植物の御かけを忘れてゐるものが多い。我が身と過り執するが故に憍慢懈怠となり、我が智慧と想ふが故に聰明・穎敏を誇り、我が財として貪慾・放蕩・浪費を敢てする等、皆個在と考へてゐる分別知見を強調した過ちである。當今の學者、分析のために假設したる分子や元素、電子や諸力、個在や個人の總合的進動性を忘れて唯物・實在・人權・自由等に執するが如きは、精神科學者たると自然科學者たるとを問



息つくことの重大さ

一大生命のあらはれ

個在なし

私たちが一と息するのも自分だけの力ではない。一切の動物が、一切の植物とお互に息つき合ふてゐるのであつて、呼吸は造化の大いなるハタラキである。單に呼吸だけについて見るも、考へれば考へる程廣大な因縁のあることが了解されるであらう。若しこの呼吸が一と息でも出来ぬとなつたら、英雄も美人もあつたものではなく、萬事休することになるのは火をみるより瞭である。かと云つて、息つかずにゐること出来ぬから、初中終これを中斷しないやうに注意してゐなければならぬとせば、人と話をすることよりもイキつくことに、食物を嚙み下すことよりもイキつくことに、又熟睡することよりもイキつくことに注意して、一息でも休まぬやうにせねばならぬことになつて、眠れず、食はず、語らず、考へず、たゞイキつくことにのみ心配して、遂に神経衰弱となり、果ては死ぬより外はないことゝなる。これほど大事な呼吸が何らの意識も加へず、神経衰弱になるやうな注意もせず、晝夜間斷なく繼續されて行はれてゐることも、動植物相互に行つてゐる造化の妙機たることを思ふ時、イキることとは自分獨りのすることでないことがはつきりと認識される。天地間の一大生命の動きが、たゞ岩石ともなり、草木ともなり、禽獸ともなつてゐるのであるが、これを別個の存在と考へるのは私達人間の思惟で別なものととして引き離してゐるだけのもので、これは決して別個の存在ではない。佛教は無我を發見して個々の存在を否定し、何物も一切と總合進動し行くすがたに國家社會を見るのであつて、鳥は鳥、犬は犬と



一切の力に生かさ  
れる自己

分別有

してこれを個在とすることは分別の上に立つ假の考であるとしてゐることを忘れてはならぬ。一葉一葉は別々であるが、これを引き離せば枯れて了ひ、生き葉でなくて死に葉である。生き葉は枝に幹に根に華に、そして大地のすべてに關聯してゐる一大総合進動の相を如實に現はしてゐる。

かやうに考へ來れば、私自身も私一人で生きてゐるのではない。呼吸一つすら私の獨りの力ではない。自分の身體であると思つてゐる此の私の身體でさへ、それは父祖の力の現はれであり、更に社會の力の現はれであつて決して自分だけが生きてゐるのではない。一舉手一投足悉く天地を通じて流れ行く力の生きてゐる相である。一として我が物とすべき個在はない。

これを若し過つて別個の存在と見る分別有を眞實なりと云ふは、假に分別せるもの(假)を實として執せる誤解であり、妄執であり、邪見である。然るに世間にはこの過誤に陥れる者が多い。我は我獨り存する如く考へて天地の恩を忘れ、國恩を忘れ、父祖の恩を忘れ、動植物の御かけを忘れてゐるものが多い。我が身と過り執するが故に憍慢懈怠となり、我が智慧と想ふが故に聰明・穎敏を誇り、我が財として貪慾・放蕩・浪費を敢てする等、皆個在と考へてゐる分別知見を強調した過ちである。當今の學者、分析のために假設したる分子や元素、電子や諸力、個在や個人の總合的進動性を忘れて唯物・實在・人權・自由等に執するが如きは、精神科學者たると自然科學者たるとを問



## 誤れる人生觀

## 佛教の人生觀

はず、孰れも同様の間違に陥つてゐるものである。物を認めたり、呼んだり、取扱つたりする必要上から假に區別したものを、別人別物として排斥したり愛憎するが如きは實に愚の至りと云はねばならぬ。この假設したる自己の自覺、責任、權利、義務が唯一絶對のやうに考へるなどのことは以つての外であるが、これがしも平氣で學壇論客の主張となり、教育、政治の原理の如くせられ、又は盲目無覺に行はるゝ井戸のつるべが上り下りに衝突することや、寄せては返す濱邊の波が岩を噛む様や、虎狼獅鷲が吞噬吃哮する態を標準として、和合なき生存競争を力説するなどのことは全く天地の太用をも人生意識をも看却したものである。これ殆ど意識なき波濤や、食ひ延びることのみに熱泣する猛獸に於ては見逃しうることを得ても、これを人間に適用して來ることは許すべからざることである。況んやこれが學者、教育者、政治家等の主張たるに於てをやと云はざるを得ない。

佛教は先づ人生を分別して考へやうとする有の妄見から覺めて、一切が總合進動しゆく緣起を達觀し、そこに尊き如來の相あるを認めよと云ふのであるから、少しでも此の佛教觀に立つて考へるなら、一息も一餐も皆一切の力が總合されてゐるものであり、人生に離合正反ありと雖も畢竟それが進歩發展の過程に於ける和合への一相であることが解り、こゝに法の生きゆく相を見ることが出来るのである。

されば天地は一つの大なる法界であり、一事一相と雖も法性の貫かざるはなく、こ



佛

釋尊成道におけ

る念佛

三世過去と現在  
と未來

五分法身

釋尊のお言葉

れ皆法事法相である。このイキル道を認めて、只管にこれに依つて立ち、これに順つて進むのが即ち佛である。この故に、佛とは法に依つて立ち、法次法位に順つて進向するものであるとも説かれ、或はよく縁起を見、よく法を見るものゝみ、よく佛を觀るものなりとも説かれる次第である。即ち、法相をよく見、これをよく感ずること、は、よく佛を見る譯であるから、私は此の意味に於て「咲く花に美しさ見るも、澄む月に朗かさ感ずるも念佛である」と斷じた所以である。

### 釋尊成道の眞精神

この一切のものゝ力によつて、活かされ育てられてゐる姿をはつきりと認め、それに感謝し合掌し給ふたのが釋尊成道に於ける念佛である。このことを法を敬ふとか、そこに三世諸佛を拜むとか云ひ、或は成就されたる五分法身を敬禮するとも述べられてゐるのである。就中、五分法身とは五つの功德、即ち戒、定、慧、解脱、解脱知見が満足に具足してゐることが、完全に身いき、心いき、一切がいさることを認めるが儘に、あり難さの中に働かさしていたゞき、能く一切をめざめさせ、いかすことが出来た相であつて、これを五分成就身とも五分具足身とも申すのである。これが即ち釋尊の證られ就された姿であり、こゝに一個の釋尊が破れ去つて、大なる如來の相が現はれて來たのである。釋尊は自ら、この處の意味を——我れ、釋迦・瞿曇・悉達多に非



無上正覺者  
眞實な悟りに覺め  
たる方

成道

ずして、阿耨多羅三藐三佛陀と就れり——と唱破されてゐるのである。今が今まで三十五年間、「釋迦」族の「瞿曇」姓で「悉達多」の君と呼ばば、「唯」とか「伝」とか返事してゐた男が、急に——我は釋迦・瞿曇ではない、今から後は瞿曇、悉達多と呼んではならぬ——などと宣言されたと言ふのは少々變だとも想はれ、殊に——我は無上正覺者である——と云ふなどのことは、大天狗が誇大妄想狂に罹つたかとも感ぜられやうが、眞意は決して然うでない。それは前に述べたやうな、誤れる自我中心の妄想や、個在中心の偏見を離れて、法性の實相、天地の大用その儘に、正しき生活を営むことを示すのみであつて、それが如來善逝であり、知的には全面的に眞に生き往くことについて之を體現し、研磨して息まざるところから、無上正覺、即ちアヌッタラ・サムヤツク・サムブツドハと云ふのであつて、釋尊が大天狗、誇大妄想狂であつたのではない。只それが意味の通ぜぬ印度の言葉で傳へられたため、妙な名前とも、尊い絶對格を表はす言葉とも考へられる所に食ひ違ひを生じたに過ぎないのである。

か様に釋尊の成道とは、宇宙の實相の如に生活することが出来るやうになれたことであり、それが如來善逝であり、等正覺者であり、完全な念佛である。だから、釋尊成佛の生活は念佛そのまゝの生活であり、一代五十年間、衆生の教化に精進せられたのも此の念佛生活の鼓吹であつたと云へる。されば、青年も老人も、王者も貴族も富者も賤民も、乃至根柢も皆、大自然の大きな進みに進められ、イカされるところに



三歸  
四不壞淨

念佛

如來の十號

如來の十號

メザメさせられ、今迄知らなかつた有難い朗かな天地に感謝して安住することができ、全力を盡して働きながら、勞働や官働や慾働と違つた歡喜奉行の世界に立つことができ、此等同人の相和する所は寂靜と親善と尊敬と協戮の世界であり、覺醒生活の社會となり、研磨改善息まざる教團であつた。これを念佛とも亦佛法僧を念ずる「三歸」とも、又は佛法僧戒を信ずる「四不壞淨」とも傳へてゐる。即ち、一化の佛教は、結歸する所、念佛に在りとすることができる。

## 念佛と阿彌陀佛

咲く花に美しさ見るも、吹く風に如來を思ふも佛を念ずることであり、釋尊成道の姿も、一代教化の法も佛法に信順する僧伽も戒行もそれである。されば身に行ふと、心に思ふと、口に言ふとの三業一切を含むものである。だが、これを特別に約示すれば、弟子達が釋尊に歸依し尊敬するので、合掌禮拜して南無佛と申すことであり、親しく佛前に參詣しなくとも、病者旅行者が遙かに合掌作禮するも南無佛である。元よりその唱へる言は、南無佛には限らない。佛陀サラナム、ガツチャミーと云ふことも、波○喃アヌエンジャムと云ふこともあり如來、明行足、善逝、世間解、無上士、調御、丈夫、天人師、佛、世尊と云ふこともある。これを如來十號として、その十德を嘉稱したものとす。或は百八、且千などと増して無數とし、それが別々の佛の如



## 代表的な諸佛

## 阿彌陀佛

くにも考へられる。南無如來と南無明行具足とは、名號も意義も別な所から、體は同じでも相は別と考へられ、同體別相に關する色々の觀想が行はれてゐる。稱名し憶念する所に念佛が種々になるやうに、如何なる所でも、何事でも一切を完うして進み、覺め、生き往き給へる如來佛陀の御相として合掌し敬禮することが出来る。何處にも南無佛して、其處に目ざめの光明世界を見ることができ、何事にも南無明行具足してあしもと明るく、智德並進、研究改善の歩を進めることができる。かくて一切を南無佛の稱名業に結歸しつゝも、念佛の世界は廣く、その相は千差となり、その事は萬別となる。

かく念佛が萬德萬相あることは、即ち佛が千萬無量にましますことであり、十方に無數の佛が拜まれる次第である。華嚴經の始めなどにも、此無數の佛が雲の如く集り來られる物語がある。その多數の中にも特別に有名なのは盧舍那、大日、藥師、阿闍、寶勝、多寶、不空成就等の諸佛であり、殊に普通に信ぜられ此土に有縁なりとせらるるのが西方の阿彌陀佛である。従つて通常我國で念佛と云へば南無阿彌陀佛と申すことゝもなつたのである。阿彌陀と云ふ譯は何かと云ふことについて、阿彌陀經などに問答があり、それはその佛の光明無量にして十方の國を照らし、障礙せらるゝなきが故に阿彌陀と號するものとし、又その壽量も人民も無量なるが故に阿彌陀と名づけると説いてある。阿彌陀は無量と譯すべきで、何事も無量なるが故に阿彌陀と申すのであ



具説ぐせつこまかくと  
憶想おくそう心こころに深く  
想おもふ

五無量

西方極樂

り、佛ほとけとしてもその數無量であるといふことでもある。故に觀經には彌陀みだの光明くわうめうが十方世界じふぱくせかいの念佛衆ねんぶつしゆ生せいを攝取せつしゆするその光明相好くわうめうさうかうを具説ぐせつすることはできない。但憶想たにくそうして心眼しんがんをして見みしむべきである、此この事ことを見るものは即ち十方無量の諸佛しよぶつを見みるとも説といてある次第しだいである。特にその無量を五つに示して五無量の彌陀とする。

光(無量光佛、十二光佛)

どこもあかるく

(故に)こゝに

五壽(無量壽)

いつもいきいかす

いま

無衆(人民、徒衆、眷屬無量)

たれもさめいかされ

私共は

量相(相好、表現、性相無量)

どんなでも正しく善く

このすがた

事(功德、莊嚴、無量幢)

何事でも善く美しく

この事に

於て

阿彌陀佛あみだぶつを禮らいし奉たてまつることができ「どこ」「いつ」「だれ」がどんな姿で、何事を  
するにも合掌がっしやうし禮拜らいはいすれば、無量力の彌陀はそこに現在げんざいし給ふのである。

それならば、彌陀は十方じふぱうに遍在へんざいするではないか、何故西方極樂さいほうごくらくに在おほすと云ふか、そ  
れは常つねに具體ぐたいの事實じじつとなり、拜をがまれる相すがたとなつて、眞善美妙しんぜんびめうを顯あらはし給ふからである。

それならば然さう云いへば良い。普遍平等ふへんびやうとうであるものが事々差別じゝさべつとなり、眞實しんじつに完全くわんぜんに  
生いきた善よい美うつくしい姿すがたを功德莊嚴くどくじやうげんの成就じやうじゆした極樂ごくらくと云ふので足りる。別に西方さいほうと云はね



彌陀の極樂を西方  
とした譯

阿彌陀佛に歸依し  
奉る

ば善い。ナゼ西方と云ふか。具體の表現には、色も形も大きさも時も處もでる。赤ん坊も三歳兒も白髮老翁もある。右向きも左向きもある。東もあれば西もあることを示して西方を指したまでである。天の一方とも、彼岸とも云ふのであるが、印度では天と云へば從來の天國諸天と視られて、唯死後の快樂の一存在とする恐れがあるから、上方天界では適當せぬ。さりとて下方の地獄では地獄と混ざる。北方(左方)は須彌、妙高山、靈界として憧かれもし尊びもした經説もあるが、千歳夭折せず快樂窮まりなき七寶莊嚴世界なるが爲に、道心發らず三惡道佛前佛後と同じき八難處の一として排斥されるから、北方では安養淨土とならぬ。さりとて南方は右方地方で前の下方と同様好ましくない。解脱の彼岸を東方とするが宜しいとしたものもあるが、東方は前方で過去で、その佛も國も滅盡の時がある。そこで無窮、不滅、永遠の世界を西方に現はしたものである。西方にありて十方に通じ、此處を礙げぬのは勿論である。只死せるものゝ造れる國でなく、生き活かすこと限りなき無量壽の國、即ち阿彌陀佛の御國なりと云ふことを現はすのである。

南無阿彌陀佛とは、西方極樂の法王たる阿彌陀佛に歸依すること、それを言ひ換れば、未來永遠に眞實に生き往く御國の大君に歸順し奉ると云ふことである。此の思想が印度に出ても、支那に説かれても、理想か欲想かで充分の實際とならなかつた。それは大君が御國であつて、君國一體の力よく萬民を攝して、何人もその御力に生き



太子たいし 聖德太子しやうとくたいし

諸宗しよしゆみな念佛ねんぶつす

念佛ねんぶつの元祖げんそ

凡入はんにゅう報土ほうど

器き川がわうつわと云いふ

ざるなく、その國運こくうん無窮むきゆうなりとの現實げんじつを見ぬからである。然るに我が國體こくたいは如實にじじつにこれを成就じやうじゆうして居る。これ我國わがくにに早く南無阿彌陀佛なむあみだぶつの行ぎやうはれた所以ゆゑんであり、太子佛敎たいしぶつぎやうも三論さんろんも法相はうさうも華嚴けごんも天台てんだいも、その教義理論けうぎりろんに於て互たひに異なる所ところあるに拘かへはらず、等どうく南無阿彌陀佛なむあみだぶつし西方極樂往生さいほうごくらくわうじやうを願ねがつたのである。

### 法然上人の念佛の特徴

法然上人はふねんしやうにんは何をしたと疑うたがふ人があらう。

然り、上述じやうじゆつの點てんから云へば、南無阿彌陀佛なむあみだぶつはこの國體こくたいを通じて眞しんに永遠えいゑんに生きることであり、諸宗しよしゆに共通きゆうつうすれば何も法然上人はふねんしやうにんが念佛ねんぶつの元祖げんそと云はるゝものもない如ごとうに思おもはれる。

然るに法然上人はふねんしやうにんに至りて念佛ねんぶつが闡明せんめいせられて、その前に念佛ねんぶつの道みちがなかつたかと思おもえ、程ほどの清新振せいしんぶりを發揮はつぎせられて、念佛ねんぶつの元祖げんそと呼ばれる相應おういさを持つて居られる。

今一々細説さいせつする餘裕よゆうはないが、その要點えうてんを列記れつきする。

第一だいに、法然上人はふねんしやうにんは凡入報土はんにゅうほうどの義ぎを顯あらはすに在りとせられた。それは大衆たいしゆが等どうく眞實しんじつの生命せいめいの御國みくにに生きてゆけることを現あらはす爲ために、淨土宗じやうどしゆを別立べつりつしたと云はれるのである。今まで一乗じやうとか大乘だいじやうとか云ふが、これに堪たふるは富豪ふうがう、智者ちしゆ、碩學せきがくでなければ能できない。その智德ちとく有力者りきりきしやすら眞實しんじつの生命せいめいに生きてゐると云へるものがどれだけあら



字であるが、こゝでは人々といふ位の意味である

煩惱妄念にみにく

いこゝろ

南都佛教に都が

奈良にあつた頃、

奈良で盛んに行は

れた佛教

下品に極樂でも一

番下の所

平生念佛

う？ 國民大衆は貧くして供養、作善もできず、食はんが爲に殺生し、肉食したとて穢惡不善の輩と蔑まれ佛門不入の器と避けられる。する業は賤業惡事と貶され、せすば食ふことも着ることも叶はず、この世も世俗も佛門も、俱に塞がれて伸びることができぬ。何の作善向上があらう、佛門出離があらう。その時罪惡下賤その儘、煩惱妄念起らば起る儘、只南無阿彌陀佛する所に眞實の御いのちに生きることができるとせられた。南都佛教では極樂は結構な所だとは云ふが、眞にいきる報土の結構さはよく分らぬ。それは眞に生きる御國である。天台では極樂に凡夫往生を許せども報土たるを認めぬと云はれるが、自力の一乗であるから大衆を同入させると下品になる。然るに法然上人は、大衆生活そのまゝで最上眞實の御國に參らるゝは、勅なれば何人も昇殿が叶ふやうなものであると他力本願の偉大さを喜ばれた。

第二には、平生に口稱念佛の往生を大切とせられた。既に彌陀の御力により、愚惡下賤の儘に救はれるとすれば、その人の特別なる行業や努力に價值づけられるのではない。故に従來の壇を設け、供を調へ、目を限り儀容衣帶を改めるに及ばぬ。心も姿もその儘であり、無條件である。従つてその念佛も心に強く信念した意業でもなく、身に激しく行持したのでもなく、只僅かに耳に聞ふばかりに南無阿彌陀佛したばかりに往生するのである。但し今迄尊ぶ別時別儀の念佛がなくなるのではない。それは



善導大師一心專念  
の文、一心專念彌  
陀名號、行住坐臥  
不問時節久近、念  
念不捨者是名正定  
之業、願彼佛願故。

選擇本願

九條禪閣二時の  
關白九條兼實公

人間として色々の儀相を行ふこともある。平生疎忽になつて居るから特に佛を持念し佛の相徳に親近し、見受し奉らんが爲に行ふ場合もあるが、それが條件附だけに特別の狭い意味に限れる。之を行ふ必要な場合があつても、それが一般の意義ではない、只無條件に毎日平生に起き臥しても、飲み食ひにも、働くにも休むにも、便所にも、スラスラと南無阿彌陀佛するのが、今生きる念佛であり、いつ命終しても死せずして、眞實に生き往く念佛である。何も特に貯へて極樂の蓮臺一箇を買ふのではない。眞に不死のいのちの御國に生きて往くのである。私共が今、御國の御かげで、農でも工でも説教でもやらせて頂いて、生き往くのが最も大切であり、歡喜である。齒痛に療治も、頭痛に頭痛を膏もあるが、念佛を只齒療頭痛膏や火止、雨請にするは餘り粗末な小事に局限するもので寶の浪費であり、その何處にも念佛あるは單に鎮痛防火のためでなく、病中にも火難にも貧乏にも、眞實の生活を全うするのが南無阿彌陀佛となつて居るのである。この平生往生の念佛の義を善導の一心專念の文に發見せられたと傳へる。

第三には、選擇本願の念佛である。これは法然上人によりて特に明白にされたことで、九條禪閣の御頼みにより、淨土の要文を集むるとして御編纂なされた御書物が「選擇本願念佛集」と題されて居ることは餘りに有名な事實である。その選擇の念佛とは、



一切經きつぎょう 佛敎ぶつぎょうの  
あらゆる經典きんげん三  
經きやう淨土宗じやうどしゆの聖典せいでん  
で無壽經むじゆきやう、觀  
無量壽經くわんりやうじゆきやう、阿彌  
陀經あみたけいの三

諸佛彌陀しよぶつみだの選擇せんちやくになりて、釋迦しやくかも亦これを選説せんせつし給へるもの、一切經きつぎょうより三經さんきやうへ、三經さんきやうより念佛ねんぶつとなれるものとするのである。更に往生極樂わうじやうごくらく、入信にふしんの眞行種々しんぎやうしゆしゆある中に、これぞ彌陀本願みだほんがんの念佛ねんぶつなれば、時機じき敎行けうぎやう只これに在りとせらるゝのである。即ち通佛すなはちつうぶつ敎けうより淨土敎じやうどけうへ、淨土敎じやうどけうより彌陀敎みだけうへと、選擇せんちやくし進歩しんぽし來れる所が、聲こゑの南無阿彌陀なむあみた佛ぶつとなり、『一枚起請文まいしきしやうもん』には、唯往生極樂たゞわうじやうごくらくのためには南無阿彌陀佛なむあみたぶつと申して、疑うたがひなく往生わうじやうするぞと思ひとりて申す外ほかには別の子細べつしさいなしとして、一向かうに念佛ねんぶつすべしとせられ、『小消息こせうそく』には十方はうに淨土多けれども、西方さいはうを願ふは十惡五逆じくごぎやくの生るゝが故、諸佛しよぶつの中に彌陀みだに歸きし奉るは三念五念さんねんごねんに至るまで親しく來迎らいげいし給ふが故、諸行しよぎやうの中に念佛ねんぶつを用ふるは彼佛かのぶつの本願ほんがんなる故とせらるゝ所に、上述じよじゆせる特色とくしよがあり、法然上人はふねんしやうにんが念佛ねんぶつの元祖もとそとまで推稱すいしやうせらるゝ特色とくしよも判然はんぜんする。

## 國家と念佛

私共わたくしどもはこの大衆たいしゆの眞實信仰しんじつしんかうの道みちに逢ふことを歡ぶ。

人生じんせいそれ何をなすか。

衆庶しゆじよ各々おの／＼ノ業務ぎふむニ淬勵さいれいシ、嚮むかフ所正きやうせうヲ履ふミ、行おこなフ所中しやうちゆうヲ執とリ、協戮邁往けふりくまいわうセヨと仰あふせらるゝ詔みことのりを承けて眷々承順けんくしやうじゆんし奉るべきである。實に脚下けふたの大道だいだうは衆庶しゆじよ各々おの／＼今奉いまほうずる所の業務ぎふむに開かれる。これを履むこと中正ちゆうせいにして協戮邁往けふりくまいわうすべきである。唯如何たゞいか



にして中正なるか。私共は目も弱く智も鈍い。元より與へられたる判斷を捨てること  
 もできず、怠るべきでもないと思へども、怠り勝ち、過ち多きは慚愧の外なきことで  
 ある。そこにも只々南無阿彌陀佛して、合掌稱名の中に暮らさせて頂くことは全く  
 法然上人御指導の賜と感謝し、彌陀如來大願のお影と喜ぶばかりである。毎日寢處  
 にも、臺所にも、職場にも、便處にも、善きにも、惡しきにも、あり難さにも、申譯  
 なさにも、南無阿彌陀佛に消息するを中正の道と心得、少くとも皆様と此心にて、今  
 日も暮らせて頂くことが出来るのだと明るくありがたく進むべきである。

かくて此念佛の教が法然上人によりて國民大衆の安定となり、源平和合の楔機とな  
 り、國體に合致し明澄にすと信ぜられ、南無阿彌陀佛する所、無窮の御國の大君に今  
 後世を攝め參らせて、只今の一事一相に合掌し信順し行くとする所に、獨り源平擾亂  
 時代を救つたばかりでなく、足利末期應仁以後の戦亂闇黒にも、明治維新にも指導力  
 となることができたやうに、今後共、最も着實なる信仰生活の歩みとして、南無阿彌  
 陀佛して居るのが、私の感じて居る意義の一端であります。

(をはり)



## 法 然 上 人 著 作

## 一枚起請文

小 西 存 祐

## 一

人間の理想は、勿論之をいろ／＼な方面よりして、色々といひ表はすことが出来るわけであるが、我々が、われわれの言葉でそれを表現するといふことになれば、結局「浄土」を實現するにあると云ふことになつてくる。

ところが何ふした譯か世間では浄土なんていふ言葉を、非常に嫌がる人がある。浄土といふ言葉が厭だと言ふのなら黄金世界といつても可い。或は亦た理想社會、理想國家といつてもよいで有らふ。とにかく天地の間に動いてゐる有らゆる存在が、全的にオルガナイズし、一つに統制されて圓かに調和したすがたを浄土と云ふのである。ソシテそ

## 二

の浄土を「宗」としてゐるものが、謂ゆる浄土宗である。

然し、浄土宗といふと、何だか亦、佛教の部分として立つてゐるものゝ様な感じがしない譯でもない。何事によらず、「もの」を綜合的に掴まふとする現代の思想は、さうした局られたやうな名に於てするものを、好まないかも知れない。

けれども浄土宗は、妙くともそんな局られた佛教では無いのである。佛教を全般的に、或る一つの角度から見なほして、根底から組み更へたものが、即ち浄土宗なのである。夫ゆへ浄土宗は、言ひ換へると、見直ほされたる佛教そ



# 強縁

松 浦 一

法然上人は、

成佛はかたしといへども、往生は得やすし。道綽善導の心によれば、佛の願力を強縁として、亂想の凡夫淨土に往生す。

と言はれたといふ。親鸞聖人は、

彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言なるべからず。佛説まことにおはしまさば、善導の御釋虚言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむねまたもてむなしかるべからずさふらふ欺。

と言はれたといふ。

彌陀の強縁は釋尊を引き、道綽善導を引き、法然親鸞の諸聖を引いた。淨土建立の願力はこの強縁の綱を手操る。一切物を一つに結んで一齊に引く綱よ。おゝ、吾等の引かるゝことよ。一溜りもなく引かるゝことよ。

のもので、佛教は又、釋尊が法爾の理法を、自分の體驗を通じて説かれた教法に外ならぬのであるから、結局淨土宗は法爾の理法を我れゝの實際生活の上に體現せんとするもの以外の、何ものでも無いわけである。

## 三

淨土といふものを、初めて宗派として組み立てられた方は、言ふ迄もなく法然上人である。夫ゆへ上人は我が淨土宗の「宗祖」にまします譯であるが、さうかと謂つて、上人は唯その一門の者だけが、私すべき方では斷じてない。

いつたい上人は、わが鎌倉時代が生みだした宗教的偉人の一人で、謂はば偉大なる凡人であつた。私は末代の代表的凡夫だと考へてゐる。

淨土宗は、畢竟この凡人の宗教的體驗を、一つの宗旨として組み立てたもので、謂ふところの宗教的體驗とは、釋尊の體驗を、凡夫の立場から端的に體驗せられたといふことに外ならぬ。夫ゆへ鑑西上人は、わが大師釋尊はたゞ法



## 法 然 上 人 著 作

然上人なり——といつて、全幅の歸敬を捧げられた譯であるが、いかにも尤な次第だと思ふ。

## 四

已上の様なことを、先づ大體頭にいれてをいて、それから今の、一枚起請文を拜讀してみる——

淨土宗の安心起行 此一紙に至極せり 源空が所存 此外に全く別義を存ぜず

それで私は、この起請文は、その形態こそ一紙に書き付けられたものではあるが、その内容は、仲々そんな簡單なものでは無いと考へる。現に嵯峨の天龍寺の一代桂洲和尚が、この起請文に賛せられた偈に次の如くいつて在る

唯道一枚紙

中含大藏經

出頭天外者

始知三語馨

然うだ！この起請文は、たゞ單なる一紙の法語ではないのである。實にその裡には一大藏經を含藏してゐる。否たゞに藏經を含藏してゐると云ふだけではない。自分はこの起請文こそわれ／＼凡人の一切經そのものだと思へてゐる。

## 五

試に、その文字の數をかぞへて見よ。和漢とり交せて

すべて三百有餘字。一文不知でないかぎり、誰が看ても、一讀よくその意味を會得することが出来る。而かもそれを擧げてくると、選擇本願念佛集ともなり、淨土三部經ともなり、又た一大藏經ともなつてくる。實際こんな簡明な、そして亦た含蓄に富んだお聖教が、復と他に有らふか！

## 六

近頃、佛典の國譯といふことが、切りに諸方で叫ばれてゐる。漢文を其のまゝ直譯するといふだけで無しに、完全に國語に譯しきつた佛教の聖典としては、自分は尠くとも二つのものを提示することが出来ると思ふ。一つはアノ弘法さんの、いろは句へどといふ伊呂波歌。今ま一つは、もろこし我朝にといふこの一枚起請文。

## 七

宗祖は、淨土宗の學問の所詮は、往生極樂はやすき事と心得るまでが大事だといふことを申されてゐる。又た嵯峨の正信房は、學問選擇集にはすぐべからずといふことを申されたと云ふことである。私もそれに倣つて、學問一枚起請文には過ぐ可らずといふことを申して、自分の所感を結んで置く。



# 小 消 息

稻 垣 眞 我

## 一 法然上人の魂を傳ふるもの

凡そ法然上人を鑽仰する人々は、その御傳記を通して御生涯に學ぶところあるのが最も自然の道であります。人間としての上人が如何なる信念に生きてゐられたかを知ることが最も大切な事柄であります。さうした意味から、御著述などをあれかこれかと詮索して専門ぶるよりも、始終御傳記につかり込んで、その家庭、その境遇、その時代などに養はれて育ちあがつて行く人格や信念を見て行く事が、本當に落著いた宗教信仰に觸れ得るものであります。

殊に法然上人のやうに立派な御傳記を持つてゐられる方は、その傳記の中に如何に大なる圓やかな人格が現はれてゐるかを看過してはなりません。又その傳記そのものが

社會全般を如何に教化指導されるものであるかを見落してはなりません。若し勅修御傳四十八卷の中その第二十一卷の「上人のつねに仰せられける御詞」の如きを注意致しなすならば、全部が消息でありまして、それ々々のお言葉が格別の御心持を現はしたもので、大概の疑問、宗教的悩みはたちどころに解決され、そのまゝめざめと勇みに融け進むお力が感ぜられます。中でも世に「一紙小消息」として知られてゐるものはその中心となるもので、一番落著いたもので、筋も整ひ、趣意もよく現はされて、全く法然上人の魂を傳へるものとして、他に比較するものゝない程大切な御法語であると申すべきであります。



## 法 然 上 人 著 作

## 二 小消息は一枚起請文と表裏一枚

朝な朝な、私達の拜讀する御法語のこの「一紙小消息」と、夕な夕な、私達の拜讀する御遺訓「一枚起請文」とは、まことに表裏一枚のものでありまして、一枚起請文もこの小消息によつて一層徹底せられる程、淨土一宗に取つても代表的な消息であるといふことを味ふものであります。即ち「五重相傳」の上から見ても、初重の奥圖一宗の骨髓を代表したものであつて、法然上人の生命である第十八願を中心に信仰生活をその中にをさめこんで、智者の振舞をせずして唯一向に念佛するとはつきり示された一枚起請文と共に、金剛不壞の信仰が結晶して出来た一紙小消息といふ感じが非常強いのであります。實に淨土宗の精神がよく纏まつて現はされ、眞に淨土宗の眞髓に今觸れる心地で一杯になる感じがするものであります。

## 三 小消息は信仰を激勵する文章

こゝに一紙小消息を拜讀する實感としての第一印象を申し述べるならば、御法語としては一般に一枚起請文より少し長すぎるために常用せられぬやうであるが、これは甚だ

間違つたやり方で、どうしても僧俗ともに毎朝この一紙小消息を拜讀し、毎夕一枚起請文を拜讀するに限る。これ法然上人鐵仰の實際的立場を建設する原動力となるものと信じて疑ひません。況んや小消息は長いと申しても、實は一枚起請文の倍にも足りない手紙形の短い文章法語であつてその語句の如きも對句とはれやかな句法ばかりのもので、しかも淨土の宗義を最も簡單直明に云ひ現はしたもので、如何にも全文きびくした強い勢ひを感じしめる假名書でこれほど満足に書かれたものは求め得られないと思はれるのであります。

第一に淨土往生、念佛生活の四つの疑ひを擧げて「行少しとても疑ふべからず」「罪人なりとても疑ふべからず」「時下れりとても疑ふべからず」「我身わろしとても疑ふべからず」と淨土往生、念佛生活に對する疑ひを打ち破つて、第十八願を中心とする信仰生活を激勵してゐられます。

第二に私達の求むべき「淨土」と、私達の歸すべき「彌陀」と、私達の爲すべき行の「三ヶ條」を示して「西方を欣ぶは十惡五逆の衆生の生るゝ故なり」「諸佛の中に彌陀に歸し奉るは三念五念に至るまで自ら來迎し給ふ故なり」



「諸行の中に念佛を用ふるはかの佛の本願なる故なり」と、私達の信仰生活の基礎をたしかめられてゐられます。

第三に信仰の信ずる事から説き出され、第十八願による信仰生活こそ萬人眞に永遠に生き行く道であるが、それは一切の學問にも學者ぶらず、一切の智慧才能に捕はれず、無智の人にも有り難い一向に念佛するをいふもので、極己れを低くしてゆきとゞかぬ所をふりかへり唯南無阿彌陀佛するをいふのであります。そこを「本願に乗ずる事は信心のふかきによるべし」と云はるゝを始めとして、五たび重ねて「信ずること」の必要最勝なるを説き、最後に「信じても猶信すべきは必得往生の文なり」と結ばれてゐられます。

第四に生れがき淨土に往生せん事「悦びの中の喜びなり」と、信仰生活に入り今の足もとから永遠に明るく正しく和やかたり得ることの悦びを五たび繰りかへされ、如何にも法悦感に充滿せられる法然上人の面影がよく傳はつてゐます。加ふるに上人の歡喜法悦が今私達に融け込んで來るのを感じるものであります。眞に必得往生の確信が歡喜踊躍となり、それを今私達に分たんとせらるゝ親切慈悲の大

心が溢れてゐるものと受取られるのであります。

#### 四 信仰打開の名人「法然上人」

そも／＼佛教は「信ずること」から解るものであるし、元々佛教とは信仰そのものであり、その佛教の信仰界を代表するものは淨土教であるから、法然上人の魂を傳へるこの小消息が徹頭徹尾信ずる事に終始せらるゝのは當然でもあるが、又上人が佛教の中心である信仰に立つて、四つの疑ふべからざる事柄を明らかにせられ、信仰打開の名人として時代信仰の低級さ、若しくは機根はづれの不相應の信仰に涙ぐまれ、眞に淨土への往生を徹底し、人生の事すべてこの信念の上に於てのみ光彩を放つものであることを示さるゝものであります。

信仰は未だ開かれざる地上の一大富源である。さういふ世相に立つて「末代の衆生を往生極樂の機にあてゝ見るに行ふ少しとても疑ふべからず」と云はれて、末法の今日自分の如き愚痴愚鈍の者が極樂に往生し、眞實の絶對價値に至ると云ふことは「行」といふ程のものではない。只最も軽い南無阿彌陀佛だけでよい。唯我が耳に聞ゆる程の僅かな一念十念でよ



# 法 然 上 人 著 作

い。これが第一であると云はれる氣持である。これ佛の心であり淨土教の根本となるもので、行ではなくして信仰であります。行少しとても疑ふべからずと決定宣告せらるゝ所以であります。さうした一念十念の念佛ある生活をせめて今日も明日もと次から次へとやつて行くと云ふことが「行は一念十念なほむなしからずと信じて無間に修すべし。一念なほ生る沉んや多念をや」と云はれる法然上人の御心であります。

たとひ罪根深きものといへども、時下りて五濁惡世に出でたるものも、煩惱具足せる凡夫であつても、何等の疑ひなく、十惡の法然愚痴の法然が念佛して往生せんとするなりと「往生生活の模範」に立たせられ、自身の罪惡と自力の不完全さを知り「愚鈍念佛往生の機なり」との自覺を萬人に移し植ゑつけられるのであります。かく安心して今日あるを喜び、拜み働らく素直さが信仰生活であり、嫌應なしに萬人からその通りと認可共鳴する心持であります。一念に一度の往生を味ひつゝ念々往生生活を完了せらるゝ所、美しく綺麗さつぱりとした心持となり、濁りを澄まし穢れを淨め行く力が現はれて、よき現在こそよき未來へ

つゞく。常にこのよき現在の生活を「省察息まざる所」に建設する道が、今や我がものとなる譯である。このやうに小消息は私達の信仰を打開せらるゝものであります。徹頭徹尾「慚愧」と「渴仰」あるところに、純粹な淨土教の入信は解決せられてきます。私達はどこまでもこの小消息を拜讀することにより、信仰は光りなり、いのちなり、喜びなり、力なりと永遠に生きる救ひを體得すべきものと實感するばかりであります。

## 味覺の法悦境



有機天性然 ヨーダ

ヨーダの素は

天然に多量のヨーダを含み  
有害なノリ分がなく湯水に  
良く溶けます

用ひ度い方

肥り過ぎ、高血壓、お産前後  
の奥様方、顔色の良くない  
方、風を引き易いお方

サンプル  
進呈

發賣元東京本郷二丁目

大日本水産工業株式會社

卓效藥  
ブレインは

血液を清淨にし骨格と神經を  
強化する強力ヨーダ有機性劑  
効能  
動脈硬化、中風、腺病、授乳  
婦の燐カルシウム不足





# 撰 擇 本 願 念 佛 集

井 川 定 慶

## 六 正 行 と 雜 行

衆生の修する念佛往生の行に正行と雜行があります。

依ニ善導和尚意ニ往生行雖レ多大分爲レ二一正行二雜行

この中、正行とは阿彌陀佛と衆生との間のみに行はれるま  
ちりけのない行ひであり、雜行とは種々雜多な善根功德で、  
どの佛さま何れの菩薩にも通用する行ひであります。後者  
を萬人通用の親切とせば、前者は彌陀と衆生との間に限定  
された貞操にも匹敵すべきであります。

親切の中には雜多な善い事が含つてゐて子に對する場合  
近隣に對する場合、夫々と異つてはゐるものゝ何れもよい  
心掛けで行はれる善根功德であります。親切が夫婦間にも

行はれるやうに阿彌陀様の淨土にも善根功德は通用致しは  
しますが、特別の心くばりが必要となつてゐます。貞操と  
なれば最初から夫婦道であるから何らのことよりも要しま  
せぬ。

今も念佛一法の正行と、諸善萬行の雜行の比較得失につ  
いて法然上人は五種の項目を擧げられてゐる。五番  
の相對といふ。第一親疎對、第二近遠對、第三有間  
無間對、第四廻向不廻向對、第五純雜對であります。  
そこで往生の行としては、念佛のみが正行で、餘他  
のものに優れてゐることを、選擇集の私釋段に、

然者、西方行者須下捨ニ雜行ニ修ニ正行也  
と斷案を下されて居ります。更に善導和尚の往生禮



## 法 然 上 人 著 作

讃の文を例證にあけて、

捨二百即百生專修正行、堅執千中無一雜修雜行、  
乎。行者能思量之。

とされてゐます。

次に正行を細別して、第一讀誦正行、第二觀察正行、第三禮讃正行、第四稱名正行、第五讚歎供養正行の五つとなし、就中第四の稱名正行は彌陀本願の行でありますから正中の正、即ち正定之業と名づけ前三後一の四正行を助業と呼んでゐます。稱名正行を遂行せしめるために助成せしめる行業であるからです。

口稱の名號のみで念佛の信仰の起らぬ人は更に助業を修せば必ず信念を培ひ往生の大事を成就すると鎮西上人はさとされてゐます。

## 七 彌陀の本願

選擇集の第三章には阿彌陀佛の本願は、お念佛によつて衆生の極樂に往生することであつたと示されて居ります。

即ちその篇目に、

彌陀如來不下以二餘行爲往生本願、唯以三念佛爲二往生

## 本願

とあります。そこで第三章を念佛往生本願章とも單に本願章とも申して居ります。阿彌陀佛は一切衆生に修し難い六度萬行を以て往生の條件とせず、唯だ口に南無阿彌陀佛と稱ふるお念佛を以て往生できると本願に立てられたのであります。

さて佛の本願には總願といつて一切佛通有の四弘誓願と各佛各別の別願との二種目があります。四弘誓願といふのは、度、斷、知、證の四願です。

衆生無邊なれども誓つて願はくは助けませう(度)。煩惱極まりなれども誓つて願はくは斷ち切りませう(斷)。法門は無盡なれども誓つて願はくは知りつくしませう(知)。佛果菩提は誓つて願はくは證得しませう(證)。といふ。

かくて總願成就して愈よ佛果に上られると、何れの佛も衆生濟度のために心を千々に碎かれます。救はんとせられる佛も多く、また救はれる衆生の側にしても千差萬別、そこで各々の機根と時代とを考へて各佛各別の本願を立て、救済に當れるのであります。

藥師如來は十二願を立て、衆生の病苦を拔濟しやうとの



別願を立てられました。阿彌陀佛は凡夫救済のために四十八願を立て、念佛往生の別願を成就せられたのであります。ところがその四十八願の中、第十八願が主體となつてあとの前後四十七はみな此れに附隨したものと見られるのであります。第十八願とは、

無量壽經上云設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國

乃至十念若不生者不取正覺

といふ經文であります。右の文中、至心といふのは至誠心信樂といふは深く信ずるの心、欲生我國は廻向發願心を意味して居て、つまり選擇集第八章に説く三心、即ち淨土宗信者の常に心すべき安心を明されてゐるわけであります。法然上人は「念佛行者必可具足三心」と示し、また觀經の文を引用して一層懇ろに三心の必要を説かれてゐます。即ち、

若有衆生願生彼國二者發三種心即便往生何等爲

レ三。一者至誠心。二者深心。三者廻向發願心。具三心

者必生彼國

この三心を具足して念佛せば往生間違ひないのであつて、それが阿彌陀佛の本願であります。

## 八 日常の所作

念佛の行者が日常所作の心得として選擇集の第九章に四修の行法が説かれてゐます。

第一恭敬修、第二無餘修、第三無間修、第四長時修であります。

第一の恭敬修とは阿彌陀佛及び一切の聖衆を恭ひ禮拜すること、恰かも高貴な人の前に出た如き想ひをなすので心にも身にも敬ふのです。恭敬の心得は單に念佛のみに限らず一般處世上にも肝要なことであります。遊學の子息にして父母の恩を忘れお國元に向つて足を伸べて寝ねないといふ學生は決して日常の所作に間違ひはありませぬ。立派に成功します。

また佛に仕へること生身の如くし、身を淨くすること、心を掛けて居れば自然衛生的にもよく身をたもちうるのであります。

第二の無餘修ですが、聖道門ではこれを諸善萬行を餘すところなく悉く修すると解釋するのですが、淨土門では「雜起の心を嫌ふ」意で、念佛以外の餘の



# 聖な願行を領納する

梅 原 眞 隆

自己の慾望を充たすこと、自分の計度を果たすこと、これらの中に宗教を意味づけようとすることは、危いことであり、幼いことである。

人間はかへりみて、その慾望とその計度との缺陷に氣づかなくてはならぬ、もつと高い願いと、もつと圓かな行をうけ入れて新しい生き方を學ばねばならないのである。

宗教の信心はかゝる聖なる願行の領納である、「歸命」とは彌陀釋迦二尊のおほせに従ひ、めしにかなふことばである、佛願に隨順し、佛行に隨順して、聖なる生き方がめぐまれる。

行を修せないこととあります。もの事に專注することを意味してゐます。

第三無間修、休みなく間斷なくつゞける義で、萬事は相續するところに成功があるものであります。

第四長時修、初發心から命終迄誓つて中止せしめないといふのであります。これは餘程堅い意志の力が働かねばならないのであります。

以上、選擇集の要所を抄録しました。本文に入つて第一章の聖道淨土二門、第二章の正行雜行、第三章の彌陀本願、第八章の三心、第九章の四修と第十六章の付屬文といふやうに、とび

とびになります  
が、大概を述べ  
終りました。

(この稿は去る十月一日より八日間  
京都放送局より全  
國に中繼せられた  
もの、前半は十月  
號に掲載してあり  
ますから、御參照  
下さい——記者)

文學博士 松原 寛 著

## ヘーゲル哲學物語

四六判二四〇頁  
價 〇・五〇

## 哲學概論

四六判三四〇頁  
價 一・六〇

## 西洋哲學物語

四六判二一〇頁  
價 〇・七〇

東京神田 同文館 振替東京一三五番  
駿河臺下 電話神田三二七



裸

坊

徳

本

歌道から見た古今獨歩の信仰

中野善英

裸

坊

徳

本

—

(121)

二十五歳から、四十六歳まで、殆ど半生を山の中で、念佛一行、禮拜三昧、一衣一裙で、焙麥の粉一合位を一日の食にして、荒行に繼ぐに荒行を以てし、身を責めく、心に些の懈廢をゆるさず、追ひ責めく、修行に日夜の區別もなかつた徳本上人には、念佛の徳といふ趣きよりも、念佛の行者、念佛の仙人といふ風格があつた。

六尺豊かな傀偉のお姿に、垢髮肩を越し、顴骨飽くまで秀で、その底に炯々たる兩眼開き、口は大きく、眉太く、皮膚は楠風沐雨に苛まれて、赤銅色を張り、聲は嵐風に鍛へられて雷の如く、法衣を纏ふて居られなんだら、どう見ても武藝者か、柚男とより思へぬ

風貌であつた。鬚髮こそ獅ヶ谷法然院（四十六歳の十月）にて剃除以後、僧形になつてゐられたが、御性格は已然として山中で猿猴麋鹿を友として居られた當時の、野人の素朴さそのまゝであつた。

好んで、自ら『裸坊、裸坊！』と云つてゐられたのは、如何にもよく單的に御自分の心持を現はし、又此のつくろひ氣のない御人格にピッタリ合つた御言葉であつた。

世間では、はきだめにする裸坊彌陀なればこそ、助けまします實際、上人が千津川修行や、須ヶ谷山から出て來られた當時、或は其後も永らく、此の容貌では、乞食坊主や、狂人坊主にせられた事

は一再ならずあつたのである。だから全くの、心も身も、裸坊であつたに違ひないのです。

境界は、腰に裙まき、肩に袈裟、思ひは口に、あみだぶつく

裸よい、鬼が衣をきたような猿の烏帽子で、人に似たよな

心に一點の名利として希ふものもなく。執着として、こだはるものもなく。尊ばれても敬はれても恬淡。嗤はれても、蔑されても平氣。これといふて誇る門地もなく、學問もなく。歌をよむでも、よむすべを習はふとすら、慙氣もなく。心も軽く、身も軽く。此等の歌のよみぶりを見ただけでも、如何に素放純情であつたか、よくわかる。



一體、徳本行者は、西行や良寛和尚のように、身を塵外において、風雲流水を友とした逸人でない、又、詩人でない。だから歌人として眺めたら三文の値打もないか知らぬが、それだけ烈々たる信念に燃え、専心求道の精進人になつてゐられたから、其中から自然に道心が發して道詠となつた此等の歌は、自ら求道人の肺肝は衝かすには措かぬ。

裸坊 阿彌陀佛のはちす(蜂巢)かな

稱ふるたびに 出たり入つたり

裸坊 阿彌陀佛にかぶれたか

心も口も あみだぶつ佛

戀すてふ 色はかはれど 裸坊

阿彌陀ほとけの 聲に迷ひて

道心坊 夏の西瓜にさも似たり

中が照れたら(眞赤な)につたら(名所な)

りけり

飄々として去來し乍らも、常に口に稱名を絶やさず、如何に内に道心が熾んであつたかは此の諸語の語を聞いても感ずる。

次に、最も特色あるのは、念佛に對する所感である。

戀しくば呼んでいざんせあみだ佛

ほど遠けれど口へ來るなり

極樂をさとりすぎての迷ひなり

阿彌陀佛く云へばよいのに

有難やいつも心は極樂へ

あみだ佛も行きつもどりつ

念佛を教學的に眺めたり、味つたりして居られたのでなく、いつも實修、實行の中から、實感として自分の生命の糧として居られたの

だから、誰にはいかることなく、大膽に率直に體驗のまゝ其内容を物語つて居られる。

だから、一聲くゝに如來さまが口の中へ這入つて下さると云つて悦び、一聲くゝが如來

様が自分の處から出て行つて下さると云ふて喜んでゐられる。

植えてみよ 花の育たぬ里もなし

申すからこそ 身は佛なり

極樂は 十萬億土隔つれど

唱ふる度に 行きつもどりつ

天高し 移して見れば極樂も

南無阿彌陀佛の 手の内にあり

などといふのは、何といふ思ひ切つた云ひ方でせう。そして又、何といふハッキリした信仰の心持でせう、學問の力や、周圍の顧慮する

ようなハカラヒの心を少しも用ひずに、思ふ儘、ズバリくゝと云つて退けてゐられる男

らしさは、流石に求道の意氣、自らを燒き切つてゐられた人でなければ出來ぬことである。

自分が、お念佛申し、お念佛に充たされて、お念佛になつてゐる時、お念佛の力で輕々と

身が十萬億土を往來する。飛行機に乗つて飛ぶように足元に極樂が展開する。それは自分

がお念佛に乘じ、お念佛に生かされて動いてゐるから、一寸も屈托がないのです。思はず

知らず自分が佛になつてゐるのです。だから徳本上人は常に云つて居られた。

「徳本が佛になるのではないが、佛が徳本になつて下さる——」

と、これは、お念佛によつて自分が念佛の中



に融け込み、自分の内に念佛が満々と充ち溢れ、一丸となつて悠々たる自由境を體得した者で無くては云へぬことです。

一心に、南無阿彌陀佛といふ時は

我れが阿彌陀か阿彌陀が我れか

と云ふのは、口先きや、文字だけで弄ぶ講釋沙汰ではなかつたのです。全く實感實證であつたのです。だから、誰の前にも平氣で此

の卒直な表明振りが出來たのです。ものゝ本にどう書いてあらうと、時の學者がどう解釋

して居らうと、そんな事には少しも頓着なく、自己獨特の信内容を物語つて行けた、それは

此の「如來さま」が伴つてゐられたから出來たのです。いや、此の「如來さま」内から

み聲を上げて語られたから、斯ういふ空前絶後の道詠や法語が出來たのです。

だから徳本——と、如來さまとは、いつも一體で、いつも戯れてゐられる、遊んでゐられる、二人でなく一人、大仲よしです。

寢坊に 悟りといふはとんだ事

念佛申して 彌陀に悟らしよ

阿彌陀佛と いふて守らぬ神ならば

こちのかまはぬ そちの恥なり

とんだ事 いふと思ふてくるゝなよ

守るといふに まかす此の身は

こんな事を私達が云つたら、何んだ屁古理窟

を云つてゐると、人にもすぐ聞き取られるだ

らうが、徳本さんには、これが何の無理もな

い、人と神、人と佛とが、仲よく物語つてゐ

られる會話です。

こんな大きな氣持で、樂々と、法界を吾が

住ひとして、遊び暮らしてゐられたような心

持だから、一方では身を擦り減らして刻苦し

てゐながらも少しも、苦痛とも精進とも、感

じてゐられなかつたのであります。

天は笠 地は足駄なり裸坊

胸は 六字の都なるらむ

有難や 天は笠なり地は足駄

たとへこけるも 六字の上に

などいふのは、丸で風來山人の狂歌でも聞く

やうな氣がします。これが不斷念佛の謹嚴な

上人の御言葉とは、知らぬ者では受けとれぬ

程です。それといふのも、お念佛で癡りが無くなり、邪氣が脱れ、洒々落々として自己をも世間をも茶化してみえと思へる程です。

南無阿彌陀佛 本卦にかへる六十一

あひも變らぬ 本の徳本

何といふ羨やましい、楽しい境涯でせう。天

地を我がものとし、永遠を自己として、コロ

／＼と自由に轉ろがつてゐられる。全くの逍

遙遊、大無我行です。

斯うした、無礙自在、生々とした三昧發得

念佛生活の中から、私共信仰の初心な者に、

極めて平易適切に「お念佛」の行を教へてゐ

て下さる。恰も三歳兒の私達を、あやしてで

もせられるように受け取られるので、これを

毎日復誦のよすがにもがなと思つて、これを

最尾の結びとして捧げさしていただきます。

念佛は せつゐんに入るこゝろもち

綱にすがつて いきづめばよし

雪隠をきたなく思ふて高ぼくり(誇り)

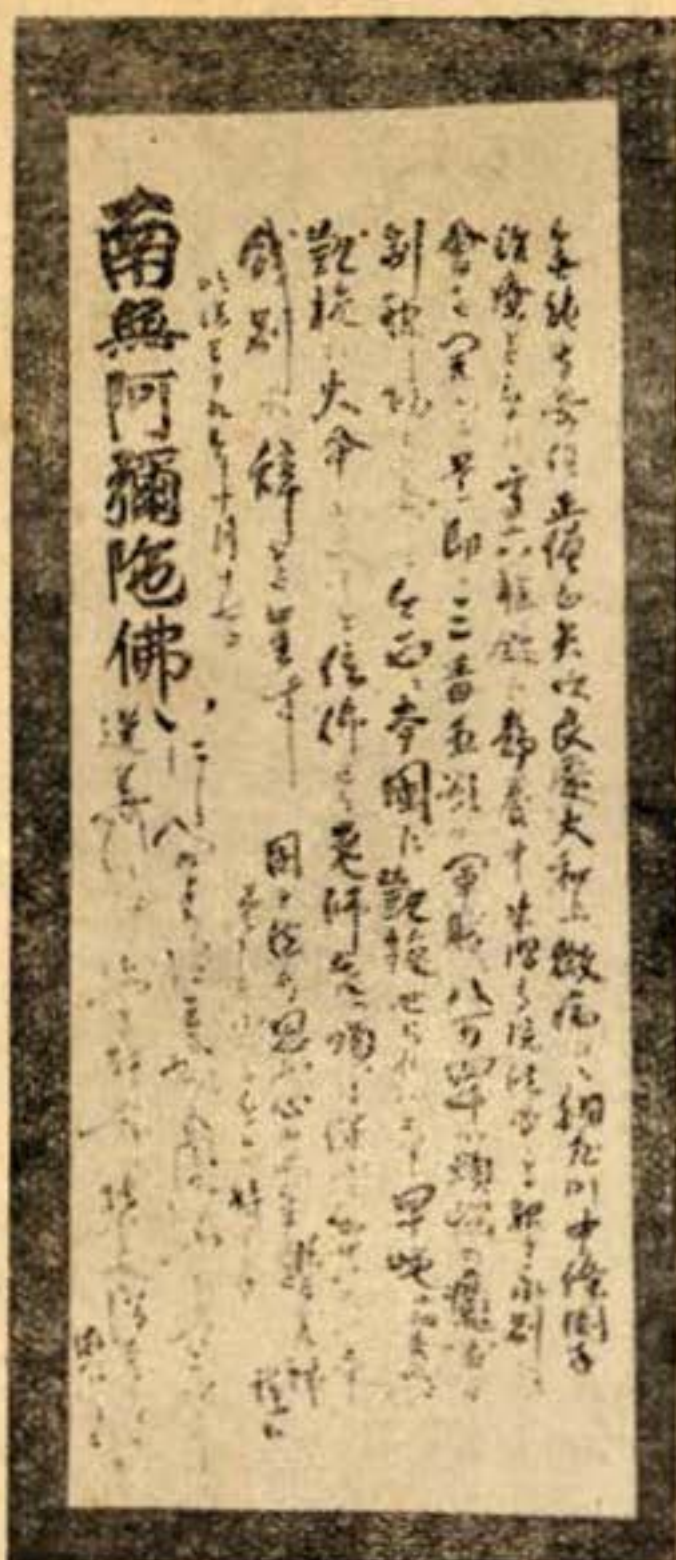
ふみはづしての くそまぶれ哉



# 良慶和上の臨終

— 矢吹博士所藏の文獻による —

## 本誌記者



れてゐるので、同博士を自邸に訪ねて、病中の御體験など伺つたところ、

「今實は助手を煩はして病間雜記を綴つてゐる時だし、第一自分などの體験は御恥しくて人前に出せぬが、今から三十一年前の明治三十九年十月

(望月博士佛教大年表)、六十八歳で歿した同博士の恩師、良慶和上の臨終の事蹟を傳へてはどうか」

矢吹博士は過ぐる七月中旬、遂に重態に陥り、一度は生死の境を彷徨されたが、此頃はどうかやら學校にも出てゐら

と、同博士から示された數々の文獻中、左にその重要なものを掲げる。



## 一、永別會

明治三十九年十月中旬、米澤市中條醫師から不治の症たるを聴き（食道狹窄症）、同月十七日、山形縣米澤市中の淨土宗寺院を招き永別會を開かる。偶々其席に在つた同市極樂寺住職清水秀誠氏が大畫箋紙を求めて自ら前段に餞別の辭を記し、後段に和上が御名號を記し、秀誠師の序が極樂往生を凱旋に擬せしため、和上は熊谷蓮生の古歌を記されたのが次の軸物である。（寫眞参照）

無能寺前住正僧正矢吹良慶大和上微病にて銅屋町中條國手の治療を享け、高六旅館に靜養中、米澤寺院法中を招き永別の會を開かる。是即ち三毒五欲の軍賊八萬四千の煩惱の魔軍を制服し功を奏して今正に本國に凱旋せんとす。早晚小納秀誠へも凱旋の大命あるべしと信仰せり。老師先づ順を逐うて出發せんとす。餞別の辭を呈す。

國と法り思ふ心のあらましを

盡してかへる今日の嬉しさ

法友秀誠謹書

南無阿彌陀佛

いにしへのよろいにまさるかみ衣

風のいるやも通らざりけり

蓮華ひらけばやがて散りぬべし

結ぶこのみは淨土なりける 微風拜書

## 二、病室の貼り札

和上は歿する前、晩年の寓居たりし鮎貞常光寺の閑室に歸り、將に絶食に入らんとする臨終九日前、自ら書簡箋に、

閑居病中、長咄無用

念佛の外、はなし無用

酒肉五辛のもの、入事無用

の三事を書して入口に貼り出された。これより毎日信者が代る／＼詰め切りて、臨終行儀を修す。後年、この貼り出しを觀て、百山法主中島觀瑠僧正の賛に、

故良慶和上の徳一世に高きは隠れなき所なれど野衲縁つたなくして生前に拜顔を得ざりしは今生の恨にてありき。されど和上が臨終行儀のとき、ものせられたる



制狀を見るに、此の文字こそ全く和上の精神、即滅後の法身なれ。野衲いま此の法身を拜するを得たるは生前の肉顔を拜するに優れるを喜びて、

あはねどもしのぶもじすり道のおくの

淨きところをこの文字にしる

西阿

があり、黒谷法主大鹿愍成僧正の賛に、

先つとし良慶大和上に仕へまつりし時、いと懇なる慈誨を蒙りたるに、今年其七週の御祥忌に當りていささか敷島の言をまね、みたまの前に備ふ、

美をしへの言のはし／＼おもひ出

しめりがちなる墨染の袖

心阿

があり、現美作誕生寺主漆間徳定 僧正の詠に、

良慶僧正乃命終のことを聞き侍りて

吉野山如意輪堂主

徳定

美知のくのしのぶもじすりみだれても

みだれさりけり君の玉緒

があつた。

### 三、行誠上人の送詩

明治七年十一月に良慶和上が壯年時代、自分の師匠の琳堂和上に代りて無能寺住職として、師匠が創設した無能寺の小學校を繼續せんがため東京から歸郷された時、行誠上人から送られた詩を左に添記する。

東漸之語非ニ虚説一 佛法反魂特囑レ君  
戒是命根禪定福 方便幸勿レ喪ニ斯文一

甲戌十月送良慶和上 僧 行誠敬草

當時、行誠の花押がまだ書かれてゐなかつた。

### 四、和上の遺歌の中から

飯坂南部氏宅にて

眺むれば山の緑も咲く花も

水の清きにうつろひにける

小欲知足

足りぬるとおもひは足りぬ草の庵

頭をさへず膝を入るれば

檀徒の布施によりて

我も其濱の眞砂の數なれば

恵の潮にぬれぬ日ぞなき



## 逃 懷

怠たれどつとむるとしの長ければ

なむるみのりの味の尊さ

屋根ふかぬ疊かへせぬ我身には

うき世の中にうきをはなるる

照る月も吹き来る風も法の道

きかぬ人にやいかに語らむ

うきことのかさなる身をぞ嬉しけれ

たのみなき世を厭ふ便りに

學問は大事なれども實なくば

蛙や鳴くと人のきくらむ

## 正偏正に昇されし日

位山昇るもいかにあやうしな

法の燈もたぬ我身は

米澤極樂寺にて泉水の音を聞きて

永き夜の眠をさます水の音

かうべあぐれば有明の鐘

令法種増長の意を（生涯の弟子五十餘人）

法の種うゑつくものと朝夕に

心盡せしなでしこの花

法の園ならべうゑぬる其中に

我がなでしこの華さきにけり

## 冬夜閑居

石叩く水の音にぞ合せぬる

鐘を打たずに南無阿彌陀佛

油断すれば

一大事!!

耳鼻の障害が脳に直接重大な關係のある事は今更ら申すまでもなく、手當が遅れたために大切な脳を害し、一命に關する事が多い、されば輕症の中に効目本位の本劑で……

（全国各地藥店にあり）

廿錢・卅錢・五十錢  
一圓・二圓

大木五藏内本舖

大木合名會社

東京・神田鍛冶町  
大阪・東區淡路町

獨逸ポリツエル氏處方  
にして臨床實驗により  
各方面より賞讃さるゝ  
効果本位の特殊外用藥

定評ある  
効果藥

大木耳鼻藥



## 編輯後記

豫告いたしておきました通りの「念佛讀本」が出来上りました。か様な新しい形式と内容の下に、實社會の各部面に實際的に活躍しつゝある古豪、新進の宗教人を網羅し、一貫せる教義の諸要目を各々その得意とする處に據つて分擔し、平易明快を主眼とする講座を作り上げると云ふ事は、宗教雜誌としては且つて企て及ばなかつた處で、それだけに編輯部の苦心も並大抵ではなかつた。

◆この「讀本」を編輯した第一眼目は、正しい信仰、法然上人の念佛信仰を統一的に、平易明瞭な言葉で以つて、開示すると云ふことにあつた。淨土發刊以來十九號、その間、法然上人の偉大なる御人格、廣く深い御信仰を凡ゆる角度から拜察し、それが宣揚に努めて來たが、それをこゝで一應統一的な形で讀者に示し、信仰を得た人は勿論、得つゝある人にも淨

土信仰の全體的な見通しを與へ、信仰の歩みの上に一段の飛躍を求めんとしたことである。念佛のことならこれを見れば解る、あとの細目は實行を通して杓み取ることである、と云ふものを作り上げ度かつたのである。

◆次に考へられるのは目下の宗教的な社會問題である。所謂邪教なるものが、或る種の人心惑亂の隙に乘じ、現世利益、目先の物質的利益のみを追求する人間の弱點を利用して妖しき教義によつて、社會に害毒を撒き散してゐるこの情勢である。それ等の害毒は單に司直の手によつて芟除せらるゝを待つまでもなく、正しい信仰、本當に人間的な宗教を生々とした姿に於いて示顯せしむることによつて刈り取られねばならぬものである。宗祖法然上人の宗教こそが、これに對置せらるべき第一のものであるならば、この「念佛讀本」の企ての如きも必ずそこに一つの役割を持つべきであ

ると信ずるからである。

◆とまれ、この「讀本」のために、本號は特に頁數も殆んど倍にして、活字も読み易いやうに本文は全部五號總ルビを用ひ頭註も付けました。それは誰れでもが樂に讀めるやうに、且つ念佛の集ひや讀書會などで教材としても立派に用ひられるやうにとの心使ひからであります。卷末に付した「法然上人著作」は同様その道の權威の手になるものであつて上人の代表的な御遺訓集を讀むに當つて大いに參考になるものと信じます。

◆幸ひにして、この萬全を期した「讀本」が、讀者の信仰に一段の飛躍を齎らし、正しい信仰と宗教普及の一助ともなれば、われらの念願の一部は成就されたのであります。庶幾、この念願のあまねくみたされんことを。

本號に限り定價廿錢といたしましたが會員には従前通りの定價を以つてお捌ちしております。

淨土 十一月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可  
昭和十二年十月十日印刷納本  
昭和十二年十一月一日發行  
本號に（定價金二十錢）  
限り

編輯兼 眞野 正順  
發行人 赤尾 光雄  
印刷所 大日本印刷株式會社  
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三  
發行所 法然上人續仰會  
東京市芝區芝公園明照會館内  
振替 東京八二一八七番

## 「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢  
（送料一錢）  
一ケ年 金一圓  
（送料不要）

右の一ケ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。



新刊

中里介山著

# 法然上人傳

三六版二五〇頁  
九ボラルビ付  
美麗クロース装  
定價 六十四錢  
送料共

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から

法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を惱ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると思ひ、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園十五號地  
振替東京八二一八七

◇ 隣人の友社 發行所 ◇



# 講話

淨土信仰の眞髓は實にこの一文に盡く！

日本信仰史上に燦然と輝く法然上人の『一枚起請文』。この一文の中に籠る信仰の精神を知らずして、信仰の何んたるかを語るは潜越である。この簡潔流麗なる語句の中に脈うつ深く豊かな宗教の眞理が當代隨一の名講義によつて、解り易く讀者の心に滲込んで行く！

宗教講話に新生面を開いた名講義！

新刊  
來出

布教用書の  
最高峰

## 一枚起

## 請

## 文

本會は特に淨土信仰普及のため左の如き犠牲的奉仕をなす

一度に十部以上  
購入されるれば 一部當り 九錢 (送料不要)

寺院の布教用、工場會社等の修養讀物として、最適！

發行所

法然上人鑽仰會

振替……東京八二二八七

定價 拾二錢  
送料 共

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和十一年十月廿日印刷納本 昭和十一年十一月一日發行

淨土 第二卷 第十一號 本號に 定價金廿錢 (送料一錢)